

四年、江戸より還る時、岡山に岡田一江、姫井桃源を訪ひ、倉敷に岡元齡、延年兄弟を訪ひ、鴨方に西山拙齋を訪ひ、笠岡に小寺檜園を訪ひ、神邊に菅茶山を訪ひたり。拙齋、茶山は蓋舊知なるべし。檜園は、當時同伴したる龍山の紹介によりて、初めて相近づきたるなり。茶山の弟、耻庵も亦神交ありき。

廣島に在りて交際の深かりしは、加藤定齋、金子樂山、その子華山、坂井東派、金子蕉隱、宮崎木雞、僧觀牛、嚴島の野坂元貞、尾道の龜山伯秀、平田玉蘊女史等なりき。

江戸に來往するに及びては、柴野栗山、岡田寒泉、古賀精里、穀堂父子、岩瀬華沼、倉成龍渚、泉豐洲、廣瀬臺山、高田公嵩、三輪章齋、川合春川、市河寛齋、蠣崎波響、山村蘇門、佐藤一齋、梁川星巖、武居士亨等の師友、妙からず、雲石に遊びては、僧道光と會し、長崎に使用しては、武田眉山、檜林峽山、石崎鳳嶺、峯橋庵、長川輔仁、松浦東溪、鶴僧洲、僧白龍等を見、彼杵驛に草場佩川と會し、佐賀に穀堂を訪ひ、中原に深濠石溪を知り、長府に越鯉洲、國島等齋、結城確所等と會し、京都に遊びては、浦上春琴、中林竹洞、大倉笠山、貫名海屋、小石元瑞、大堀正輔、瀧原宋閑、田邊

伯表、僧雲華、江馬細香女史等と交りたり。その他、堂上にては、日野資愛、諸侯にては、白河老侯、松平定信、濱松侯水野忠邦、飯田侯堀親實の知遇を受けたり。和歌は、夙に馬杉考安の批點を受け、後、香川景樹を師としたり。文政十年、杏坪が、嫂梅颯等と京都に入りし時、姪山陽、杏坪に代り、詠草數冊を携へて景樹に入門したること、杏坪が景樹を訪ひて添削を受けたること、共に梅颯の日記に見えたり。

柴野栗山  
尾藤二洲  
古賀精里  
岡田寒泉  
服部栗齋

杏坪が最も尊敬したるは、栗山、二洲、精里、寒泉、栗齋の五人にして、皆當時の大儒なり。追懐の詩あり。

駿臺々上望岳臺、回首人間幾灰堆、欲見先生當日面、

三峰依舊出雲來、栗山先生

從容談話座泉比、濂洛正傳真善師、車馬不離門前柳、

在官猶似在山時、二洲先生

杏壇師道佑皇猷、蓮幕隣盟參廟謀、負重遠行君獨在、

世間無復萬斤牛、精里先生

客氣銷磨學術純、滿胸風月好精神、一門弟子摸胡瑗、

二郡蒼生借寇恂、寒泉先生

道體明通稱老儒、說來理一與分殊、麴溪院裡人亡後、

寂寞濂溪太極圖、栗齋先生

栗山嘗て雙生の竹杖を得て、愛玩やまず、杏坪をして詩を題せしめ、又、鳳梨筆を賦せしめ、また畫牛に題せしめたり。杏坪また嘗て三原の妙正寺に遊び、寄題の詩卷を披き、栗山の詩を見て、これに和したることあり。

雙竹杖詩

交莠丹藤曾所見、扶生綠竹始相知、混成全得天心妙、  
假造何容人巧欺、釐擊誰能辨兄弟、堅剛無復別雄雌、  
雁行愛汝連綿步、夔足笑佗勃窣姿、擔策荷琴均用力、  
尋梅穿柳輒同隨、訪朋雪路幽痕儷、蹈月涼階瘦影岐、  
縱擲雙龍化仙去、未分一馬借童騎、久留座押連還印、  
亂曳庭敷兩股絲、鶴膝齊垂懸壁處、蛇身長屈臥苔時、

林間挾鳥未爲拙、水下又魚亦自宜、節々半來千歲壽、  
竿々爭獻萬金枝、此君養老情何厚、異體同心苦護持、

鳳梨筆歌

天然臺上天然物、就裏最愛天然筆、辛夷形似徒得名、  
鳳梨今見其用實、化工何假蒙恬手、疑是兔毫月宮落、  
天生伊物果何意、欲卑先生資書札、先生書札亦天然、  
兩奇相得縱俊逸、臺上座濡東海瀾、天邊起掃西山雪、  
千龍萬蛇隨手奔、豈唯猖狂嘲風月、從容有時納嘉謀、  
毫端能言勝喉舌、那道此筆老間架、傳道濟世長不滅、

題畫牛

陂頭雨歇芳草句、村農放牛牧青春、鳥捷瞑目眠殘日、  
黃犢疎肩呼犢頻、世人視牛皆是牛、安知裡不有麒麟、  
時向牧人如有說、吾貌雖陋心却仁、願一緩耕天下田、  
大生穀粟濟飢民、牛音牟々誰能辨、葛盧死後世無人、

杏坪が栗山の永眠を悼みて詠みたる歌に、

ひろはれしかひありて世に老栗の

山とし高く名やのこるらん

といへるあり。精里を懐ひて、負重遠行と云ひしは、文化八年精里が林祭酒述齋と共に、朝鮮聘使を對馬に應接せしことを指すなり。杏坪送別の詩あり。

精里先生赴對州接朝鮮聘使賦此奉送

昌朝預喻憂民意、小隊輕行典客官、馬島鴻臚新官舍、

雞林鴈使舊衣冠、祗當大體存恩信、詎用微文開疊端、

太快猿郎虎吞後、文林白額攝三韓、

杏坪は屢々栗山の瓦臺、精里の復原樓に上りて、詩會に列したりき。

十月望栗山先生瓦臺集

殘楓晚菊上冬天、此夕琴尊陪綺筵、碧瓦霜飛臺上月、

翠簾日落岳顛煙、昌朝身體金蓮燭、閑境心遊赤壁船、

料識華堂人散後、縞衣來揖老神僊、

精里先生復原樓集分賦其十勝予得竹墩

瀟然一味碧、翻勝百般紅、春色枝々雨、秋聲葉々風、栽培真比玉、

芟艾豈同蓬、淇澳非凡種、兒孫各作龍、

龍消華沼豐洲臺山公嵩章齋等の追懷の詩あり。

奇論數卷輒驚人、談笑時能動四隣、只恨無人識真味、

閑鷗空對小樓春、龍濟翁○著  
對鷗樓閑話

鬻禿何妨無一毛、文章儻若戴山鼈、伊人東海難多見、

數尺苔碑名姓高、華沼翁

詩風日薄鬪新尖、古調誰能守謹嚴、南廓遺音君獨在、

不聞城北竹枝鹽、豐洲翁

深衣短劍雪鬚寒、真箇風流見肺肝、却恨丹青誤君了、

後人或做畫師看、壺山翁

城南久住一雁仙、詩語形容共灑然、赤羽橋頭騎鶴去、

總山空竦舊吟肩、

高田公嵩○公嵩  
詩曰、身瘦似總山、

矯性多年省佩章、琴尊愛客日依稀、可憐華表岡頭月、

空照橫松待鶴歸、三輪章齊

倉成龍渚

倉成龍渚、名は至、字は善卿、善司と稱し、中津藩に仕へ、進脩館の成りし時、命せられて、その學制を定め、又教授となり、詩文一家を成せり。文化九年、六十五歳にて歿しぬ。杏坪の長崎行は、その三年後に係る。路、周防に至り、始めて豊後の青山を望み、追懷して一詩を得たり。

倉翁刺口說豐山、自道瑰奇冠宇寰、前言今日無欺我、

海上遙排玉筍班、係鶴體、

岩瀬華沼

岩瀬華沼、名は行言、字は子言、勘平と稱す、華沼はその號、江戸の人、島原侯に仕へ、文化七年七十四歳にして歿しぬ。

泉豐洲

泉豐洲、名は長達、字は伯盈、斧太郎と稱す、豐洲はその號、江戸の人、南宮大湫、紀平洲に學び、平洲の女婿たり、文化六年、五十二歳にして歿しぬ。

廣瀬臺山

廣瀬臺山、名は清風、字は穆甫、周藏と稱し、後、雲太夫と改む、臺山はその號、美

作の人、播磨赤松氏の後なるを以て、源姓を稱せり。書を五岳に學びて、山水を能くしぬ。文化十年歿せり、歳六十二。臺山の歿せし時、杏坪墓銘を作りしに、寡婦その潤筆にとて、古墨を贈りたれば、杏坪感ずる所ありて、一詩を賦したり。

穆甫藏墨知幾年、非人磨墨々磨人、身後遺我一丸墨、  
開篋一觀却愴然、形圓有一二分闕、粗似十六七夜月、  
建元定款字可見、持花神人未失膝、穆甫之前在誰家、  
不知幾人被墨磨、今我不磨墨磨我、起說陶泓注銅莖、  
一磨已覺妙香散、須臾錦波溢硯面、笑展刻藤懸衰腕、  
墨色發光滿堂燦、料知神人亦心喜、始向人間伸殊伎、  
但恐汝身漸短瘦、精神用盡行將死、能者在世固有需、  
出則勞苦日爲懼、薰焚蠟燒誰不然、當用胡爲惜身軀、  
願吾惡札費寶磨、譬執鑿刀割胎炙、穆甫愛惜良有以、  
尤物由來待善價、

三輪章齋 章齋詩會をその家に催せし時、杏坪は龍渚、春川、臺山等と共に至り、詩あり。

人日、三輪章齋宅集、同龍渚、春川、臺山作。

前宵新夢見神仙、今日高人陪綺筵、半霽半陰將雪夜、

一寒一暖已春天、好枝窓印梅邊月、佳色庭浮松頂烟、

鬼藪過來值人日、馬齡慙又入羊年、

古賀穀堂

精里はもと佐賀藩に仕へたりしが、幕府に辟されたる後も、その子穀堂は尙藩に留り、教授の旁、漸く藩政に參與して甚だ力ありき。穀堂名は壽、字は溥卿、通稱は修理、穀堂はその號、天保七年、年五十九にして歿しぬ。杏坪が長崎の歸途、これを精街に訪ひて、詩あり。

曾聞精里出劉翁、此日榮城問長公、家傳正學書香遠、

國許殊勳劍氣雄、一院門牆雖尙質、滿堂書畫各爭工、

縱令輿馬匆匆去、帶得梅花半巷風、

穀堂嘗て山陽道を過ぎて、安藝の玖波驛に宿し、書を杏坪に寄せて告ぐるに、訪問の暇なきを以てし、一詩を贈る。結末に、傷心猶記趨庭語、渾沌社中獨有君、

の句あり、杏坪年既に老い、師友多く下世せるを以て、愴然として作あり。

玖波驛門夕繫馬、卸鞍乘筆寒燈下、一絨慙慙付何者、

杏坪老人名柔也、柔也衰殘益粗野、胡爲君懷煩縈惹、

君家千子膺純嘏、德行顏閔文遊夏、昔在洛攝求儒雅、

大講正學遏邪侈、當時我少寂陋寡、幸忝社盟蒙鼓冶、

爾來心交相披寫、以故君亦不我捨、每過蓬門舉杯筯、

或薦野鮮或山鮮、今年有事不賜暇、嚴程衝泥車沒輓、

爲裁瑤篇代手把、那同世俗情苟且、君學爵如千間厦、

能紹堂構豐廡庑、我才退類燒山楮、一髮不存空甜聞、

故友回頭皆燭地、先子墓上亦楸檟、非有君輩時掃搯、

箴砭誰醫老聾啞、羞吾昔日渾沌社、群玉碎盡餘片瓦、

市河寬齋

市河寬齋名は世寧、字は子靜、通稱は小左衛門、寬齋はその號、上野の人、江戸に出で、林大學頭の門に入り、昌平黌の儒職となり、後、富山侯の辟に應じて教授たりき、最も筆札に長じ、文政三年歿す、年七十二歳なり。杏坪挽詩あ

詩國由來無敵讐、醉鄉老復弘封侯、豈圖近日歌蒿里、  
 猶恨行年輪麥邱、傲具一厨無別貯、遺文數卷有餘謀、  
 凄然長覺淵明夢、菊枕香殘夜雨秋、世寧有醉鄉傲具等詩、菊枕曰寒宵雨細夢淵明  
 川合春川名は孝衡、字は襄平、通稱は丈平、春川と號す、美濃の人、紀伊藩に仕  
 へ、文化中、七十餘歳にして歿しぬ。杏坪嘗て一詩を寄せたり。

懷昨相呼泛墨陀、鄰船月下聽琴姿、忽忙裘葛幾回改、  
 杳渺魚鴻底書過、曾識添籌選算足、猶驚易簀誤傳多、  
 南行何日和歌浦、同和赤人蘆鶴歌、

山村蘇門

山村蘇門名は良由、字は君裕、蘇門と號す、木曾福島邑主の家、に生れ、世、尾張藩の附庸たり、蘇門夙に江戸に遊びて、經史に通じ、後尾張藩の執政たり、後仕を返へして、江戸に出で、寛政十年、歳五十七にして歿せり。杏坪嘗て蘇門が贈る所の詩を見、また流觴遊を爲せしことを聞き、これに酬ひて曰く、  
 望姓久聞稱山村、世鎮蘇關隸親藩、方今海内雖囊鞬、

猶據天險守外關、峽水卷石白龍奔、層嶂攙天正午昏、  
 豈知此地兼達算、風流况富令子孫、闔家臣僕皆能言、  
 一月著作百毫髮、鑽鑰告老辭北門、來在江都主林園、  
 聞道暮春會諸昆、大擬蘭亭千古痕、恨我賸遠習乾坤、  
 徒令右軍入夢魂、

と、以て蘇門の小傳と爲すべし。

佐藤一齋

佐藤一齋名は坦、字は大道、一齋はその號、通稱は捨藏、江戸の人、嘗て大阪に來りて、中井竹山に學び、また京都に赴き、尋いで江戸にかへり、林述齋の塾長となり、幕府の儒員となり、安政六年、八十八歳にて歿しぬ。杏坪の江戸に在りし時、一齋の觀花記を得、携へて廣島にかへりしが、これを失せしてとて、詩を作りて陳謝したり。

藤子觀花有二記、亦是東方妙文字、昨在江都獲雙珠、  
 千里齋還誇我徒、仙筆一夜飛入雲、千呼不回空脚蹠、  
 得非花神陋我屋、卷懷東歸收舊篋、僅有警句存胸臆、

時々回首望天角、老來無復遊遠年、龍鐘一臥十餘春、  
金橋杉田夢空往、花時幾回憶君文、欲作短歌代謝簡、  
詩力衰邊舊嶮嶮、雪刺燃盡夜已深、閑花開落小燈檠、

梁川星巖名は卯、字は伯兔、詩禪と號し、後、名を孟緯、字を公圖、號を星巖と改む、美濃の人、江戸に出で、古賀精里、山本北山等に學び、詩を以て名あり。その妻紅蘭と相携へて、四方に歴遊し、安政五年、七十歳にして歿しぬ。杏坪嘗てこれを夜聽亭に訪ひて、詩あり。

一痕霜月在茅檐、村釀野蔬都不嫌、江亭更有潮聲好、  
太勝樓頭昔々鹽、

また

原知覆載同胞、况復金蘭熟交、霜後南園晚菜、月前北市新醪、

宮原龍山

宮原龍山名は彬、字は樂夫、龍山はその號、伊豫の人、初め西依成齋に學び、後江戸に出で、服部栗齋に師事し、杏坪と同窓たり。松山藩主松平定國に擢でられて、藩校明教館の教授となり、文化八年、五十三歳にして歿しぬ。

松平定信

松平定信は、田安宗武の子にして、白川の松平定邦の家を嗣ぎ、越中守と稱し、老中となりて、寛政の改革を斷行し、又、栗山、二洲、精里等、所謂三博士を登用し、大學頭林述齋を助けて學政を擴張し、文政五年、職を辭して、後は、樂翁と號し、文政十二年、年七十二歳にして卒しぬ。江戸時代第一流の人物にして、事業極めて多かりき。子定永、つぎて封を桑名に移され、以て維新に及べり。文化元年五月十四日、定信、廣島藩主淺野齊賢を江戸霞關の藩邸に訪ひしに、齊賢歡び迎へて、宴を春秋園に張りぬ。會、谷文晁至りければ、杏坪と共に二侯に陪從し、文晁は畫を作り、杏坪は詩を題し、清興湧くが如く、杏坪命を受け、我有嘉賓、德音孔昭の八字を大書せり。定信謝してこれに居らず、更に赤壁前賦の數句を書せしめ、又自ら輿に乗じて揮毫したりき。齊賢、後日書を定信に請ひ、その一紙を執政山田俊爲に與へたり。雲煙過眼、百鳥感耳の八大字なり。兄春水、俊爲の爲めに事由を記せり。當時杏坪より俊爲に呈したる書狀、廣島西川氏屏風に在り、樂翁の八大字を解すること親切にして、道學者の本色を發揮せり。

先月十四日白河侯御出被成候付私儀被爲召罷出申候手跡御所望にて仕候候も御書き被成候嘸其節之儀委細御聞被成候と奉存候故略仕候其後候御手跡御所望被遊候に付私へ好き語ゑらび差上げ可申旨被仰付候故色々相撰差上申候五六枚御好之通出來仕候て參り申候右之内壹幅御内へ御拜領被成候様に承り申候雲烟過眼百鳥感耳と申候語は蘇氏の文章にて寶繪堂記と申内の文にて御座候此語は古畫を見申候てもソレへ心の泥不申候様に見流しに仕候て少しも心の病に相成不申候様こと戒め申たる意にて御座候雲烟小鳥の聲を聞く様と心得可申との意に御座候故其段御上<sup>賢</sup>へも申上候儀御座候右之文字を御拜領被成候儀いか成思召にて被爲被有候や難計奉存候御賢考可被爲成候内密申上候

堀親寶

堀親寶は信濃飯田藩主にして大和守と稱し室水野氏は越前守忠邦の妹なりとぞ忠邦が天保改革を計畫せし時夙に擢でられて御側御用人となり若年寄に進み幕府の財政を掌りしが忠邦の失敗と共に職を免せられ子親

義に一萬七千石を給せられたり。杏坪嘗て西野詩佛五山と共に親寶の招飲を蒙りたることありて詩あり。

疇昔看花黃四娘、豈圖今日上公堂、吟哦難得口頭句、

酌酎未辭藍尾觴、二月餘寒保芳久、一年閏月引春長、

誰知此裏耽幽趣、車馬門前幾闌裝、

蠣崎波響

蠣崎波響名は廣年字は世祐通稱は將監波響はその號松前藩主の家に生れ出で老職蠣崎氏を嗣ぎたり。京都の人、大原春響松前に在りし時就て學び、また宋紫石にも就きて花鳥を能くし、後應舉の門に入りたり。杏坪の江戸に在りし時交を訂したりと見え、その書を乞ふ詩に、廿歲雁魚嘆淪塞の句あり。文政九年歿す、年六十三歲。

有馬息焉

有馬息焉名は照長字は子成、織部と稱し、息焉と號す、本姓は吉田氏、世久留米藩主有馬氏に仕へて大夫たり、よりて有馬氏を稱することを許さる、嘉永四年七十一歳にて歿しぬ。息焉、樺島石梁に師事し、詩歌書畫を能くし、江戸に在りし時、汎く天下の名士と交りたり、一番の學に向ひたるは息焉の盡力



によること多しといふ。其居る所を洗心堂といひ、杏坪爲めに記を作れり。杏坪嘗て息焉の詩を得、これに和して、

舉世傲然爲酒須、幾人淳古守廉隅、一官吾尙縻民寄、  
千乘君原輔國謨、只倩鴻魚通尺素、何將花月共行厨、  
曾遊諸友今安在、半跨鶴鯨過五湖、

筱崎三島

筱崎三島、名は應道、字は安道、通稱は長兵衛、三島はその號、又郁州と號す、その父は伊豫人、大阪に出で、商業を營む、三島その業をつぎ、後儒となり、帷を下す、子なきを以て、門人加藤弼を養ひて嗣とす、弼字は承弼、通稱は長左衛門、小竹又は畏堂と號す、小竹江戸に出で、精里の門に遊び、後歸りて父に代り教授す、文化十年、七十七歳を以て歿せり。杏坪嘗て三島を大阪に訪ひて詩あり。

筱崎小竹

江雲釀雨滿華城、行客停輿問舊盟、追憶曾遊都似夢、  
相逢今日不勝情、窓前樹石多知面、門外橋梁半記名、  
故社卅年零落盡、殘星一點照人明、

小竹は、杏坪より少きこと二十五歳、杏坪の姪山陽と親善なり。文政十年、杏坪が嫂梅颯等と上京するや、山陽大阪に出で迎へ、小竹と共に舟遊し、唱和せり。小竹の詩は

別來三十有餘年、忽聞翁來喜欲顛、扶上輕舟賞春色、  
江花江柳共欣然、問舊爲鬼休出口、子姪如龍能勸酒、  
明日三日又舟遊、好載醉夢入皇州、

杏坪これに和して、

賜告十旬樂暮年、謝汝迎老苦扶顛、更有良朋通家子、  
津上風物不蕭然、江魚枕丁亦愜口、一椀既醉丹釀酒、  
酒醒無端悲昔遊、江山無恙古皇州、  
昔遊、言筱安道、  
葛子琴語亡友、

杏坪が京都より歸藩の途、再び大阪を過ぎければ、小竹又前韻によりて送別の詩を賦したり。

通家垂愛辱忘年、幾度陪飲容狂顛、十旬逢迎如一瞬、  
臨岐難奈共黯然、鞋襪相送出巷口、重欲同醉伊丹酒、

醉臥夢中尙同遊、直過播磨入莖州、

杏坪の詩は、

暫似放翁在蜀年、碧雞坊裏喚花顛、花落又逢歸國日、

昨日狂態今酸然、已羞蕪辭濫發口、後恨貪腸別丹酒、

最爲良友難再遊、三日猶未出攝州、

後藤松陰

『春草堂詩鈔』の出版に際し、小竹校訂の事に當り、又その序文を爲れり。詩鈔は、蓋、山陽の企てたる所、山陽叔父に先ちて歿せるを以て、こゝに及びたるなり。詩鈔の跋は、後藤松陰の撰する所、松陰名は機字は世張、俊藏と稱す、美濃の人、山陽の高弟にして、文政元年、山陽が九州に遊ぶや、松陰これに従ひ行けり、後大阪に住す、小竹の女婿たり。京都、山口松香氏所藏、杏坪書は詩鈔發行に關して二人の盡力したる趣を見るべきを以て、『手紙雜誌』第六卷第一號より抄出す。

季冬念一日發貴書、今月廿一日至先、以新正めて度奉存候御揃御安佳御加年可被成欣慰之至候、愚老無事加馬齡候、扱摺帖御煩申上候處、早々御

買下し忝致入手相悅申候餘金も受取申候段々御煩謝候、拙詩鈔○春草堂詩鈔序、岳翁○筱崎早々被成下、忝奉存候御趣、向等珍敷奉感、但御過獎、悚見之至ニ御座候、東坡集之通典、故書出し可然事、翁よりも縷々被仰下、いか様左様に可仕候、其處々朱箋にても御附被下、様にと先書申上候事に御座候、貴兄御校正被下、御苦勞、忝奉存候、右典故註出之ヶ處、乍御苦勞萬々御えらせ被下、度奉囑候、其外御心附之事、無御遠慮、何にても御見當り之事、精々可被仰下候、右又々拜答如此、御座候不備

正月廿六日

賴 杏 平

後藤 俊 藏 様

尙々先便龜齡軒たのみの拙書御入手被下候、由尙又此度之分四幅塗鴉御入手可被下候、御潤筆百疋致拜納候草々

山口剛齋

山口剛齋、通稱の恕介、大阪の人、飯岡義齋の門なり、津和野藩主龜井氏の藩校養老館を起せし時、剛齋を引きて教頭と爲し、かば、剛齋は大いに儒學を振はし、釋奠を始めたり。杏坪剛齋を懷ひて歌あり。

石見とは聞くさへつらき名なりけり

あふことかたき國にもあるかな

剛齋の孫、慎齋、名は弘顯、通稱は顯藏、來りて杏坪に學べり。

西山拙齋

西山拙齋、名は正、字は士雅、備中鴨方の人、醫術を古林見宜に學び、儒業を岡白駒及びその外孫那波魯堂に學び、和歌を伴蒿蹊、僧澄月等に學び、郷にかへりて宋學を主張し、書を栗山に贈りて異學を禁せんことを勤めしが、寛政十年、六十四歳にして歿せり。天明四年、杏坪が江戸の歸途、拙齋の至樂居を訪ひし時は、拙齋は正に五十歳に達したりき。二子あり、慎といひ、謹といふ、慎字は孝淑、醫を業とす、謹字は孝恂、儒學をつぐ。杏坪が西山を追慕してよめる歌あり。

隠れても細谷川の清き名は

流れたえせしきひの山人

ありてかく操や高き西山に

採りし薇の色のゆかりも

小寺檜園

小寺檜園、名は清先、常陸介と稱す、檜園はその號、家世々備中笠岡稻荷の祠人たり。檜園少時京都に遊びて、神道を學び、郷にかへりて書を敬業館に講せり、又和歌を嗜み、僧澄月に學ぶ、家集あり、文政十年歿す、年八十。拙齋、茶山等最も親交あり。碑文は杏坪の撰する所、子清之、廉之等ありき。杏坪嘗て清之が笠岡にかへるを送りて歌あり。

眞金ふく吉備の中山へたつとも

心のかよふ道なからめや

菅茶山

菅茶山、名は晋帥、字は禮卿、太仲と稱す、備後神邊驛の人、拙齋と共に魯堂に學び、郷に還りて、廉塾を開き、子弟に授く、拙齋の歿後、近國の書生多くその門に集り、詩名最も高かりき。後、福山藩の賓師たり、大目付に進み、文政十年八十歳にして歿す。二弟あり、長を汝卿といひ、季を晋葆、字は信卿、耻庵と號す、共に兄に先ちて歿す。汝卿の孫を惟繩といふ、字は照叔、自牧齋と號す、通稱は三郎、茶山よつて嗣とす。『黄葉夕陽村舍詩』杏坪に關するもの多し。今その二三を掲ぐ。

寄賴令時行郡在某村

山村聽訟座松陰、判語時和爽賴音、借問風流新令尹、可無公事入幽吟、

即事寄賴郡宰千祺

小兒爭果鬪門前、和解何須胥吏權、久見大邦勤惠恤、還知微隙竟寬蠲、白圭非是壑隣國、石勒徒勞安老拳、東海如今西伯在、正宜虞芮議間田、

賴郡宰千祺年濟七十、不肯開壽筵、謂俗禮幾兒戲、不欲恻焉、子姪親朋群來勸之、強而後可、去年所部生稻兩岐、皆命修國乘、因併及之、

身宰四郡任偏重、部生嘉禾治可知、史修兩邦重又重、職在總裁豈可辭、繁務鞅掌人所難、君獨綽々無勞疲、會友轟飲每厭々、吟成揮筆走蛟螭、謹勤不懈志所執、強健不唯由天資、宜矣郡從頌松柏、休謂祝壽伴兒嬉、我齡太君既一紀、衰老痴於甌童痴、隣叟童顏近百歲、

未知人間有宜尼、在世祇足供人笑、亦各誕辰舉壽卮、操刀製錦稱能手、搗藻如花氣未衰、况乃文獻補闕漏、儘存典刑長可師、多才多福有如此、非頌君壽好頌誰、

これより先、茶山七十、杏坪詩を贈りて曰く、

新年第一信、到手喜何勝、表識梅花牋、魚雁印封棧、開緘如相對、  
誨言而奉承、行文雖襍諧、懇款覺年增、筆蹤輕且勁、分明知手賡、  
往々加夾註、字細如聚蠅、因審老益壯、反羞我費費、自道宿病在、  
七秩僥倖升、人謂君稱病、仙骨本峻嶒、自號茶山叟、可擬學士曾、  
家塾扁曰廉、固非取於陵、笠釣時臨水、倦歸檢籤牋、所思發歌闌、  
洋渺含規繩、譬猶萬頃田、內自列畦畦、軟語宜諷諫、直辭須服膺、  
方今多詞士、群雀畏蒼鷹、詩豈盡君道、恨世以此稱、縣尹或咨訪、  
州侯接茵憑、我幸爲所許、切慙辱友朋、一朝非溫舒、繆爲山邑丞、  
竭來久離索、舊學嘆蒙菴、獨有尺素傳、君子不我憎、我寧可忘舊、  
遐齡祝不崩、縱我爲長庚、固難追月恒、君能爲松柏、願言引弱藤、

茶山を挽して、

可惜茶山一老翁、焚香空敬舊南豐、無官優給揚州鶴、  
 有用深藏藥店龍、寂寞春川藤笠雨、蕭騷秋野葛巾風、  
 樂天無子天何意、獨使詩名滿大東、  
 嬰鑠何圖入九原、詩胸猶欲五湖吞、二篇佳什世俱誦、  
 八秩遐齡鄉所尊、湖草新生和靖墓、行人猶指放翁門、  
 學徒一去書帷闕、惆悵夕陽黃葉村、  
 茶山を追懷して、

使我縱無車笠勞、非君誰作漆膠交、閑飲屢陪彭澤醉、  
 苦吟同受飯山嘲、窮閭塾古數間屋、遺稿詩新千首抄、  
 黃葉村南人去後、每逢花月獨推敲、

又歌あり、

冬の頃ことつけて茶山叟におくる  
 木の葉ちる冬しもやまとから歌は

時はいつはと見かすまけらん

茶山叟癡をやめると聞て人つかとしてとへりける序によみて送る

見すに思ふ我心をも涙みて知れ

君か病のあさかれとのみ

晋帥ぬしをおもひやりて

花と竹つゝくつゝみの長き日に

小笠かたふけいをやつるらん

菅晋帥を思て

いと橋のかみなみの里に君おれと

あこねは遠し戀渡りつゝ

杏坪嘗て茶山の爲めに石を畫き、春水これが替を作りたることあり。

嗟我弟兄具頑骨、畫成頑物寄同人、同人不是寶燕石、

愛玩應憐頑骨眞、

第九師友

春水の歿後、杏坪姪山陽をしてその遺稿を刻せしめんとし、序を茶山に求む、  
文政六年三月序成りたり。四月廿二日、杏坪の謝狀あり。

先以御禮可申上ハ亡兄〇春水文集の序早速御起稿被成下御垂示忙手拜  
誦仕ハ先々御趣向とかくなく奉存ハ何分早速御作り被下候處何より  
感荷仕ハ

同年十月六日、杏坪、山陽の子聿庵と連署して、遺稿の添削を茶山に請へり。

(上略)亡兄〇春水事御案内之通詩文共一向鍛鍊不仕出まゝ作すての流儀  
に御座候へば一篇も無瑕之物は無御座候甚以愧入候次第に御座ハ得  
共性質之真面目、致方も無御座候それとも格別之不取束藏拙仕度必無  
御用捨御添削被成可被下ハ

茶山もその需に應じて、雌黃を加へたることありと見えて、文政九年正月十  
九日の杏坪の書狀に左の如く云へり。

(上略)先以亡兄遺稿早速御一覽被成下御附紙之所も名々御尤奉存候直  
し候様仕せ可申もとや此餘は京〇山〇へ遣しアノ方にて相定ハ様可仕

(下略)

此等の書狀は、文政五年冬、杏坪撰する所の、春水遺稿附言と對照すれば、一層  
此間の事情を明にすることを得べし。

管 耻庵

耻庵歿して後、杏坪僧六如の詩韻をふみて悼詩を作れり。「思昔與子宿薇江、  
山水碧處聽欸乃、又思鴨縣西山熟、代師講經同寮案、西遊嚴島訪吾廬、細酌微吟  
晨夕每、追懷都作一場夢、空認餘芳戀枯莖の句あり、又、文章を讀みて一詩を賦  
せり、共に『春草堂詩鈔』に見ゆ。以て兩者の交情を知るべし。

茶山の嗣、自牧齋少時杏坪に三次に従ひたることあり。その家を繼ぐや、年  
尚壯ならずして學未だ成らざりしかば、杏坪退隱の後も爲めに其善後策に  
腐心したることありて、杏坪の爲人も大いに見るべければ、嚴島、河内一郎氏  
所藏の書狀を掲げて、その一斑を示さん。

副啓 茶翁之被成置候通りに廉塾へ賓師を被招三郎も生徒も一同  
に稽古も相成候事兩全の策にて候當時可招之人は無御座候哉近年  
居候人はいかゝ西山孝恂〇拙齋〇など時々招待可相成、去年も尾道來

遊も有之由承り候いか、是も色々案候故存出申候又小寺帶刀は名  
之之槽園の子備中笠も可有之候是等隨分可應招候○趨庭しいまた得  
聞斗拜見得不在候

此節之大雨暴漲にて脚夫もいまた得歸り不申候哉書狀も取に不來仍  
之愚老よりも又一書裁呈先日此方より上り候御返事忝致拜見候愈御  
安和欣慰々々求肥○牛皮之賜多謝々々例之御近詠も拜吟いたし漫吟  
ひゆる／＼御覽可被成候扱菅生○菅事細々被仰下候母公之心底も察  
入万々御尤に御座候此方にては通家之事故被仰下候迄も無之段々申  
値候儀に御座候第一私宅に差置寐留り當所にては一切願も不叶内々に  
て置候も上へ近く候故其儀も不相成且極老衰申立退役願出候儀故廣  
く教授之事の相成不申私もまた實に老憊相増し三次之通世話も出來  
かね申候菅生は若もの不檢束も有りうち之事ながら當所○廣は他所  
もの之事はいろ／＼と公私共評判いたしそのもの引よせ候人の取沙  
汰に預り候地風に候へば外宿之事悴なと甚きのとく氣遣申候上京之

事は廣府にてさへ氣遣なるを京へ遣候事いか、と一應不審も可有  
之候へ共久太郎頼山方方なと諸方之歴々書生も集り候へはそれを見習  
且切磋めぎつけられ候て大に田舎風之改り候事も可有之哉と悴など  
が考に候是も不得止之上の考にて一理有之候故御勸之事にては決て  
無御座候へともいろ／＼御案勞いたし候上の一策にて候それとも格  
別之謹慎を加へ當所へ御越し可被成候哉見受候所丈夫之質とも見不  
申候謹慎にては病身にも可相成候哉それに平生大飯豪食にて又病身  
に成、不養生にもならんと家人などは内々三次にても氣遣候様にも聞  
へ候菅家大切之子故いろ／＼に案勞無伏藏申上候何卒宜しく御相談  
被遣は様自私も懇祈此事に御座候尙御考合御様子も有之候ハ、幾度  
も可被仰下候菅生平日顔色なども不宜丈夫たちとも見不申旁母公之  
心底致深察候御面語之節万々宜御傳達可被成下候頓首

五月九日

老を告てつかへをかへすとてよめる

と、まらん時たに知らは世々のなみ

こえやはすへき末のまつやま

あるかひもなき身なからもけふまては

まくらの數に入りぬるものを

わか身今何にたとへん啼やみて

ふる巢にかへる去年の鶯

耳のいたく聞えされは戯に

ありをうしと聞つる耳もあるものを

神も蚊ほとになりにけるかな

御一粲可被下候

たゝなこ

覆

木村國手

杏坪

玉展

金子蕉陰

金子蕉陰、名は璋、字は熊介、廣島の人、文化五年十二月七日、三十三歳にして

歿せり。夙に春水に學び、詩を善くし、杏坪甚だこれを親愛せり。春水の江戸に赴くや、蕉隱從ひ行くことゝなりし時、杏坪餞別の詩あり、詩に「予嘉汝奮飛、欲令成大器、且忻從吾兄、畏途扶顛躓、自非汝從行、何以安我寐」の句あり、また共に詩を論じて、梅花詩六首を作りたること等ありて、「詩鈔」往々蕉隱の字を見るべし。享和二年十月望、坂井東派と共に蕉隱を訪ひ、山高月小、水落石出を以て韻と爲し、赤壁後賦の字を限りて詩を賦したることあり、杏坪の詩江戸に傳はり、栗山これに和韻したり、精里杏坪の詩を評して、溫雅にして古愚館の諸子に譲らずといへり。

坂井東派

坂井東派、名は積、字は善夫、通稱は孫三郎、天保五年二月廿一日歿せり、年六十三歳。その子に虎山あり。

金子樂山  
金子華山

金子樂山、名は忠福、源内と稱す、加藤十千の高足にして、廣島藩儒たり。文化二年、八十七歳にて歿せり。その子華山、名は忠周、字は子郁、希三と稱す、父の職をつぎて廣島藩儒たり、文化十三年十二月十六日、五十五歳にして歿しぬ。杏坪挽詩あり。



衰來聞訃輒心驚、况復同官舊友生、二酉圖書參夜課、  
上丁筭肉伴春羹、回頭君已重泉客、屈指吾猶數歲兄、  
東岳門前風雪夕、却將老淚送丹旌、

宮崎木雞

宮崎木雞名は維翰、字は羽卿、通稱は與三郎、後、圭藏と改め、木雞と號す、廣島  
の人世商賈を事とす、木雞人と爲り風雅、深く詩歌を嗜む、天保十四年九月二  
十六日歿す、歳六十二。杏坪が三次に在るや、木雞の來り訪ふあり、會九月十  
三夜なりしかば、共に月を賞して作あり。

秋深舊府客過疎、那料良朋叩麻廬、雞黍今宵聊供食、

鱗鴻佗日幾勞書、風寒遙野傳鳴鹿、水靜前灣聞躍魚、

天老爲君如有意、不教茅瘵月光虛、  
番馬雜編、八九  
月爲黃茅瘵

また嘗て共に江波に遊びて作あり、

城南春已盡、風物尙餘饒、江貝燒瑤柱、沙魚煮麪條、漁家垂柳步、

村馬落花橋、始覺歸帆晚、前洲沒夜潮、

杏坪の三次に在りし時、一瓢を得てこれを木雞に贈りたるもの、傳へて宮崎

僧觀牛

氏に在り。金泥を以て是三次在任所獲、遙寄木雞居士、供吟酌、杏幡と書せり。  
僧觀牛、名は瑞明、觀牛はその號、廣島西福院の僧なり。詩歌を能くし、又畫  
に巧なり、晚年備中空岡に住しぬ。杏坪、閏八月十五夜、月を西福院に賞し、分  
韻して詩を賦したり。

諸天風雲舜若多、樓臺現出乾達婆、頑陰君碎鉢如意、

素影吾持金叵羅、橫空鴈行催文字、滿砌蟲語助吟哦、

此夕賞遊如舍閨、銀蟾玉兔謂我何、

杏坪の京に遊びし時、春曦樓に會して分韻し、觀牛等に留別の詩を賦したり。

吟鞍不出十餘年、始向五畿煙水間、孤客京城花滿日、

回頭却望故鄉山、

樓は廣島中島、小野氏の家に在りき。觀牛の東遊するや、杏坪送別の詩あり。

虎溪久住鴈門僧、案上楞嚴夜々燈、一日出山向何處、

或過彭澤或少陵、到處人如有問我、潁川未逐老聾丞、

觀牛後京に入りて山陽に面しこの詩を示しぬ。

野坂梅園

野坂梅園名は元貞字は子幹梅園はその號左近衛將監と稱す嚴島神社の祠人にして家世棚守職たるを以て棚守氏ともいふ。和歌を能くし、その居を名づけて鹿猿居といふ、天保十三年歿す、年七十四。廣島、藤井德兵衛君、杏坪の書東一卷を藏す、その中に、左の一通あり。

拜見御風邪之由御當分事と存候扱此間宮島へ御渡り旅宿御尋被下候由忝存候然る所水にあたり候と見へ二日夜より大腹瀉に成りこまり仍て三日午後上船歸宅いたし候御同遊候へばいか計面白可有之遺憾甚深候御詩作被下忝存候、草々一閱返進詩は是にても相濟御歌御見せ被下候は、御返しもよみ可申候歟愚老は右之仕合故何も出來不申候慙愧慙愧、棚守へ、一夜閑話富士の歌など承り候、草々

三月八日

この書宛名を缺けども、德兵衛君の祖父、三峰和堂兄弟の中、孰れかにして、書中棚守とあるは即ち元貞なり。梅颺日記によりて考ふれば、この事、文政三年、杏坪六十五歳の時にして、日記には、二月廿九日嚴島渡海、三月五日歸とあ

り、家集に當時の歌あり。

嚴島に渡りて花を見るうた

山ふかく入らすともよしいつくしま

波にもかゝる花のしら雲

二王門の柱にかきつく

いかめしく並ひてたてる門守も

花には笑みて人なとかめそ

時雨櫻といふに雨のふる日ゆきて

ふれはうしへしてもゆきて見はやさん

時雨櫻はぬれすやはある

家集に、次の一首あり。

嚴島棚守某が鹿猿居といふを營みて住ひけるによみておくる

世の外になれて君こそ見きくらめ

鹿の啼くこゑ猿の手つかひ

嚴島、瀬田愛三郎氏、杏坪と元貞との和歌の双幅を藏す。

自嘲

とりをたも割得す我は老にけり

牛の刀のつかひかたなや

杏坪翁自嘲のうたに答へまつる

元

貞

君はよもとりのかしらになすとも

牛の後へに誰か置くへき

自嘲の歌は、茶山に與へたる書中にも、述懐と題して送り、三次、有田長吉氏所藏の畫像にも題したり。

野坂元隆君家藏の書狀は、天保二年杏坪が嚴島に避暑して、梅園に滞在したりし時の禮狀にて、書中、葦手解のことを云へるは、今、國寶となれる嚴島神社の葦手繪楡扇の解にして、『嚴島圖繪』卷六、田中芳樹の葦手考に引ける、元貞の説は、蓋その大要なるべし。杏坪が、これを竹館公子の覽に供へたるは、一は以て公子の見聞を廣くせんとし、一は又元貞の博識を上達せんとてなるべし。

吉村氏○名晉渡海之由承り一書拜啓時下炎涼之交御闔家愈御佳安可被成御座候欣慰曷勝愚老無恙罷在候先以先月は御別莊長留宿日々御世話相成候段御謝難申盡候歸後早速御禮可得貴意候處、盆前後又々殘暑に困倦水樓へ罷越し八朔迄滞留いたし申候且かの葦手之御解義竹館公子○淺野へ差出し申候處ことの外御賞美久々御留置、御寫しにも相成旁以御下ケも無之不圖返還延引仕候今日御下ケに付吉村へ托し候御入手可被成下候今日承り候へば惠美家に有之葦手御解も御考被仰下候由定て此節御考可被成と石井内外より傳承り申候唐人法帖も此便返璧仕候數々忝奉存候  
右可得貴意勿々如此御座候猶後音可申上候頓首

八月十三日

杏

坪

杏坪又詩を賦して梅園に謝したるもの、今、野坂氏に傳はる。

神洲自古比蓬瀛、况復名園絕世情、苔蘚地幽繁鹿跡、

烟波社舊會鷗盟、鼓聲隔樹鳥猶靜、塔影入池魚不驚、

多謝主人能慰老、朝暉暮醉樂餘生、

龜山紀綱  
同伯秀

龜山士綱、字は紀卿、本助と稱す、尾道の人、鳥居實齋、菅茶山、若槻幾齋に學び、人物德行一郷の仰望する所たり、杏坪の『藝藩通志』を著はすに當り紀卿に囑して『尾道志』を撰せしめぬ。文政十年、五十八歳にして歿せり。杏坪その碑文を作りぬ。その子爲綱、もと長綱と稱す、名は松、字は伯秀、夢硯と號す、通稱は元助、文久三年、六十七歳にて歿しぬ。風雅乃父の趣あり。杏坪嘗てその夢硯樓に寄題して、詩ありき。

浦雨夜深短燈檠、讀書倦時一夢成、維夢所見果何物、  
人贈端硯甚分明、摩挲數回未釋手、夢驚四檐琴筑聲、  
覺後自欲記此祥、遂以夢硯命樓名、後來果獲一古硯、  
勞髡夢裡紫玉泓、杏翁聞之心太喜、新歌一閱賀龜生、  
不唯文章自此進、一靜學硯致百榮、損身破家皆由蹻、  
禁躁守靜保汝貞、晨昏相對思斯言、奚必硯背別刻銘、

若作風流玩好事、恐是一場占夢評、老子何日遊玉浦、  
飽磨樓上小金城、

平田玉蘊

平田玉蘊、名は豊、玉蘊はその號、尾道の商、福岡屋新太郎の女なり。父新太郎、名は元壽、字は子齡、五峰と號し、散樂及び丹青を好めり。玉蘊も、亦幼にして繪事を好み、八田古秀を師として、花鳥人物を能くまぬ。安政二年、六十九歳にして歿せり。杏坪詩あり。

寄玉蘊女史

螺髻燕釵水樣新、幽窓深鎖背青春、臙脂買得知何用、  
滿頂丹沙寫鶴真、

平田氏古鏡歌

曾聆玉浦一豪姓、邑裏赫然稱卓鄭、一朝家難蕩舊產、  
寶厨空餘古名鏡、菱花鸞龍世非無、比之他鏡韻度負、  
千金小姐字玉蘊、零丁養母守孤繁、丹青絕技逐年工、  
一時聲價四方送、誰料纖々柔荑手、筆力陵嶮驚老硬、

因知天奪財貨富、換付後生才華盛、日詆兔毫萃鞞材、  
 甘旨奉母勸温清、秀異却恨乏伉儷、冰人孰能謀婚娉、  
 金鈿銀笄非所願、獨撫古鏡持潔行、古鏡雖奇昏如煙、  
 晨窓詎用照粧靚、幽姿端形物相待、愛玩向人覓題詠、  
 我亦爲製古鏡歌、一閃銜口應汝請、鏡兮鏡兮如有靈、  
 爲汝辟邪來福慶、

僧道光

僧道光名は日謙、道光はその字なり、大阪の人、俗姓は日野氏、京都に學び、出雲平田の報恩寺に住せり。性詩を嗜み、京都に在りては僧六如等と交り、備藝に遊びては、西山拙齋、賴春水兄弟、菅茶山兄弟と善かりき。文政十二年、歲八十四にして寂しぬ。文政三年春、杏坪出雲石見に遊ぶや、宍道湖を渡りて一詩を贈れり。

多年徒展雲州圖、今日來投山水都、先買小舟換欸段、  
 將求新飯炊彫胡、道潛已住智果院、景文未卜甘棠湖、  
 君若容吾老饑了、秋風重飽松江鱸、

時に杏坪年六十五にして、道光は七十五、二人終に再會の期なく、重ねて松江の鱸に飽くこと能はざりしなり。道光嘗て欸冬を食ひて腹痛を癒したることありて、爾後毎日これを食へり。杏坪おもへらく、その事略、東坡集食蜜歌に似たりと、よつて又一詩を贈れり。

聞宋安州有僧殊、食蜜遂以蜜殊呼、詩出於蜜々不如、  
 誦之味甜使人娛、今吾雲州有光公、四時晨夕食欸冬、  
 誰知欸冬勝參芪、嬰轢七十五老翁、此物堪寒味原苦、  
 苦裏帶甘有妙處、光公一肚皆欸冬、縱橫吐出甘苦語、  
 滿世之人貪膏粱、焉知雅澹有別腸、今吾欲沿蜜殊例、  
 呼公呼做欸冬光、

武田眉山

武田眉山名は文、作八と稱し、峨眉山樵と號す、長崎聖堂の儒員なり。文化十二年、杏坪これを聖堂に訪ひし時、眉山詩あり。

桃腮柳眼報春中、燕柏鶯梭欲競工、溫潤人來安座語、  
 不寒不暑午時風、

杏坪これに和して詩あり。

冷泉瑰樹遠芹宮、子弟多看文藝工、今日朋來君亦樂、東南曾恨馬牛風、

僧鶴洲

僧普長、鶴洲と號す、長崎崇福寺の僧なり、杏坪の詩に和して曰く、

廣陵縹緲所思迷、聞說國風同魯齊、頼遇騷人勝遊日、

瓊江山水競新題、

僧白龍

僧白龍、長崎西勝寺に在り、詩を以て聞ゆ。杏坪これを訪ひしに、老病靡に在りき。杏坪詩あり。

雲龜靜座燃霜鬢、寶月卷成形欲枯、老病須尋商隱夢、

醉顛寧入伯時圖、

檜林岫山

檜林岫山、名は建字は公極、岫山と號す、長崎の人、醫を業とし、書に工に、夙に

石崎鳳嶺

春水、春風等と友誼ありき。杏坪の長崎に至るや、杯酒これを迎へ、石崎鳳嶺

峰橋庵

峰橋庵等これに侍したり。鳳嶺、名は融通、字は士齊、橋庵名は庸、字は士微、皆

長崎人にして、書畫を能くせり。岫山詩あり。

謝家玉樹各榮芬、何幸茅堂見萬君、黃鳥轉來呼友侶、  
彩毫揮處拂雲烟、豈唯藝苑抽高科、便識官途建盛勳、  
此地周旋春欲半、莫隨歸雁促離群、

杏坪之に和して、

春風底處送奇芬、瑤草花邊此訪君、蠻犬馴眠猶室月、

鬼奴輕入扇洲雲、醫林奕世傳鴻術、筆陣一時彰異勳、

明日永昌山驛路、回頭幾度憶仙群、

檜家養蠻犬扇洲、所謂出島、紅夷所寓、其地作扇樣、

鳳嶺、長崎澳口圖を寫して、杏坪に贈り、詩を題して曰く、

瓊浦迎君地、寫來贈別離、還家披閱日、猶似舊遊時、

杏坪詩を以てこれを謝しぬ。

瓊浦文人儻作園、風流溫籍似君稀、幽閒弄此青羊筆、

豪貴笑他銀鼠衣、詩賊三偷寧受咎、畫家六注已傳微、

相思異日須披翫、好句新圖送我歸、

由布德  
長川輔仁

甲木氏杏坪の爲めに送別の宴を張りし時、岫山、鶴洲及び由布德、長川輔仁、等

座にあり。徳は柳河藩士輔仁、名は正義、長崎の人、春風の九州に遊びし時、追  
從して風流の遊を共にしたるものなり。

檜林 峽山

良座高堂座夜深、醉來談笑豁胸襟、知君詩酒原無敵、  
想得風流李翰林、

僧 鶴洲

市橋暗水響淙々、高閣釣簾江上峰、盟似鷺鷥原不著、  
人猶吳越恨難逢、瓶中帶暖梅爭發、鼎裏煎泉茶正濃、  
此會明朝成夢境、勸君剪燭座晨鐘、

長川 輔仁

大國名聲聞海西、相逢胸次出塵泥、月前梅夢風前竹、  
引來君興入新題、

由布 徳

羈中作客共操觚、豈料離堂倒玉壺、人世浮雲無定跡、

明朝兩地即秦胡

杏 坪

把臂論文雖是初、心交如舊樂何如、今宵杯酒無賓主、  
他日雲山有雁魚、新柳稍伸門半隱、殘梅太瘦脯金虛、  
朦朧無那含離恨、二十四橋春月疎、

杏坪は鶴洲に答へて、

韻士褰衣度石梁、高僧飛錫下雲峰、竹前樽滿賢茲會、  
梅上參橫山已逢、交爲論心無物厚、情緣惜別不言濃、  
如何聖福山樓曉、頻叩黃金九乳鐘、聖福寺洪鐘、開祖觀心鐘、  
雜黃金、以故音響及遠云、

輔仁に、

胸次磊嵬風骨高、況於詩酒共稱豪、何時再對津樽綠、  
同噉紅蝦三尺毛、崎人樂飲伊丹酒、享宴出般、  
首用大紅蝦、所以有轉結、

松浦東溪 松浦東溪名は陶、字は君平、東溪はその號、『長崎古今集覽』を草し、その序を杏  
坪に示し、又詩餘數章をも示せり。

草場佩川

草場佩川、名は鞞、字は隸芳、通稱は磋助、佩川はその號、肥前多久の人、佐賀藩儒たり、又南宗畫を能くしぬ。嘗て古賀精里に従ひて、對馬に赴き、朝鮮使と贈答し、韓人を驚倒せしめたり。慶應三年歿す、年八十一歳。杏坪の長崎に行くや、佩川佐賀に至りてこれを見んとせしに、遇、長崎行の命ありしかば、彼杵に至り、舟を備ひて時津に向はんとし、首を伸ばして、杏坪の歸るを俟てり。

風流使者向西陲、春半行遊興果奇、雲去水來期邂逅、

騎行飄渡恐參差、天衢歸雁稀餘影、驛路殘梅寄一枝、

欲識孤吟相憶處、梅樓落月夢醒時、

杏坪、大村を経て來り會し、韻に依りて喜を記せり。

舟楫海濼橋山陲、水陸相逢何大奇、此地斑荆如有約、

前宵圓夢果無差、呼坏同座殘梅影、分手共攀新柳枝、

馬卒舵工兩來督、杵津樓下午潮時、

深濠石溪

深濠石溪、名は豊、通稱は丹作、石溪と號し、肥前中原驛に在り、貧にして客を愛し、春水、春風の舊知なりき。杏坪これを訪ひて詩あり。

驛門立馬雪餘天、把手已知胸灑然、興盡竹蘭無病筆、

閑吟風月有佳篇、寧于費宰驕家祿、永隱儀封聖世賢、

逢別匆忙復何恨、丈夫一見是千年、

村上漢五

村上漢五は、對馬藩領筑前田代驛の人なり、杏坪の驛舎に宿せし時、病床に在りしが、その兒を遣はして一詩を贈りぬ、

相思不相見、高臥隱茅茨、泉響春燈亂、花香曉漏遲、誰揮鸚鵡筆、

爲寫錦囊詩、何恨今宵恨、只能明月知、

杏坪これに和して、

昏黃投驛站、蕭索泊荒茨、窓暗呼燈早、人稀進飯遲、

邑接一賢士、贈我五言詩、半面難無識、心腸已足知、

越鯉洲

越子信、名は好古、子信はその字、鯉洲と號す、本姓は中川、嘗て長府の監察たりしが、當時郡宰たりき。杏坪と江戸に相識れり。杏坪の長崎に向ひし時、これを長府に訪ひしに、

先生何幸向西徂、路枉金鞍來訪吾、吾家曾無他供給、



讒開蓬戶指雙珠、  
 乾滿雙珠光自寒、  
 捧來神后略三韓、  
 昇平却帶烟霞色、  
 賴入大邦騷客看、  
 騷客往還雖不少、  
 豈圖王粲在吾門、  
 倒履相迎且相問、  
 近來賦詩幾千言、  
 作賦登高何處宜、  
 海西奇絕在長崎、  
 行攀瓊閣舒吟望、  
 和夏風光筆下隨、

小田廷錫

小田廷錫名は圭順藏と稱す、長府の儒員たり。嘗て杏坪と江戸に相知れり。杏坪が長崎に赴きし時、長府に於てこれに會し、一詩を贈れり。  
 霞關拜別久傾葵、忽有梵音過短籬、  
 數點燈光呈喜後、一窓蝶夢始醒時、  
 舊遊索莫江湖趾、清表依然鸞鳳姿、  
 誰計平生屋梁月、分明今夜照芝眉、  
 延錫後京都に在りし時、杏坪來り遊びて、共に高雄山に上り、新緑を賞しぬ。  
 延錫の詩、

秋景何如夏景真、停車座憂更無人、  
 可憐楓葉青千樹、不染紛囂一點塵、

杏坪の長崎より還るや、子信硯海圖に一詩を題して、これを送れり。

藝陽嚴島肥長崎、君飽西州山水奇、  
 縱是硯瀛風色僻、歸來一夕作談資、

國島等齋  
結城確所

子信、廷錫等は又、國島等齋、結城確所、弓削田新、松岡道淵、石原柳庵、諸葛函溪等と共に杏坪を嘯月樓に引き、雞黍を供し、分韻して詩を賦したり。等齋名は宏通、稱は傳右衛門、本姓は山澤氏、出で、國島氏を嗣げり。確所名は弼、通稱は主計、出羽松山の人、文化七年より豊浦藩に來り仕へたり。

越 子 信

于役西垂事已休、歸來一夕把坏遊、  
 奇探異域通財地、恩及南洋遇颶儔、  
 詩裏華翻春半路、筆端龍走水濱樓、  
 興長偏恨今宵短、門外促行嘶紫驢、

國 島 等 齋

去時神女洲、如故人牽袂、到日吐月峰、如新知傾蓋、  
其間山水多將迎、左盼稍承右盼繼、君亦應接不堪勞、  
諸君稅駕少時憩、我慇懃君無壯觀、聊指雙珠稱佳麗、  
伊昔神后掌中翫、比之照乘難爲弟、世無賞鑒欲減價、  
願以好辭爲我繫、

小田廷錫

嘯月吟風又吸霞、對君疑是在仙家、不勞羯鼓催春意、  
硯水先看筆底花、

杏坪詩あり。

自喜西緣竟不空、長門一夜會諸公、鳥波分影雙珠月、  
關樹交聲赤馬風、行客吟稀囊裏噴、主人情厚豆觴豐、  
殺雞作黍非千古、此事此心誰得同、

月形鶴窠

月形鶴窠名は質字は君璞、通稱は七助、鶴窠はその號、世福岡藩に仕へ、天保  
十三年八十六歳にて歿しぬ。杏坪嘗て鶴窠の索によりて、雪裏紅梅蒼鷹圖

に詩を題せり。

雪裡搏兔雪亦多、梅梢來漱吻餘血、看汝壯心如金鐵、  
猶憑毛羽庇霜雪、豈知軟紅猛於鷹、玉頰笑舐滿鬚氷、  
鶴窠嘗て筑前蘆屋浦を過ぎて、宿雁群飛して天を蓋へるを見て詩を作りけ  
るに、杏坪も亦詩を以てその景を記しぬ。

蘆屋村頭舊陣原、朝霞已出復俄昏、有聲似雨橫江至、  
無際如雲掩日奔、滿幅鴉塗字難辨、幾軍魚麗隊何繁、  
半起連天半猶地、噉々斃作雁乾坤、

嚴島河内一郎氏、鶴窠の書狀を藏す。杏坪より廣島名産祇園坊白柿を送り  
たる答禮なり。

前刻者被勞貴价函教、縷々辱拜讀仕候先、以殘寒料峭之候、益御安泰奉恭  
賀候、然者被爲思召寄候而、美好之白柿一器、十有五顆、御惠投被爲下、殊更  
尊藩御貢庇之餘、に出候趣、誠以不敢當之御厚口御盛意之程、千萬辱謹而  
拜登仕候、乍然陋劣蒙垂青之上、荷此盛惠候儀、實に感悚駢至、不知所謝奉

存候區々鄙衷近日拜趨可得呈啓先貴酬草々如此御座候頓首再拜

二月廿一日

賴萬四郎様

月形七助

帳下奉復

小石元瑞

小石元瑞名は龍通稱は元瑞秋岩と號す山陽の妻の父にして京に在りて醫を業とせり。文政十年杏坪の上京せし時歎待至らざるなく雅集を三本木の清輝樓に張りぬ。詩あり。

藝苑聞名三十年、得君來見真倒顛、一尊春醪一枝燭、

白髮朱顏見陶然、翁醉賦詩人筍口、蔑視百篇從斗酒、

花開嵐峽作遨遊、傳唱名句滿皇州、

また別宴を催して、

翁也真鏗鏘、蠅頭夜命筆、儒林兼循吏、聞名自燥髮、燭前始奉顏、

花邊屢促膝、諄誨成師友、團樂聯叔侄、願言長陪隨、昏旦忝親暱、

歸志不可留、屈諸何迅疾、水閣置樽酒、罄歡奈離別、堤柳帶雨暗、

子規啼煙樾、休暇難重期、往謁復何日、安得脫重負、全然乞骸骨、

詩仙芳躅在、待翁彼築室、

杏坪これに次韻して、

予謬典寒郡、黠檢驅凍筆、簿書閱不休、徒搔鄭谷髮、勉讀循吏傳、

欽慕屈我膝、采薪偶有憂、尋醫問遠姪、同寓暫遊洛、良朋亦新暱、

行散勝參芪、花月能療疾、告滿催歸橐、潛焉悲際別、舟車不少留、

西指舊岳樾、謝君占名區、埃我來隱日、如何奇絕境、置伊癡頑骨、

但願抽一身、微官辭千室、

元瑞又浦上春琴の詩に和して、

囊錦飄然入上都、匱中美玉不沾諸、鴻泥元龐遺蹤迹、

臨別猶留醉後書、

杏坪又次韻して、

雙丞偶入百花都、一日春遊可忽諸、無那衰軀臨別句、

和將暗淚勉爲書、

賴杏坪先生傳

浦上春琴

浦上春琴名は選字は伯舉春琴はその號備前の人本姓は紀氏京都に住し、文人畫を能くし、弘化三年六十八歳にて歿しぬ。杏坪が京都に遊びし時、春琴清輝樓に來り謁して江東圖を作り詩を賦しぬ。

高山仰慕幾年來、忽喜春城同把杯、莫道龜風花發晚、白櫻亦是待君開、

清輝樓別宴にも春琴在り、

百日抽身入帝都、遊縱倏忽過居諸、看山尋水如公事、一擔詩囊是簿書、

杏坪後日寄懷の詩あり。

詩畫風流知幾人、寒池蕉雪有誰倫、祗罷兔毫更何事、

翠婆一曲老陶真、

中林竹洞

中林竹洞名は成昌字は伯明竹洞と號す、尾張の人京都に住し、畫を以て名あり。嘉永六年歿しぬ。杏坪が京都を去らんとせし時、竹洞湖山曉晴圖、柳灣古渡圖を寫してこれを贈りぬ。杏坪寄懷の詩あり。

南紀曾聞第五隆、北京今日竹洞翁、德容筆意皆殊絕、

太勝世間劉文通、

大倉笠山

大倉笠山名は穀字は國寶笠置の人、よつて笠山と號す、詩を能くし又、畫を好み、竹洞の門人たり。嘉永三年歿す、年六十六。後配吉田氏、名は佐登、袖蘭と號し、詩畫を能くし、花朝月夕、夫妻相携へて優遊せり。杏坪京都に遊びし時、笠山刺を通じ、又、清輝樓の別宴に臨みて詩あり。

雪色堆盤魚脰飛、醉來誰不醉愁圍、停杯何事還無語、揮袂明朝君欲歸、

袖蘭杏坪に隨ひ平野の花を賞して詩あり。

春風開遍萬株櫻、一帶如雲映夕晴、無限賞心兼別思、

從君幾度繞花行、

杏坪の詩に

東山西峽散紅軍、平野猶張幾隊雲、知是三春百花殿、萬燈挑盡送東君、

袖蘭が杏坪を送りたる詩に、

追陪杖履六旬餘、綠意紅情兩不疎、自此山河千里隔、

壁間好對賜儂詩、

杏坪後、夫妻を懷ひて詩あり。

夫妻唱和有琴詩、綠鬢檀唇畫亦奇、應笑當年揚處士、

四婆相對老頭皮、

北小路竹窓

北小路竹窓名は龍、本姓は源氏、大學介と稱す、竹窓はその號、典藥寮の醫師なりき。杏坪の京都を去らんとせし時、竹窓、山陽の家に来りて初めてこれに會し、一詩を賦しぬ。

博得芳歡僅半時、愁看柳影檻前移、且將一滴見川水、

染上毫光記別離、

貫名海屋

貫名海屋名は苞、字は子善、海屋と稱し、晩に菘翁と號す、通稱は泰次郎、阿波の人、京都に住し、儒を業とし、畫を能くせり。文久三年歿す、年八十六。山陽が叔父の爲に、餞筵を柏葉亭に張りし時、海屋座に在りて一詩あり。

老綠漸撥新綠時、雨餘沙溼水痕移、逢君此喜還此憾、

不寫交情寫別離、

杏坪和韻して。

豈料逢時便別時、悲歡逢別霎時移、柏亭一醉扶頭酒、

何日相逢慰別離、

杏坪の京都を去りし時、北小路、貫名、小石等諸人、杏坪の爲めに餞別の宴を張れり。杏坪高瀬川を下り、竹田に至り、詩を賦してこれを贈りぬ。

銅駝坊南柏葉樓、力醉下樓裂別愁、渠傾長槽舟行疾、

瞬息已到竹田頭、此時回頭乍酸慘、三十六峰半懸愁、

誰知西下一箭舟、翻羨北上百喘牛、

福井榕亭

福井榕亭名は需、字は光亨、榕亭はその號、京都の人、幕府の醫官楓亭の子、御所の醫となり、醫博士兼丹波守となり、兼ねて書畫珍貨を愛せり。弘化元年、九十二歳にして歿しぬ。兄春水嘗て上京して治を請ひたることありしが、杏坪も亦姪山陽に伴はれて診を乞ひしに、榕亭方竹杖を贈りければ、杏坪詩

を以てこれを謝しぬ。

神京久著玉堂仙、問藥來遊洞裏天、投我一枝靈竹杖、

從今蹈破幾山川、

田邊伯表

田邊伯表、名は憲、字は伯表、立々山人と號す、詩畫に巧なり、家、世東寺の士たり。杏坪の京に遊びし時、杏坪と山陽とを水門亭に邀飲し、また磁印二顆を杏坪に贈りぬ。陶工、木米も亦來り會し、磁蓋二枚を呈し、酒杯の間、靈芝圖を作れり。杏坪詩あり。

青華磁印碧泥坏、名手一時投我來、縱使我勞千百幅、

難酬汝贈二三枚、

杏坪又伯表の磁印譜に題せし詩あり。

哥々蜜裡瀟精不、光澤固當成這渤、誰比立々胸裡秘、

篆文鎔出老蛟蚪、不音敷上聲、凡造、與、泥、土、皆從此、名、音、光、澤、者、俗、呼、曰、洩、並、見、陶、說、

鈴鹿連一

鈴鹿連一、幼名は綱千代、豐後守に任じ、神祇權少副に進み、正四位上に叙せられ、嘉永七年十一月卒す、年六十三。極源靈神の號を授けらる、京都吉田

社の祝なり。杏坪京に遊びし時、連一を訪ひ、歌會に列したり。杏坪の歌、

花照孤燈

我宿にさくらさかすは春の夜に

ひとりやてらんともしひの花

代身惜花

ちるを見るそのくるしさにくらふれは

まなまくほしき花の一時

花間柳絮

吹風に柳の花も渡るらむ

さくらにまします川そひの道

花間舞蝶

かへりまふ蝶のあらすは春風に

ちりゆく花と見てや、みなむ

花間遊蜂

第九師 友

花になく鶯のみか腰はその

すかるも聞けと歌うたふ聲

伏月玩花

糸てこそは今夜あかさめ山さくら

折よく月も盛えけり

松間落花

枝かはす契もしらで色かへぬ

松をよそにも散櫻かな

大堀正輔

大堀正輔は彦根の人、京都に住し、和歌を能くせり。杏坪嵐山に遊び、初めて正輔に會ひて、

世にたくひあらしの山の花のもとに

又たくひなき人にあひけり

と詠じければ、正輔

あらしやまみれともあかぬ花よりも

まためつらしき君のことの葉  
後、杏坪に隨ひて吉野にも遊び、途、井手の山吹を短冊にそへて、

またも来て君みんことは玉川の

きしの山吹折て遊はね

杏坪の歌

折よくもたま／＼君と来てそ見る

井手の玉川山吹のころ

高雄山の新樹を見て、正輔

もみち葉のこかるゝ秋の千しほより

涼しきいろは夏にこそあれ

杏坪の歌

おもひもゆる秋のみちのそれよりも

こゝろ高雄の青かへてかな

香川景樹

香川景樹は、天保十四年、七十六歳にて卒したる人なれば、杏坪が上京した

る時は正に六十歳なりしなり。杏坪は七十二歳にして、景樹の批點を受けたり。杏坪等が花を知恩院に賞せし時、山陽は景樹を伴ひ來りて、雅宴を共にしたること、『十句花月帖』に見ゆ。

杏坪先生ふたゞび知恩院の花をとひたまし日、おひなる山陽ぬし、わが岡崎の家に入來て、輕う引立て、率て行、梅颯の君さへおはして待わびたまへるも辱し、例のおく心なく酌ふけるほど、時も彌生つごもりになりければ、並木の櫻二木三木わづかに盛なるが、さからばと打みだれたる夕まぐれ、たゞならんや、

咲く花もちるをさかりと思ふらし

けふこゝろある人をまちえて

さて門を出て、

しら川の流の末は暮れはて、

朧に見ゆる大比叡のやま

賀茂季鷹

賀茂季鷹、本姓は山本氏、加茂の祠官にして、安房守に任せられ、雲錦亭と號

す、有栖川幟仁親王に就きて和歌を學び、後、江戸に赴き加藤千蔭と交り、名聲大いに振へり。天保十三年、九十一歳にして卒しぬ。杏坪が京都に在りし頃、五月五日、上賀茂の競馬を見、郷里竹原の、往時賀茂の神領にて、競馬を出せしことありとの傳説を思ひ出で、一首を詠じたりしに、季鷹の需によりてこれを書したりしこと亦、『十句花月帖』に見ゆ。

こまをさへ貢きし國の民なれば

さらにもけふにあふか嬉しさ

加藤千蔭

加藤千蔭、本姓は橋、江戸の興力、枝直の子、芳宜園と號せり。賀茂真淵に就きて古學を修め、『萬葉略解』を著し、又、和歌筆札を以て聞えたり。文化五年、七十五歳にして歿しぬ。杏坪の千蔭に於ける、交游の形蹟無しといへども、『嘉樂桃集』に左の一首あれば、江戸在役中に相知りしが如し。

千蔭を懐ひて、

むらさきの一もとなれと武藏野の

草はちかけとなつかしきかな



瀧原宋閑

瀧原宋閑、將監と稱す、京都の人なり。杏坪の京都に在りし時、共に賀茂の花を見て、

散りのこる花に光を譲りてや

くるゝやよひの夕つく日かな

杏坪の歌

遅櫻青葉かくれに残しおきて

たるはかへらぬ鴨の川水

杏坪宋閑を訪ひて、

卯花處々

いへくにおのか月夜をしめてけり

卯の花さける夏の山蔭

日野資愛

日野資愛、字は子博、南洞と號す、官權大納言に上り、弘化三年、年六十七歳にして薨じぬ。資愛學を好み、詩歌を能くし、又よく士を愛し、交友に富み、杏坪の京に入りし時もこれを引見したり。梅颯の日記に、四月二十六日、日野様

へ被召、翁杏坪久太郎山陽山行く翁かごなり、雞鳴頃歸る廿七日、日野様より昨日の御挨拶として使者、眞綿被下とあり。姪山陽と僧雲華同行せり。時に卿詩あり。

韓々聯芳燦似霞、春風併上筆頭花、誰言天地無私賦、

生得文宗聚一家、

また杏坪の書畫帖を見て詩あり、

日々尋芳鳥角巾、平安寧樂兩京春、花開花落年千百、

眞賞如翁有幾人、

杏坪の詩

靜聽四欄琴筑聲、宮門夜雨少人行、誰知忘貴延寒士、

華燭醄顏相映明、

また卿の詩に和して、

豈料華堂容葛巾、温々賜座一團春、簪纓林立方今盛、

好士如君有幾人、

卿また歌あり。

よし野山よく見し人のことの葉に

われさへわくることちこそすれ

山の名のあらしの後の春の色は

このことの葉に匂ふ花の香

名たゝるはからのしらへとおもひしを

さはかりならぬやまと歌人

もゝ日とはなと限りてか歸るらむ

大宮人もいとまある世に

廣島の濱の白波たちかへり

またも都の春をとへかし

杏坪歸藩の後再び詩を贈られければこれを謝せんとして

王化浹洽邊鄙淨 無復潢池弄寸兵 督耕小吏多暇日

擬尋遠姪遊上京 東山西峽相追隨 花下月前醉帽傾

誰寫蕪詞達華屋 何料黃紳識賤名 非獨過獎染玉筆  
 侍燕且嘗甘露羹 叨榮不覺更漏移 舉頭宮門曉參橫  
 賜座頑老緩禮數 銀燭錦段漫揮掃 爲是佳醴甚醕酌  
 春蚓信筆更潦到 西歸依舊勸農桑 待我獨有誰故草

安藝郡山間有一種草花俗呼爲誰故草有藤大納言爲兼故事 放犢歸入鹿鳴悲

寒村秋砧催夜擣 此時不睡思鞦韆 幾回起坐望東果

後年寄懷の詩あり。

宮門日暖太平春 寒士何緣近謁君 况使衰軀弄龍具  
 蠶綿新賜兩團雲

水野忠邦

水野忠邦は肥前唐津城主忠光の子にして越前守と稱し六萬石を食み寺社奉行となり尋いで封を濱松に移され大阪城代となり京都所司代に轉じ尋いで老中となり將軍家慶に仕へ天保改革を斷行せんとして失敗したれども資性豪邁にして歌を詠じ筆札に工なりき。嘉永四年五十九歳にして卒せり。杏坪が兄春風を邀へんが爲めに營みたる對床廬の扁額は實に忠

邦の書する所たり。杏坪詩あり。

欲求兄弟一枝棲、新置小齋茅棟西、宛如蝸殼更生贅、

又似燕巢傍出泥、窓爲看書差安潤、檐緣遮雨不嫌低、

豈料幽居忽生耀、對牀高挂貴人題、

春風の死せしは文政八年なり。蓋忠邦の祖父忠鼎は、淺野宗恒の二子にして、重晟とは兄弟たれば、水野家と淺野家とは、自づから交際もありしより、忠邦が尙寺社奉行たりし頃より、夙に杏坪の名を聞きて、爲めに對床廬の扁額を與へ、その京都に入りし時は、駕を以てこれを迎へたりしなり。文政十年五月朔、翁○杏坪かごにて出る、水野様へ被召、夜四つ頃歸ると、梅颯の日記に在り。この時忠邦宴を説け、また詩を示せり。

雁魚相絶十餘年、豈料城陽賀靜便、五月官庭風樹下、

醉中依舊笠吟肩、

杏坪次韻して、

幸值元侯京尹年、輿迎優老辱安便、豐丞徒說桑麻事、

寧與群賢得比肩、

また歌あり。

御館に稍ひろき池あり、新樹の陰さしおほひたるに、鶯鳴あまた遊

ぶ夕けはひた々ならむや、歌よめと仰ければ、

池の面にかけをうつして水鳥の

あをば涼しき夏の夕暮

寄懐の詩あり。

大堰遙觀花壓船、二條近侍月臨筵、期君三日拂塵去、

升降諸司持大權、劉禹錫和牛僧孺詩曰、待公三日拂塵埃、

僧雲華 僧雲華名は大舍、雲華と號す、豊後の人、東本願寺の學頭たり、杏坪が、吉野よ

り京都にかへりて、知恩院の花を賞せし時、

問花芳野携詩囊、十日歸城旅服香、餘興更衝山閣雨、

知恩院裡賞殘芳、

又共に鴨の花を見て、

東山北野得相同、又問殘芳向鴨叢、畢竟惜春春不駐、落花流水一川風、鴨林流水送春時、是處綠陰床可移、一樹分明如有待、夕陽故在護殘枝、

杏坪が日野邸に招かれし時、雲華も同行して、

高門愛客舊賢聲、喚及山僧豈不行、休語昏迷難下筆、

借光銀幅一堂明、

雲華又杏坪の高雄の遊に隨行したり。別に臨みて爲めに芝蘭を描きぬ。

江馬細香

江馬細香名は嬾々細香と號す、美濃大垣の人、蘭齋の女なり、詩畫を能くし、畫は竹洞及び梅逸に學べり。文久三年歿しぬ。杏坪の上京せし時、來り謁し、墨竹を描き、一詩を題せり。

閑把柔毫寫嫩篔、可憐楚楚帶風香、矮箋惟與低竿稱、

敢望寒梢萬尺長、

杏坪、後「阿安物語」を讀みて、細香を懐ひ、一詩を賦せり。

神兵昔日出關原、偏師且夕陷大垣、阿安少在嬰城裡、矢石之下温鐵水、力染所獲首級齒、僞迎功賞爲戰士、城陷從親夜度濠、滿身泥淖鯁鱗逃、萬死出城又母病、大野茫茫殘星高、自通石家醫員女、時平往事向人語、世傳其語每一讀、淚落當年千萬苦、君不見垣府今有細香君、藻帳羅裙靜學文、墨汁渲染蠶繭紙、閨窗坐收觀鷄軍、視之阿安苦樂實天淵、可通此復足見太平恩、試問阿安一片舊殘魂、知不當今大垣女狀元、

師友年齡等差

金子	樂山三五	飯岡	義齋三九	中井	竹山二六	中井	履軒二四
柴野	栗山二三	加藤	千蔭二三	香川	南濱二三	西山	拙齋二一
服部	栗齋二〇	岡田	寒泉一九	筱崎	三島一九	岩瀬	華沼一九
金子	華山二二	尾藤	二洲二一	賴	春水二〇	川合	春川二〇

- |         |         |         |         |
|---------|---------|---------|---------|
| 菅 茶山八   | 小寺 樽園八  | 倉成 龍渚八  | 市河 寬齋七  |
| 姫井 桃源六  | 古河 精里五  | 岩瀬 臺山四  | 賀茂 季鷹四  |
| 賴 春風三   | 加藤 定齋三  | 賴 杏坪    | 一月形 鶴窠  |
| 二松平 定信  | 三太田 午庵  | 三宮原 龍山  | 六金山 華山  |
| 八嶋崎 波響  | 一原 古處   | 一二香川 景樹 | 一三野坂 元貞 |
| 一四龜山 紀卿 | 一六佐藤 一齋 | 一七坂井 東派 | 一九荒井 鳴門 |
| 二〇中林 竹洞 | 二〇金子 蕉陰 | 二三貫名 海屋 | 二三古賀 穀堂 |
| 二三宮崎 木鷄 | 二三浦上 春琴 | 二四日野 資愛 | 二四賴 山陽  |
| 二五有馬 息焉 | 二五筱崎 小竹 | 二九大倉 笠山 | 三一草場 佩川 |
| 三二平田 玉蘊 | 三三梁川 星巖 | 三六鈴鹿 連一 | 三七水野 忠邦 |
| 四一龜山 伯秀 | 四二坂井 虎山 |         |         |

第十一族

春水

杏坪人と爲り謹嚴にして篤實、兄嫂に事へ、妻兒を撫して、平和なる生活を

完うしたり。その春水夫妻に對する關係は、結婚後七年間同居したりし一事を以てしても察することを得べく、又岡田寧規の爲めにその祖、治部右衛門某が遺烈碑文を撰したる時、屢春水の説を求めたるに、徹しても知り得べしとす。

別紙御墓碑漸出來仕候すいふ能々念入寫し彫立候様石工へ精々可被仰付候石之みがき第一にて御座候此碑文彌太郎○春へも度々見せ申候處是にて至極宜敷御座候餘面上可得貴意候以上

廿四日

尙々かり張之分はへき候て直にうつし候様に石工へ可被仰付候以上

岡田彦之丞様

内用

賴 万四郎

杏坪が御納戸奉行上席に拔擢せられし時、春水は大いにその不次の榮進を喜び、翌月朔日、これを祖先の神位に奉告したりき。その文、今、廣島賴氏に傳

よ。

維文化八年歲次辛未八月丁未朔日孝玄孫御側詰同格學問所教授惟完敢昭告于顯高祖考顯高祖妣顯曾祖考顯曾祖妣顯祖考顯祖妣顯考顯妣弟惟柔以前月十五日授御納戸奉行上席御城郡役所詰蓋以儒員蒙此榮進實破格盛舉是祖先積德之所致感慕良深自是之後慎勤奉職以報非常恩願冀無忝祖訓幸因佳日例奠謹以酒肴用伸虔告尙饗

春風

春風に對しては杏坪が撰じたる行狀にも惟柔自少被先生友愛慈誨因得以成人恩義至重といひて尊敬の誠を表せり。春水の歿せし時その嗣事庵年甫めて十六歳なるを以て家塾嶺松廬には代講を置きしが藩春風に食俸を給し藩醫の待遇を以てしてこれを輔けしめしかば春風は屢竹原廣島の間を往來して業を視ることとなりしにより杏坪は爲めに對床廬をその第に置きて春風に奉養したりき。文化十三年八月五日附杏坪が茶山に寄せたる書狀に亡兄○春跡も無事家任庵也○事も高橋生をたのみ日夕講讀不怠いたし居申候竹原の兄風○春も盆前に歸郷云々とあるはこの間の事情なり。

對床廬

杏坪は七十三歳にして春風を失ひたり老後寂寥の情想像するに堪えたり。十月六日附茶山に寄せたる書狀に左の文あるを見よ。

千齡○春風事も早速御聞被下御驚被成候由下地病氣も無之御尤奉存候如仰私一人に相成扱々心ほそく相成申候此度酒も御こし被成下被仰下候趣千萬御厚意奉感服候一杯つゝにて相凌候様可仕候云々

杏坪は又春風が竹原の長老として地方の儀表となり後進を誘掖したる以て郷賢祠に合祀して永く祭禮を享けしむることゝなせり。

杏坪晩年竹原に至り春風の舊居を見て詩あり。

壁上留題墨未乾、人生存沒電光間、書窓寂々空回首、

嵐翠依稀四面山

山陽

姪山陽は杏坪が兄春水に大阪に寄食せし時に生れ春水が廣島藩の僻に應せし時には嫂梅颯と共に山陽を伴ひて藩地に來れり。山陽は八歳にして杏坪につきて大學を授けられ十一歳にして杏坪に侍して始めて名月の詩を作り十四歳にして杏坪に伴はれて學問所の釋奠を觀十八歳にして杏

坪の東行に随ひて、尾藤塾に學び、十九歳の時、杏坪と共に歸藩したり。山陽が二十一歳にして脱走したる時は、兄春水東役中なりしかば、杏坪は藩法のある所、一家存亡の危機なるが故に、非常の痛心を爲したる中にも、山陽の心中を洞察して、單にこれを豪俠狂妄の所爲とは考へず、宿志のあるべきを認めたるは、平素山陽の行跡に就きて、憂心沖々たりし春水夫妻に比して、寧ろ能く山陽を知れりといふべし。角田浩々歌客君所藏、九月十九日附、杏坪の書狀、この消息を傳ふるものなり。

古屋船便一書啓上仕候久々呈書も不仕御疎遠に打過候秋寒の處尊堂益御多祥奉欣慰候、然ば久太郎○山義近年兎角放縱に有之候處當年家兄○春留守○江中浪遊に耽り候故親戚朋友切戒懇諭も仕候得共不相改○水當月五日竹原大叔父○傳惟○五弟○郎宣、病死仕候に付爲弔禮家來○太差遣候處途中より逐電仕候家來歸り私方も早速に聞き竹原よりも追手差出候得共既に時日も經候事故今以尋得不申哉今日迄様子相知不申弊藩封内より備後福山領へ出候迄は相分り申候左候得者何分洛攝

門に潜匿候事と被察候此間中井御父子○竹山に書狀にて此儀申遣候貴家へ別紙○略御報知可仕の處あまり至急にて不及其儀中井へ傳語頼み遣し候へば、御聞可被下と奉存候弊藩の法、嫡子出奔仕候へば、甚越度に相成候事に御座候、其上、狂漢の事に御座候得者如何なる事仕出し可申も難計、宗家一子の處も有之公私共に難捨置尋得て連歸り不申候ては相濟不申候何卒御手かゝり有之蹤跡相分り候儀御座候は、中井父子へ御相談被成て可然御取計可被下候本人義別に刑憲を犯し遁去候義に毛頭無之但豪俠狂妄の所爲にて御座候然し狂妄なりに宿志も有之事と相見へ候得ば當分は必潜居候て追手を忍可申若し御見當り卒爾に御留置被成候は、必逸居可仕候間御見當の事も御座候は、随分御談合にて御周旋御取計奉囑候誠に弊家存亡の所係に御座候得ば費用は何程入候ても不苦候間御手厚に御取計可被下候恐惶謹言

九月十九日

頼 万四郎

篠田剛藏様

尙々家嫂○梅も驚き心痛の至に候處傍より色々慰し置候江戸へは  
申不送候何分尋得候上にて申遣度候

景讓

山陽廢嫡の後は、春風の子景讓、春水の家を繼ぎしが、尋いで天し、山陽の子  
聿庵、孫を以て祖を承ぐことゝはなりぬ。山陽は杏坪の謹直に服し、杏坪は  
山陽の放縱を喜ばざりしも、杏坪は、山陽に對して、常に同情を有したりと見  
ゆ。文政十年二月、山陽が梅颯等と共に上國に遊びし時は、山陽は大阪まで  
出で迎へて、舟遊を爲し、住吉に汐干狩を爲し、伏見を経て京都に入り、井手の  
舊蹟を訪ひ、吉野の花を観て、又京にかへりて、知恩院、嵐山の殘櫻を賞し、高雄  
の新緑、賀茂の競馬を見、伊丹坂上氏の銘酒を味ひ、有馬温泉まで送りて、袂を  
分ち、前後九十日の間、款待周旋至らざる所なかりき。この時杏坪詩あり。

昔携阿買沙山川、衰齒忽過三十年、翻然憑汝扶持力、  
踐遍王畿到馬泉、

翌年十一月、山陽杏坪に眞綿を送りたるによりて、梅颯はこれを宮崎木雞  
に托して、三次の任所に轉送せしめたること、梅颯日記に見ゆ。

山陽嘗て遙に酒を贈りたる時の詩に、

吾叔眞番々、短髮尙堪簪、神明決滯獄、廉介守良箴、催科自知拙、  
括囊每愧瘖、豈戀名爵好、欲報恩遇深、倚君鎮蠢動、輿病度輻輳、  
勞瘁雖非憚、瘵癘恐相侵、姪嘗望勇退、今則勉力擔、尺書曾努力、  
合符得來音、喜君平昔意、不隨跡浮沈、苟不遇盤錯、何試百鍊金、  
民瘁何足慮、魑魅識忠忱、遙知案牘暇、尙不廢詠吟、投老適得所、  
掃吾舊書蟬、伊叟髮變黑、非賴三椹參、坡翁兒共樂、不憂桃榔林、  
野老餉山藥、詎庭聽春禽、臥聞耿燈燭、獨眠不愧衾、聊寄一尊酒、  
遙々向雲岑、凜冽澆磊礫、應知老姪心、

文政十二年は、春水十三回忌なれば、山陽も西歸の途、神邊より三次に到りて、  
杏坪を見、共に廣島にかへりぬ。山陽の詩に、

紺容攢地春、水勢赴山陰、吾叔衰運久、斯鄉瘴癘深、遙携一尊酒、  
欲慰七旬心、對醉春燈底、雪明檐外林、

杏坪これに次して、



山河護舊府、喬木幾團陰、痴叔無人問、阿咸思我深、春寒千里路、  
夜話半宵心、對醉還同睡、星懸雪後林、

杏坪の官を罷めし時、山陽は唐物の大磁坏を贈りぬ。その時の詩に、

報國心長短髮凋、抽身官海自今朝、猶餘磊魂滿胸赤、

把個深杯曉一澆、

山陽尋いで歸省し、屢杏坪と往來あり、翌年歸省の時には、杏坪たま／＼竹原に在りて、相會し、尋いで廣島にて談笑せしが、これぞ叔姪の生別なりける。

隼庵

山陽の長子隼庵、名は元協、字は承緒、通稱は都具雄、後、餘一と改めたり、母は廣島藩士御園道英の女淳子なり。隼庵の子を誠軒といふ、誠軒名は元啓、字は子明、東三郎と稱せり。その子を、廣島頼氏の當主、彌次郎君と爲す。

支峰

山陽京に出で、別に家を興し、儒醫小石玄瑞の女、梨影を聚りて、支峰、鴨厓等を生めり。鴨厓、名は醇、字は子春、三木八郎又は三木三郎と稱し、一に古狂生と號す。安政の獄につながら、命を殞し、明治二十四年四月八日、正四位を贈られたり。支峰、名は復、字は子剛、通稱は又藏、後、復次郎と改め、明治の初、東京

鴨厓

に出で、大學少博士たり、從五位下に叙せられしが、後辭してかへりぬ。男子なきを以て、京人柏村龍三氏を養ひて、その女に配せり。これ京都頼氏の當主なり。

達堂

景讓の子を達堂といへり。字は君舉、三千三と稱し、達堂と號せり。山陽に育せられ、後、大阪に筱崎小竹に依り、晩年堺に住せしが、子なきを以て、榮島常松君を養ひて嗣とせしといふ。

小園

春風は、竹原人花山元葬を養ひて、その女を妻とせしめたり。元葬、通稱は尙平、小園と號せり。小園の二子永禧は來洲と號し、三子慎、字は敏卿、文七と稱し、後、廉次郎と改め、葦汀と號し、四子確、字は子龍、通稱は三郎、篁渚と號し、篁渚は別に家を成せり。永禧の子維精、字は允中、通稱は平柳、愿恭と號し、葦汀の長子俊直君を養ひて嗣と爲し、俊直君の弟鷹次郎君も亦出で、篁渚の嗣となりぬ。

かくて、春水の家は、廣島、京都、堺の三家に分れ、春風の家は竹原に在りて二家となりたり。杏坪の家は如何にして今に傳はれるか。

加藤氏を  
懐ふ

杏坪が妻加藤氏を失ひたるは、文政元年七月にして、翌年十二月、二子冬吉をも喪ひたり。

妻を失ひし頃月を見て、

仁保鳥のふたりならひて見し月に

面影はかり浮ふ夜半かな

妻に別れしあけの元日に、

かた影の残るも悲し相ともに

向ひし今日の鏡もちひは

妻なるものゝ一周忌によめる、

わかれつる其初秋は來にけらし

君か還らぬことそ悲しき

七夕となりても來ませ初秋の

一めぐりする此頃の空

消えにけるその初秋の曉と

思へはいと、袖そ露けき

亡き人の訪つる、やと思ふにそ

更に身にしむ萩の上風

あはれなか魂のゆくへと稻妻を

今見るさへも呼はんとすらん

妻なるものゝ三回忌に、

わか島にわれはあれともなか島に

なかたちかへる浪の無き哉

比治山の寺の妻なるものゝ墓に詣て、

はかなしや思へは袖もひち山に

涙の雨のふる寺のうち

ふる衣を取出て、なき妻を思出て、

君かもとぬひし衣も年をへて

我身も共にふりまさりけり

次子を喪

師走の二日、幼き子痘疾を病みて失せける悼みの餘りに思ひ續けたる。

生ひ立たは老の杖ともなるへきを

仇なる風に折るゝ竹の子

抱き取りていさ物いはんいはけなき

影はさなから生けること見ゆ

かたいさりいさりて親を慕ひつる

姿は今もたちそいてぬる

幼きものを失ひける後に乳母の來りければ、

來よと思ひ又こよなとも思ふ哉

見る度ことに思ひ出れば

文政元年より三年までは、杏坪の厄年にして、妻兒を失ひたるのみならず、自らも病床に就きたりと見えて、兄春風の來廣を喜びて作りたる詩に、

去年今年共厄年、相値相逢涙漣々、不問更増雙鬢禿、

但欣同保一身全、兒孫玉冷山間土、兄弟星殘海上天、  
一醉滿城風雪夜、寒燈復作對床眠、

春風が除夜の詩に次韻して、

病後更逢多患年、愁腸受酒尙難眠、翠髻新鬼行安在、  
雪刺衰翁坐共憐、送臘鐘聲微霰外、伴人移影短檠前、  
東隣與我悲歡異、守歲一家爭打錢、

長子舜齋

然れども一子舜齋は、文化十年、矢野八幡宮祠官、香川日向守國体の女、かね子を娶りて、翌年一男を擧げ、十三年、一女を生めり。同年八月五日付、杏坪が茶山に與へたる書狀に、豚婦今夏安産、一女を擧申候、無事に育申候、頃日孩咲眼前慰老懷申候とあり、されば文政二年には、長孫は七歳、長孫女は五歳に達したれば、幾分か老祖をして愁眉を開かしめたることありしならん。その佐伯郡の山詠を聽かん爲めに、廿日市の邊に在りし時、舜齋の書を得喜びて詩ありき。

乃翁入郡聽民詠、久在山村海驛間、皂隸寄書知汝孝、

白頭決獄覺吾頑、病人差劇細陳狀、俸米縮贏翔匿艱、  
料識稚孫方笑戲、黃柑紫柿待持還、

また家人の春遊を見て詩あり。

衣飯平生鮮出家、春遊一日弄年華、投筭得吉喜無雨、

檢曆稽時知有花、竹檻爰僮肩可搭、絮巾老婢面猶遮、

莫貧春色侵繁處、切恐時逢醉野叉、

樸翁家を守りて、家人に一日の野遊を爲さしめ、以て平生薪水の勞を慰めたる狀、寫し得て妙なりと云ふべし。

舜叢は、文政五年、切米十五石三人扶持を給せられ、杏坪が三次町奉行たるに及びて、舜叢は、御勘定所吟味役同格にて、郡町用向をも勤むべき特命を蒙り、舉家三次に移住せしが、天保元年、杏坪辭職隱居して、廣島にかへるや、舜叢家を繼ぎて、知行百四十石を給せられ、四月、御銀奉行となり、十一月、白鳥の賜邸に移り、天保三年八月、御藏奉行に轉じ、翌年六月、眞鴨に移り住し、八年十一月、大阪御屋敷番御目付を兼ね、十三年三月、五十石を加増せられ、弘化二年二月、御

普請奉行となり、嘉永三年五月八日、六十歳、知行高百九十石にして病死したり。舜叢の官歴は右の如く、事務官として終りたれども、父母の薰陶によりて、夙に經史に通じ、『藝藩通志』の編輯に與り、また詩文を能くして、大阪藩邸に在りし頃は、諸儒と交を結びて、風雅の遊を共にしたり。舜叢字は子晦、采真と號しぬ。

舜叢の妻矢野氏は、文久二年七月二十日に歿せり。三男一女あり。男は榮次郎、鶴三郎、龜吉と云ひ、女は、廣島藩士津川治平に嫁して、顯三氏を生めり。榮次郎、名は正義、家を繼ぎ、文久三年九月廿四日歿し、子なきを以て、同藩士天野五百重氏を嗣と爲しぬ。正義に及びて、家道振はず、五百重氏今移住して、兩館に在り。當主君はその子なり。

杏坪六十五歳の冬、子孫の爲めに程頤四箴の一なる動箴を書してこれを示せり。傳へて竹原賴氏に在り。蓋、杏坪得意の筆にして、又最思を致したるものならん。

哲人知難、誠之於思、志士厲行、守之於爲、順理則裕、從欲惟危、

造次克念、戰兢自持、習與性成、聖賢同歸、

庚辰冬日、杏坪老人書示子孫

### 第十一 嗜好

詩

杏坪の詩に於ける、固より天賦の才ありと雖、而かも才に任せて多作を貪らず、博く覽細かに尋ねて、一字を苟くもせず、詩會に列しても寧ろ運作の人たりしと云ふ。『廣島蒙求』に云はく、

坂井虎山少壯にして、詩文共に一氣呵成、その詩筵に在るや、酒三觴を過ぎざるに律詩三四首を得、願みれば杏坪長老を以てして苦吟の色あり、會漸く散せんとして、杏坪纔に七絶一首を得たるのみ、虎山後日人に語りて云はく、余が詩、翌朝これを見るに、疵瑕ならざるは無く、杏翁の作に至りては、日を経るに従ひて、推敲完全にして一字の批すべき無きを覺え、冬日尙汗背を禁ずること能はず、(大意)

と。杏坪は實に音韻に於ても、典故に於ても、共に精通せざる所無かりき。

山陽嘗て小竹に謂て曰く、家叔余に囑して『淵鑑類函』を買はんことを求む、家叔にして此書を有せば恐るべきに非ずやと。『廣島蒙求』西岡逾明氏の談話を載せて云はく、

河野鐵兜云へり、余は杏坪の詩風を嗜好してこれを學ぶものに非ず、然れどもその作を熟覽すれば、如何なる險韻に遭遇するも、縦横自在にして、一點困苦の痕を存せず、蓋天品によるとは云へ、又博學の然らしむる所、眞に當るべからざる大作家なりと、

茶山も亦云へり、千祺詠物、東方開闢一人なりと。詩餘の如きは、邦人の概ね難しとする所なるに、『春草堂詩鈔』は、三十三首を載せたり。杏坪が、文政九年十二月廿四日付にて茶山に寄せたる書に、『柔等五言はつとに出來不申候』とあれども、律絶皆誦すべく、但その七言に比して得意ならざりしのみ。杏坪は、世の所謂詩人とは異り、世事を抛棄して、花鳥風月を弄する人には非ず、四時見る所、朝夕聞く所、事大小となく、物雅俗と無く、皆その詩題となりたり。

『古今集』の序に、世の中に在る人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を見

るもの聞くものにつけて、いひ出せるなり」とあるは、是れ詩歌の大本にして、杏坪は、この大本を會得したる真正なる詩人なりしなり。故を以て日常詩賦を廢せず、吏務の傍、簿書の裡に於て、尙能く詞想を練ることを樂みたりき。茶山云はく、「初千祺爲吏、以爲吟哦廢務、既聞其事、漸理、以爲雅事、必墮、而其詩如斯、千祺洵不可測矣」と、又云はく、「千祺詩、既非前輩大聲壯語、又異今時軌轍輕俳、特迷其所、遺而意至筆隨、民艱吏情、曲丁肯綮、雖傳奇小說所不易言、然入諸詩律、而優游餘綽、語近而不俚、意深而不鑿、洵稱前無古人、鳴亦奇矣」と。後世詩を言もの、茶山、星巖と併せ稱するは宜なりと云ふべし。

歌

歌も亦杏坪の嗜好せし所にして、晩年に及びては、最も作歌を樂みたり。これ固より父享翁の感化によるとは、雖國史に對し、國家に對して、有したる同情の發揮なりしなり。杏坪の歌に於けるは、猶その詩に於けるが如く、諸書に涉獵して、古語を味ひ、出典を窮めたれば、該博驚くべきものありと雖、間材を支那に取りたるが爲めに、溫雅敦厚の風格を具へざるものも無きには非ず。下河邊長流を詠じて、

聞くやたれ世は耳無の山川に

長く流るゝ鶯の聲

といへるは、唐詩、百轉流鶯より出でたるなり。茶山の墓を訪ひて、

ふる塚を問ひくれば日も夕かほの

花動して秋風そふく

といへるは、鄭谷が賈島を弔ひたる詩に「落日風吹鼓子花」より來りしなり。

柳の下に山吹のさけるを詠じて、

柳たる垣はみとりの衣きて

黄の裏したる山吹の花

といへるは、毛詩、綠衣黃裏より出でたるなり。棕櫚を、

すろの葉は夜叉のかしらに見えなから

なれて宿かる軒の秋風

は、東坡の句に「棕櫚葉欺夜叉頭」より來れるなり。冬山月を、

木の葉ちる峯のいはほもあらはれて

月さへ稜のありあけの山

は、孟郊石淙詩に「日月凍有稜」より出でたるなり。是れ杏坪の長所にして又短所なりとは雖、家集を通讀したる人は、意も詞も共に純然たる和歌を發見して、その調の整ひ且つ高く漢學者の作歌としては、寧ろ意外なるものあるを感歎すべし。

書

書も亦杏坪の好みて習ひたる所なりき。竹原頼氏珍藏の兄弟合幅は、三人三様の書風ありと雖、杏坪は、壯年酷、兄春水に似、その書牘の如きは、漫にこれを見れば、兄弟を分ち難く、中年以後渾然として圓熟の境に入りぬ。晩年耳漸く聾したりしかど、視力甚だ健かにして、能く蠅頭の細字を寫しぬ。或は唐宋の法帖に就き、或は寺社の扁榜を見、交ゆるに和様を以てし、草行眞假得意ならざるは無く、遠近名を聞きて書を乞ふもの多く、木に刻して法帖と爲れるものあり。就中、嚴島神社所藏の扁額、竹原頼氏所藏の大幅等その尤物なるべし。

書

杏坪は、嘗て茶山の爲めに石を書き、また岡田寧規の麥浪園を過ぎりて菊

を書きたり。廣島、保田八十吉氏、また杏坪の蘭を珍襲せり。菊も蘭も、共に水墨の草書にして、南宗の骨法を備ふ。嗚呼、この餘伎あり、稱賛に堪ゆべけんや。杏坪は又書を見ることを好み、嘗て菊池博甫に依りて、野呂介石の墨竹を求め得、更に山水圖を請ひ、

天下畫竹不成竹、往々竹身肥擁肉、久聆南紀介石翁、  
下筆自無一點俗、懇請遙獲三尺緤、高妙不入世人目、  
四五竿瘦勁如鐵、根生石縛節々蹙、腕指到處心亦隨、  
枝葉活動天機足、當比與可描吳筠、嬋娟仰見滿壁玉、  
疑是湘妃廟前叢、所闕鷓鴣帶雨哭、南向再拜更致歎、  
勿噴小人復望蜀、聞君寫山勝寫竹、願覓一紙裝雙幅、  
又、蠣崎波響に詩を送りてその舊封に還るを賀し、花鳥一幅を乞ひしとあり、  
別來義娥疾如織、廿歲魚雁嘆淪塞、聞說茅土復故域、  
雄鎮依然居窮北、千島海物食舊德、山河疑爲新建國、  
蝦夷長髯勁如棘、朝賀折腰鬢及域、賜食揭髯嘗黍稷、

舉、腕、飲、酒、聲、餒々、  
 亞、戎、猖、獗、曾、爲、賊、  
 將、貢、狐、皮、修、邊、職、  
 控、制、更、備、兵、馬、力、  
 騎、法、百、鍊、出、新、式、  
 不、施、鞍、鎧、脫、銜、勒、  
 何、論、毛、旋、與、毛、色、  
 奔、如、流、星、飛、如、翼、  
 捉、崇、攀、頸、無、顛、踣、  
 背、如、衽、席、縱、轉、側、  
 人、馬、相、代、不、相、識、  
 神、變、如、此、不、可、極、  
 衆、驍、無、汗、恬、自、得、  
 胡、能、服、勞、甘、屈、伏、  
 亡、佗、循、性、善、戒、勅、  
 知、君、御、民、亦、同、則、  
 邊、民、簡、朴、就、安、息、  
 滿、海、綸、布、采、無、測、  
 又、魚、射、獸、足、衣、食、  
 復、知、多、暇、弄、文、墨、  
 丹、青、寫、生、幾、動、植、  
 曾、觀、蓼、花、雙、瀉、瀉、  
 精、妙、於、今、不、忘、臆、  
 願、爲、老、夫、勿、愛、嗇、  
 一、幅、遙、寄、千、金、直、

音樂

杏坪は又音律にも習ひたりけん。三次麻舎秋興六首の内に吹甘州の句あり。

鑽、燧、山、下、始、逢、秋、  
 西、風、蕭々、落、葉、悲、  
 小、官、非、無、白、首、嘆、  
 十、室、亦、有、蒼、生、憂、  
 雉、瓶、守、口、常、盈、酒、  
 龍、劍、橫、腰、未、換、牛、  
 東、欄、喜、遭、明、月、圓、  
 短、笛、爲、君、吹、甘、州、

園藝

杏坪は、父享翁に似て園藝を喜び、老丁をして家園を經營せしめ、江戸藩邸に在りし時も、窓外の空地に栽植して、無聊を慰めたり。

竹、五、六、竿、新、解、籜、  
 藕、八、九、枝、將、吐、莖、  
 欸、冬、一、莖、催、再、作、  
 一、盆、荇、蓴、青、針、弱、  
 小、藜、赤、莖、實、早、着、  
 花、實、爲、穆、宜、咀、嚼、  
 商、陸、不、幸、導、水、藥、  
 半、爲、病、夫、斲、根、脚、  
 窓、外、隙、地、十、餘、席、  
 培、植、聊、自、慰、冥、索、  
 因、憶、我、家、老、園、伯、  
 數、畝、經、濟、日、規、畫、  
 明、年、吾、歸、汝、嬰、鑠、  
 五、月、可、食、新、茄、頌、

故を以て能く菜蔬の特性を審にし、麥粥導水、蘿蕪解毒等の理に明かなりき。嘗て蘿蕪を食ひ、その調理法を思ひ後蘿蕪行一篇を作りぬ。

本、朝、禮、食、重、蘿、蕪、  
 以、其、無、毒、能、解、毒、  
 所、以、盛、膳、莫、之、闕、  
 如、彼、曰、不、撤、薑、食、  
 吾、聞、古、禮、蘿、蕪、不、剝、皮、  
 生、新、盛、之、小、素、瓷、  
 後、用、鹽、漬、已、非、是、  
 換、以、糟、瓜、大、無、知、  
 解、毒、之、意、安、在、哉、  
 嗟、夫、林、放、無、復、問、禮、本、  
 滔々天下何日反。

梅

花木は最も梅を愛し、韻を疊みて七律六首を咏せり。今その一を節録す。



東君昨夜度寒江、  
虐雪頑冰未肯降、  
萬木心灰唯汝在、  
一番春信有誰雙、  
容姿綽約仙姑似、  
氣骨峻嶒鍊鼎扛、  
假使侘花學香色、  
爭如遠韻滿軀腔、

また早梅を詠じて

圓花籬落黃釘碎、  
半樹園林白玉新、  
淺水小橋香遠度、  
斜陽瘦竹影相親、  
千年故舊唯明月、  
一世際違皆俗人、  
獨放逋仙來折取、  
橫枝着雪最精神、

吉

杏坪は又杏花を好み、牛田山園には、梅杏を初め種々の花卉を列植して、その天真を賞翫したりき。

酒

杏坪は、一個の酒仙なりき。花晨月夕このものなかるべからず、以て憂を破し、不平を醫し、山間の癘癘も、半ば酒の爲めにこの翁を犯すこと能はざりしなり。蓋竹原の地、古來多く清酒を産せしによりて、自づから飲を解したりしなるべく、詩人として酒を嗜みたるは、寧ろ自然なるべし。京都よりの歸途、伊丹を過ぎ、坂上氏の銘酒劍稜を味ひて詩あり。

劍稜嘉號天下聞、  
酒仙幾人口流涎、  
不唯斬破百憂苦、  
復使才鋒加磨研、  
此酒固出伊丹社、  
社裏最推劉白墮、  
豈料門前來下馬、  
卯飲一快傾三雅、  
三日不醒馬山陽、  
夢在丹北紅毬堂、  
何日回馬問青州、  
平原空伴病督郵、

爾來山陽屢劍菱酒を杏坪に贈りて、老を慰め勞を安んじたりき。然れども杏坪の謹嚴なる分を量りて多飲を貪らず、病間はこれを禁じて平癒を待ちたり。故に病後初めて酒杯を手にしては、故人に逢ふが如しといへり。

得病嚴禁酒與肉、  
且從醫言食麥粥、  
麥粥烹之不厭熟、  
淡裏有味善和腹、  
宿疾一癒輕手足、  
醫言飲食乃可復、  
一壺酒醴一碟鱸、  
宛逢故人舒窮感、  
麥兄本非有卓菜、  
獨於導水功足錄、  
奈何無情俄可逐、  
猶爲上客先鱗鱸、

第十二一 著述

中根肅治の『諸家著述目錄』に、杏坪の著書として『原古篇』八冊、『諭俗要言』

一冊、『食祿箴』二冊、『一得錄』十二冊、『春草堂詩鈔』四冊、『杏坪詩文集』十冊を擧げたれとも、一得錄と詩文集とは、未だ見ること能はず。『藝備孝義傳』初篇及二編と『藝藩通志』とは、共に藩命によりて編修したるものなれども概ね杏坪の盡力に成りたるものにして、就中『藝藩通志』は、杏坪の事業として傳ふべきものの一なりとす。その他歌集ありて、『嘉樂桃集』といふ。

(一) 原古編漢文刊本 二冊

この書は、儒學に關する杏坪の意見を見るべきものにして、物徂徠等が所謂古學を排して、程朱學を真正の古學なりと説くものなり。卷を分つこと六第一卷には、天説、鬼神説、人物説、命説、第二卷には、性説、心説、第三卷には、仁説、仁義禮智説、五常説、第四卷には、道説、一貫説、道統説、第五卷には、聖説、爲學説、小大學説、知行説、存養持敬説、第六卷には、治教説、王道説、王霸説を述べたり。寛政二年三月の自序あり。杏坪の説に對しては、坂井虎山の批評ありて、その書及び彼崎小竹が虎山に與へたる書、共に『今世名家文鈔』に收めたり。

(二) 諭俗要言刊本 一冊

この書は、子弟習字の傍、不知不識の間に人倫を辨せしめんが爲めに、陳襄の教令を和譯して板行したるものにして、本文漢文九十二字、一紙四行、一行五字、正楷にして、反點、傍訓を附し、譯文は一紙四行、一行七八字乃至九十字、行草體に平假字を交へ、漢字には、傍訓を附したり。杏坪が社會教育上に於ける意見を窺ふに足る。天野雨石君所藏、八月二日付、杏坪書狀に、假字手本の需に應じてこの書をすゝめたること、及び一冊代金貳匁二分にて弘布したることを知るべし。

追而諭俗要言は一冊、代料貳匁二分、にて家來共、下方へ遣し申候、此段も序に及御尊申候以上

一昨日御手紙被下忝拜見、秋暑彌御安和奉賀候、然而假名交り、手本様之もの、御所望被仰下承知仕候へ共、相應之もの、當時有合不申候、近年下方へ相渡候諭俗要言之書、一本懸御目候、是等御習候而もよろしく可有御座候、哉、外に愚詠之短冊少反故同様之もの、取合せ進呈候、是等御用立不申候、得共被仰下候儀、故先つけ申候、尙其内相考取出可申候

扱又御取寄せ被成候由にて香魚澤山に御惠贈被下御厚意忝折角拜  
味仕候右御禮も申上度草々如此御座候以上

八月初二日

頼 万四郎

天野傳 吉様

内 用

(三)食録箴刊本 二冊

この書も亦習字手本として、文政七年夏、譯し且つ書したるものにして、君祿を食み公事に奉ずるもの、訓戒なり。原文は、漢文二百九十六字、一紙四行、一行四字、一冊、譯文は、平假字交り文にして、一紙十行、一行十八九字、一冊なり。藤紙本、半紙本の二種あり。

(四)春草堂詩鈔刊本 四冊

杏坪の詩集なり、八卷に分ち、六百二十一首を收め、茶山、山陽、小竹、松陰の評あり。序は小竹、跋は松陰の撰、書は大阪人吳北渚の筆なりとぞ。天保五年、京都菱屋、大阪河内屋、廣島米屋發兌。

(五)唐桃集寫本

杏坪の歌集なり、三種あり、皆自筆なり。第一種は、竹原松阪照二氏藏にして、四冊の中一冊を失ひたりとて三冊を傳ふ、皆界紙なり、一冊は天明五年乙巳より享和三年癸亥に盡き、一冊はこれに續ぎて文政四年辛巳に盡く、機ね編年の如くにして必ずしも然らず、文政三年庚辰の條には、此年の冬詠二百首和歌別本に記すなどしあり、この二冊は未定稿と見え、朱又は墨にて幾度も添削し、間情意高雅、古調可比、珍吟堪賞、細賦深至などの評あるものあり。その數殆んど百首に及べり。一冊は、時令部、戀部と分ち、時令部は更に春夏秋冬に分てり。牛田山園藏とある左右合せて十八行の界紙にて、春二十五枚、夏十六枚、秋二十八枚、冬十九枚、戀十二三枚あり。この内にも精巧温雅、古調條暢、珍吟堪賞等の評を加へたるもの略百首ありて、前にいへると同じきやうなり。よりにて考ふるにこの一冊は先の二冊より選り出して順序を整へ、家集の體裁を定めて、名をも命じたるならん。而して失ひたりといふ一冊は、或はこれに接續すべき雜部なりしならん。

第二種は、廣島頼氏秘藏のものにして、唐桃集と云ひ、半紙本四冊あり。春夏秋冬雜の五部に大別して、雜を更に天象、地儀、郡邑、宮室、人品、服器、雜思、述懷、動植の九つに分ち、春部の初に「朱は景樹、紫は考安也」と朱書し、雜部雜思の初にも「考安評」と朱書したり。

第三種は、廣島山中正雄氏所藏のものにして、薄様半切の袖珍本一冊、自撰唐桃集、杏坪老人著と題し、分ちて春夏秋冬戀、行旅、雜、哀傷、神祇、祝賀、儒教、履歷、附録、物名、俳諧歌、小長歌、長歌と爲せり。小長歌とは、十七句、首尾は常の長歌にて中八句を對句とし、五七言律詩より案出したる新體なり。合計百首ばかり。蓋、杏坪の得意の歌のみにして、間、傍書ありといへども、體裁最も備はれるものなり。

(六)十句花月帖刊本 三帖

文政十年梅颺、達堂と上國に遊びたる時の書畫帖なり。開卷第一水野忠邦の「鶯花海錯」の題字あり、杏坪、梅颺の詩歌は勿論、菅茶山、筱崎小竹、履道、京都の山陽、小石元瑞、浦上春琴、百谷、大堀正輔、頼立齋、川部岱、宮原龍、江馬細香、僧雲華、

大倉笠山、袖蘭夫妻、瀧原宋閑、中林竹洞、木米、日野資愛卿、香川景樹、小田廷錫、賀茂季鷹、牧靱、北小路竹窓、貫名海屋等の自筆あり。書名は杏坪歸藩後の詩に、「老耄何必愛斯身、賜告幸探畿内春、養病非唯坐靈液、十句花月亦君恩」の詩より出づ。子采眞の跋あり。明治十六年開版。原本は今所在を知らず。采眞の跋に、「最可以爲我家之寶、襲、冀爲子孫者、謹勿散佚」の文あり。惜むべし。

(七)藝備孝義傳初稿刊本 二稿刊本 九冊 七冊

この書は、兄春水と共に藩侯重晟の命を奉じ、藤原茂親、深津和央等を率ゐて、和文を以て編輯したるものにして、初編には、明暦三年より寛政三年に至る百三十餘年間、二百二十餘人の孝子義人の行狀を收めたり。挿圖は、岡岷山の筆にして、寛政九年、春水の序、杏坪の序、若槻敬の跋あり。寛政九年三月脱稿、享和元年、刻成り、時の藩主齊賢より、これを幕府及び聖堂に納めたり。第二編は、寛政三年七月より十一年九月に至る八年間、百八十六人の善行を録し、享和二年、杏坪の序、同三年、春水の序、堀正輔の跋、挿圖は、太田午庵の筆、享和三年、脱稿、文化三年三月、刻成り、亦これを幕府に獻せり。共に京都、瑤芳堂の發

免なり。その後三篇及び拾遺の出版ありき。初篇及二篇の編輯につきて、杏坪の盡力せしことは既に云へり。京都山口松香君所藏八月二日付、本居東五郎宛、杏坪書狀によれば、その後、藩命じて板木を京都より返送せしめ、これを印刷し、廉價を以て弘布を謀ることとなり、杏坪これが任に當りたることを知るべく、杏坪が孝義傳に於ける關係深しと云ふべし。

尙々本文の趣少しにても餘慶御弘め被下候様相成候は、於私大慶可仕候間厚く御相談被下度奉願候

以手紙得貴意候秋暑難退御座候得共彌御清安御勤務被成候哉否承度奉存候私儀も濕瘡にて久々引籠申候所漸く此節出務試申候右に付暑中御尋も御無沙汰打過申候御諒察可被下候

然は御領分孝義傳御板行出來之所板木は其儘京師書林へ御預けにて是迄甚不便利に御座候に付此度當所へ御取寄せ相成摺仕立試御座候處、相應に出來致申候に付代料、至極相約め下料にして御掃に相成候、右御用向私引受取引申候、此頃仕立本出來仕候間初編壹部宛懸御目申候

何卒三原町方御知行所村々など望之者も有之候は、御弘め被下候様には相成申間敷候哉全體は無代にて被下候は、至極宣布可有之候へ共廣大之郡村左様にも難相成仍之料物相約め御掃に相成候は、却て勝手次第相求め行届候儀も可有御座哉との評議にて御拂弘に相成申候右之趣に御座候間御考合被成下度先は書物二部相添此段得貴意候不備

八月二日

追て國郡志下しらべ之儀其後御様子承り不申候定て追々御出來之儀と被存候御調郡明知之分は出來致候よし此儀も序に御尋得貴意候手紙雜誌第三年第九號所載

(八)藝藩通志

始め藩主淺野光晟、黒川道祐に命じて封内の地誌を作らしめ、寛文三年に成りたり。これを『藝備國郡志』といふ。この書上下二冊に分ち、上冊には安藝下冊には備後を收め、各建置沿革及び郡名形勝、風俗、城池、苑囿、山川、土産、寺觀

祠廟、古蹟、陵墓、人品、拾史等の諸門を分ち、漢文を以てこれを記るせり。近ごろ國書刊行會これを『續々群書類從』地理部に收めて、活刷に付したり。重晟に至りて、既に百二十餘年を距て、且つ記事粗にして、誤あるを以て、これが改修を企て、成らざりしを、齊賢その志をつぎて、文化元年、命を杏坪に傳へぬ。然れども、杏坪職務繁劇にして、着手すること能はざりしが、同八年、郡官たるに及びて、周ねく藩内の郡邑に通牒して、其地方の事物を録進せしめ、文政元年、始めて局を開き、加藤棕庵、杏坪の子采真、黒川方楸、津村聖山等を率ゐて、編輯に着手し、山田吉甫、正岡元翼、河原實秀、藤井其原、小泉一善、高橋義喬等、寫字圖書等に從事し、八年に至りて脱稿し、全部百五十九卷あり。當時、村里録進の稿本、今往々存して、國郡志編纂の材料といふ。國郡志の稱行はれたること久しといふべし。然れども、杏坪等は決して此等の書類のみによりて編輯したりしにはあらず、時には部下を伴ひて實地の踏査をも爲し、採訪をも爲したりしなり。この事は『春草堂詩鈔』に、津村明夫、高橋義喬二生を携へて舟に乗じて、佐伯郡能美島を巡りたる時の長律あり、又能地村の醉魚歌ある

を以てしても、證することを得べし。

凡例の主要なるもの概ね次の如く、

- 一 古制、邦國の次第、京都に近きを、上とすれば、此書も、備後、安藝と列ぬべき、もとよりなれど、藩の所領、備後、安藝二國に、わたれども、備後は全國にあらず、且、藩の本府も、安藝の内にありて、安藝を主とせざること能はず、故に、今、安藝の國を先にして、備後の國を後とし、書名も、藝藩通志と名づけられて、備後は其内に在なり、郡の次第も、倭名抄に依らず、安藝郡を首として、沼田郡これに次ぐ、其餘皆、方今の定にしたがふ、
- 一 兩國總體へかゝれる事は、總國の部に録し、その次は、廣島、三原、嚴島、尾道、各その地の一志を作り、其餘は、安藝八郡、備後八郡、各其郡志を悉らびて、専らその所管の内を記せるなり、

一 凡地志は、必地圖を作りて、まづ疆域山川を辨すべし、故に、此書も首に通藩の圖を作り、次に府、市、郡、邑、各其地の總圖を置て、次に各所の分圖を製し、其地の大小長短、見やすからんことを欲せるなり、然るに一紙

數寸の内に縮むれば、地方の精細なかく、圖すること能はず、たとひ圖するも其名書入るゝことも甚難し、其地の形勢方位等は粗見るに足らん歟、殊に景勝の地は眞景を寫して、別卷とす、

附、村圖は各村より書出に隨ひ、其地形を縮寫すれば、其村々隣境と符合するや詳ならず、且曾て論所たる地は意見を以定め難し、今其大槩を記し置ぬ、後人此圖を證として、分界を判斷すべからず、

一古文書の遺れるは、其時代の事見るべければ、模寫して卷末に附す、天正慶長比の書は甚多し、今多く洩らす、

一古器物を藏せるも亦多し、こは地志にかゝらぬものなれど、またちりほひ失はんとも料られず、今寫しとめて、その形を遺し、別に一卷として、又古文書の次に附け置なり、

その目録を示さば

卷一、提封圖考

安藝國國名考、疆域形勢、國府、路程、驛、郵考、郡邑、建置沿革考、鄉村考、

田畝、歲額、租調、庸、戸口、牛馬、舟船、社倉、

卷二、古蹟、名神考、故官、

卷三、備後國、細目安藝國に同じ古蹟のみを缺く、

卷四、風俗、物産、

卷五、故事、災祥、

卷六、——十、廣島府 (註) 明治二十二年廣島市を置く

卷十一、——十二、三原府 (註) 御調郡の内

卷十三、——卅二、嚴島 (註) 佐伯郡の内

卷卅三、——卅四、尾道 (註) 明治三十一年尾道市を置く

卷卅五、——四十二、安藝郡 (註) 中古安南郡と云ひしを

卷四十三、——四十八、沼田郡 (註) 中古佐東郡といふ寛文中沼田郡と

改め明治三十一年高宮郡を併せて

と安佐郡といふ

佐伯郡 (註) 中古佐西郡と云ひしを

改むしを

山縣郡

卷四十九、——五十五、

卷五十六、——六十一、

第十二 著 述

二五三

卷六十二——六十八、高田郡  
 卷六十九——七十四、高宮郡  
(註)中古安北郡といふ寛文中高宮郡と改め明治三十一年沼田郡を併せて安佐郡といふ

卷七十五——八十三、賀茂郡

卷八十四——九十二、豊田郡

卷九十三——百、御調郡

卷百一——百二、甲奴郡

卷百三——百八、世羅郡

卷百九——百十四、三谿郡  
(註)明治三十一年三谿郡といふ併せて三十一

卷百十五——百二十、奴可郡  
(註)明治三十一年比婆郡といふ併せて三十一

卷百廿一——百廿五、三上郡  
(註)明治三十一年比婆郡といふ併せて三十一

卷百廿六——百卅一、三次郡  
(註)明治三十一年三谿郡といふ併せて三十一

卷百卅二——百卅七、惠蘇郡  
(註)明治三十一年比婆郡といふ併せて三十一

卷百卅八——百四十、古文書、古器物(註)  
嚴島の古文書は卷十八、廿三、嚴島の古器物は卷廿四、廿五、

卷百四十一——百四十二、名勝圖

卷百四十三——百五十九、藝文(註)嚴島の藝文は卷廿六——卅二

の如く、杏坪が一生の大事業として、非常に心血をそそぎたるものなり。その開局に當りて、棕廬は二十九歳、采眞は二十八歳、聖山は二十五歳の壯年なれば、指揮監督は、一に杏坪の双肩にかゝりたりしなり。

體裁に就いて考ふるに、題して通志と云ふと雖、而かも凡例第二條に記せざるが如く、先づ安藝備後の二國に分ち、國名、疆域、形勢、國府、路程、驛、郵、郡名、建置沿革、鄉村、田畝、歳額、租調、庸、戸口、牛馬、舟船、社倉、古蹟、名神、故官等の項目を、各國に就きて總説したる外、大體に於ては、郡に分ち、村に分ちて、立てたる地方誌なれば、通志といふよりも、寧ろ國郡志といふべきものなり。

編纂に先ちて、福山藩に於ては、友人菅茶山、地誌編輯の舉ありて、文化六年、成就したり。これを『福山志料』といふ。杏坪は茶山に囑して、その目録を借覽したれども、尙不審あるを以て、更に書を送りて、茶山の説を求めたり。その書、今、菅氏に藏す。



大明一統志並本朝五畿内志之類は一國を擧げ各門を分て記候故郡村は皆々其門之内に分附いたし候に付一郡を見申度候時には用立不申候況や一村は尙更見え不申候今時之制は國郡村三段にて村の所管も甚重く御座候へは一村を表し其内へ大槩田額山川橋梁寺祠など書列候儀可宜哉とも被存候貴志山志福は如何御座候哉御領分の總體へかゝり候儀最初に出し其次は福山なるべし其次は郡分けにして又其内に村分け小内記載御座候哉又は郡分計にて村分ケは無之候哉古城古墳人物等は村分けには難相成是は總裁之所へ出し門を分ケテ記シ候儀可然哉と奉存候貴著之目錄も拜見仕候得共右郡村之處無心許奉存候今度拜借仕候は、早速相知レ候儀には有之候得共郡村之書様如何可有之候哉得失御示奉仰候

福山志料は首に上啓凡例引用書目を擧げ國郡名號形勝氣候祥異風俗租調名官流寓人物を總叙して後福山治下深津郡安那郡品治郡蘆田郡沼隈郡鞆津鞆浦名勝土産と次第し社寺名蹟國造國司古戰場等につきては辨説を立

て古文書等は附録と爲し計三十五卷あり。地誌としては未成の書なれば名づけて志料と曰へるならん。杏坪は福山志料の詳密を知悉したる後種々の利害を研究してその體裁を定めたりしや必せり。熊見定次郎君が杏坪が別に編纂したる漢文藝藩通志と比較して國文の通志は巻帙浩濶にして諸郡に全部を頒與すること能はざるにより各郡その郡の分のみを備へしめんとてこの體を取りたるならん漢文の分は初より頒與の意なく冊數も十八卷に留りて翻讀便利なれば名目につきて國郡を列記し通志の名に負かずと説けるも一理あるべく又この書は藝備國郡志の改修として着手されたるが故に自づから前志の體裁に依りたることもあるべく郡村を單位として記述するを實際上便利なりと信じたるによることならん。次に内容について考ふるに文章は假字交り體にして格調高雅なりといへどもその弊としては往々簡單に失し記實の筆としては物足らざる感ありこの點につきては修志の資料として諸村より提出したる草稿の却て見るべきもの多きを覺へしむ。福山志料がその凡例にも云へるが如く煩雜を

厭はずして詳備を務めたるに比すれば、一着を輸したりとやいはん。参考引用書の名目を示さざるは遺憾なり。福山志料が引用書の本文を擧げて按を付したるは、甚だ親切にして、人を誤ること少しといふべし。田畝歳額、租調庸、戸口、牛馬舟船、社倉等、計算詳密なるが如くにして、而かもその計算の月日を記入せざるは不審なり。試みにこの書の人口を以て、廣島、賴氏所藏の『十六郡人數増減寄書』の人口と比較するに、

藝藩通志 十六郡人數寄書 評

沼田郡	三五、一五八	三五、一五八	(文政元年)	文政元年度と符合
安藝郡	八、六六	八、五五	(文政元年)	文政元年よりも百三人多し
賀茂郡	八八、二七一	八九、二七〇	(文政二年)	文政二年度よりも九百九十九人少し
豊田郡	八二、三三二	八二、三三五	(文政中)	
高田郡	五、五五	五、二四六	(文政二年)	文政二年度よりも千三百四十九人多し
高宮郡	二六、九三	二六、九三	(文政二年)	文政二年度と符合
佐伯郡	六九、七六	六九、七四	(文政三年)	文政三年度よりも二十四人多し

山縣郡	五、三六二	五、三〇	(文政二年)	文政二年度よりも七十二人多し
御調郡	六〇、三三	六〇、二〇六	(文政元年)	文政元年度よりも百三十九人多し
世羅郡	二五、五四	二六、四九六	(文政三年)	文政三年度よりも九百四十七人少し
三谿郡	一六、二四	一六、二九	(文政三年)	文政三年よりも四人少し
甲奴郡	四、二四	四、二五	(文政二年)	文政二年度よりも一人少し
奴可郡	一三、四六	一三、三六	(文政四年)	文政四年度よりも百四十人多し
三上郡	八、九二	八、九〇	(文政二年)	文政二年度よりも一人少し
三次郡	三、〇六	三、〇八	(文政二年)	文政二年度よりも四人少し
惠蘇郡	二、八五	二、七〇	(文政三年)	文政三年度よりも百五十五人多し
廣島府	四九、七			
三原府	六、三六			
尾道町	九、四八			
嚴島	三、七四			

沼田郡の人口は文政元年度の調査と符合し、高宮郡は同二年度と符合せる

外、一般に文政元年乃至四年の調査と出入ありて、世羅、賀茂、高田三郡の如きは、九百乃至千三百の相違ありとす。勿論人口の増減は、郡村によりて異同あるべく、當時の調査は、絶對的精密のものにあらざるべしといへども、如上の差違は、非常の事たらずんばあるべからず。ここに於て通志の讀者は、この書の數字は、何年の統計に據りたるかを訝らざるを得ざるべし。この事實にこの書の一大缺點なり。

この書が、古文書、古器物等を模寫若しくは謄寫して収録したるは、頗る當然のことにして、爲めに湮滅の災を免れたるもの少からず。例へば嚴島金剛院の金鼓の如き、今紛失してその在所を知らずといへども、この書の挿圖によりてその大體を知り得べきが如し。然れども往々煩を厭ひて省略に従ひたるものは、上述の用意と矛盾せりと云はざるを得ず。例へば嚴島古文書、仁安三年十一月、神社の造營に關する神主景弘の解曆仁二年正月、神社注進狀等の間々中略省略あるが如く、原書今散佚して、容易にその全文を知り難し。通志にして忠實にその全文を採録したりしならんには、この憾決し

てあるべからず。この事實にこの書の一大缺點なり。

『古事記』の多祁理宮を竹造の假宮と説きて、式内多家神社をオホイへと訓むことを否定し、タケと訓みて多祁理宮に當てたるが如き、『日本書紀』仲哀天皇二年に見ゆる淳田門（なると）は明かに日本海岸なるべきを、この書には豊田郡能地村なりと説きたるが如き、又これより一轉して、御調郡を『萬葉集』に水調郡とあるに拘はり、水調郡長井浦を絲崎に當て、神功皇后征韓の時、木梨真人といふもの出で迎へて水を調ぎたりといふ俗傳を採用して、郡名の起源と爲したるが如き、御調八幡宮に所藏せし古墳發掘の品字鈴を驛鈴と誤り、筑紫銚を神代青石銚と認めたるが如き、『和名抄』三谿郡松部郷は、私部の誤寫にして、吉舎村に相當すべきにも拘はらず、松字を棗の誤寫と考へて、棗原村に當てたるが如き、高田郡生桑村生田知教寺内の天下墓を、足利義昭埋骨の處といふ俚言によりて、義昭晩年この寺に隱棲し終にこゝに薨じたるやに記したるが如き、考證の足らざる點も亦尠からず。

然れどもこれを『藝備國郡志』に比すれば、増補改良幾等なることを知らず、同

時代の地誌中、恐くは優等たるべく、廣島藩内の地誌及び歴史地理を研究するもの、先づ披閱すべき大著なり。余はこの書を讀く毎に杏坪が老齡を以てして、劇職の傍、小數の局員を率ゐて、この大著を成就せしめ、更に進みて漢文藝藩通志を脱稿したる勇氣と忍耐とを讚歎せざる時なし。

嗚呼、杏坪歸泉して既に七十四年、社會の繁劇なる、事變の煩雜なる、往時の百年二百年に比すべし。地方誌の新撰當に計るべく、第二の杏坪出づべき時ならずや。

第十三年 譜

寶曆六丙子(一歲) 安藝國賀茂郡竹原下市村に生る

同一二壬午(七歲) 母道工氏歿す

安永六丁酉(二二歲) 父亨翁に隨ひて石州人丸祠に詣づ

兄春水歸省し父亨翁を奉じて大阪京都に赴く次兄春風も亦隨行し大阪に留りて醫を學ぶ

同 九庚子(二五歲) 兄春水父亨翁を大阪に迎へ再び京都にゆく杏坪此時大阪に遊學す

天明元辛丑(二六歲) 兄春水廣島藩に聘せらる

同 二壬寅(二七歲) 嫂梅颯姪山陽を伴ひて大阪より廣島に着し父亨翁の病篤きを聞きて竹原に歸省し次兄春風と共に侍養す

同 三癸卯(二八歲) 父亨翁歿す  
廣島に來る

兄春水に隨ひて江戸にゆく

同 四甲辰(二九歲) 兄春水に先ちて竹原にかへる

同 五乙巳(三〇歲) 廣島藩儒者となり五人扶持を給せられ御小姓頭支配に屬し胡町に別戸す

同 六丙午(三一歲) 熱政堀行充の爲めに矢野社告文を作る

兄春水の西研屋町の家に同居

同 七丁未(三二歲) 加藤氏を娶る

天明八戊申(三三歲) 書物料として毎年金五兩を給せらる  
寛政元己酉(三四歲) 十人扶持となる  
同 二庚戌(三五歲) 原古篇成る

兄春水國泰寺裏門前の賜邸に徙る

同 三辛亥(三六歲) 長男采真生る

同 五癸丑(三八歲) 藩學の門長屋に別居す

同 六甲寅(三九歲) 竹原に行く

同 七乙卯(四〇歲) 十五人扶持となる

同 八丙辰(四一歲) 姪山陽と石州有福に入湯

同 九丁巳(四二歲) 兄春水に代りて藩侯世子齊賢の伴讀となり山陽を伴

ひて江戸にゆく

孝義傳初篇成る

同一〇戊午(四三歲) 姪山陽と共に歸藩

同一一己未(四四歲) 藩侯重晟隠居して齊賢立つ

享和二壬戌(四七歲) 重造嚴島神廟鳥居記を作る

藩學繪圖改正に與りて力あり

孝義傳二篇成る

同 三癸亥(四八歲) 江戸ゆき

御奥詰次席となる

文化元甲子(四九歲) 國郡志改修を命せらる

同 二乙丑(五〇歲) 藩侯齊賢に隨ひて歸藩

三十石三人扶持を給せらる

觀徳硯を賜ふ

同 三丙寅(五一歲) 藩侯齊賢特に親書を執政に下して政治を杏坪に諮詢  
せしむ

同 五戊辰(五三歲) 父子二人江戸にゆく

同 七庚午(五五歲) 京橋門外に賜邸

藩侯齊賢に隨ひて江戸にゆく

文化八辛未(五六歲) 郡政につきて建議す

廣島にかへる

御納戸奉行上席郡御役所詰となる

兄春水と各銀二枚を賞與せらる

同 九壬申(五七歲)

三次郡にゆく

惠蘇郡山王社に父老を會飲す

鐵砲町に邸がへ

同一〇癸酉(五八歲)

長男采眞香川氏を娶る

春省

三次惠蘇二郡代官となり知行百十石を給せらる

秋省

先侯重晟薨す

同一一甲戌(五九歲)

國泰寺東に邸がへ

春省 雨を惠蘇郡山王社に祈る

長孫正義生る

秋省

同一二乙亥(六〇歲)

長崎に出張す

豊田郡にゆく

春省

佐伯郡にゆく

秋

同一三丙子(六一歲)

奴可三上二郡代官を兼ね

兄春水歿す

春

長孫女生る

佐伯郡にゆく

同一四丁丑(六二歲)

本家邸替につきて陳情す

春省 晴を三次郡知波夜姫社に祈る

文政元戊寅(六三歲)

秋省 知波夜姬社に父老を會飲す  
春省

郡廻同格となる役料九十石知行と併せて二百石  
妻加藤氏歿す

秋省

諭俗要言成る

地誌改修の局を開く

同 二己卯(六四歲)

春省

次子冬吉夭す

同 三庚辰(六五歲)

嚴島に遊ぶ

春省

出雲石見に遊ぶ

佐伯郡にゆく

同 四辛巳(六六歲)

地誌編纂の爲め豊田郡の海岸を視る

三原にゆく

同 五壬午(六七歲)

嚴島に遊ぶ

長子采真切米十五人三人扶持を給せらる

同 六癸未(六八歲)

惠蘇郡三日市村と三上郡庄原村との紛糾を解く

惠蘇郡高野山村嘉禾を産す

尾道にゆく

同 七甲申(六九歲)

食祿箴成る

同 八乙酉(七〇歲)

藝藩通志成る

兄春風歿す

五十石加増せられて百六十石となる役料と併せて二

百五十石

同一〇丁亥(七二歲)

百日の賜暇を得て京都吉野に遊ぶ

秋刑の議を言上す

秋省

同一一戊子(七三歲) 三次惠蘇をやめ奴可三上をやめ郡廻本役三次町奉行

となる

采真御勘定所吟味役同格となる

家を三次に移す

文政一二己丑(七四歲)

廣島に來る

藝藩通志編輯を賞せられ時服を賜はる

道後入湯

秋省

天保元庚寅(七五歲)

山王社内に充糧碑を立つ

願によりて辭職隠居廣島にかへる

采真知行高百四十石

采真御銀奉行となり白鳥に賜邸

藩侯齊賢薨じ子齊肅立つ

同 二辛卯(七六歲)

嚴島に避暑

竹原にゆく

同 三壬辰(七七歲)

竹原に郷賢祠を建んことを謀る

子采真御藏奉行となる

姪山陽歿す

二孫鶴三郎生る

同 四癸巳(七八歲)

采真真鳴へ邸替

春草堂詩鈔刻成る

同 五甲午(七九歲)

歿す比治山安養院に葬る



附

錄

附 錄 目 次

漢 文

遊石稿安永六年原本竹原賴俊直氏藏	一頁
矢野八幡宮告文天明六年原本矢野香川安登氏藏	一五
祭福田元直墓文文政十二年	一六
重造嚴島神廟鳥居記享和二年	一七
福島社記文化十四年	二一
長井浦記文政五年	二二
洗心堂記文政十二年	二四
甲斐庵記天保九年	二五
原古編序寬政二年	二六
春水遺稿附言文政五年	二七
藝藩通志序文政八年	二九

附 錄 目 次

題雲窓遺稿首文政十一年(詩)原本廣島山田吉左衛門氏藏……………三一  
 題耶馬溪圖卷後天保元年(詩)原本尾道橋本吉兵衛氏藏……………三二  
 題嚴島扁額縮本天保二年(詩)原本尾道橋本吉兵衛氏藏……………三三  
 書類然無思圖卷後文政六年原本尾道橋本吉兵衛氏藏……………三三  
 跋谷文晁山水卷後文政六年原本尾道橋本吉兵衛氏藏……………三三  
 加藤十千行狀文化二年……………三四  
 賴春風行狀……………三八  
 帝釋廟碑文……………四〇  
 岡田治部右衛門遺烈碑文文化三年……………四一  
 奧謀明碑文……………四一  
 金子樂山墓誌文化二年……………四三  
 廣瀬臺山墓誌……………四三  
 中村太室墓誌文化十四年……………四四  
 加藤玲瓏墓誌……………四五

惠美大咲墓誌……………四六  
 木村尙誼墓誌……………四八  
 菅茶山墓誌……………四九  
 小寺檜園碑文……………五一  
 龜山紀卿碑文……………五三

國文

甲辰紀行天明四年原本竹原高間清綱氏藏……………五五  
 藝備孝義傳序(寛政九年)……………八七  
 藝備孝義傳二編序享和二年……………九一  
 義士百回忌追悼和歌序享和二年原本竹原賴俊直氏藏(缺)……………  
 縮景園記……………九四  
 望海樓記文化二年原本廣島天野雨石氏藏……………一〇三

和歌

自選唐桃集原本度島山中正雄氏藏……………一〇六

食祿歲文七年……………一六七

諭俗要言文政元年……………一七二

遊石稿

歲次丁酉<sup>○安永六年</sup>維暮之春春霖始晴暖景熙熙家君高角之遊可謀焉適有佐伯  
 郡人來我土受<sup>○</sup>鄙<sup>○</sup>為<sup>○</sup>俚<sup>○</sup>者<sup>○</sup>賃<sup>○</sup>之<sup>○</sup>為<sup>○</sup>與<sup>○</sup>丁<sup>○</sup>越<sup>○</sup>廿<sup>○</sup>二<sup>○</sup>日<sup>○</sup>戊<sup>○</sup>子<sup>○</sup>起<sup>○</sup>程<sup>○</sup>到<sup>○</sup>於<sup>○</sup>郊<sup>○</sup>外<sup>○</sup>而<sup>○</sup>決<sup>○</sup>乃<sup>○</sup>經<sup>○</sup>西  
 村<sup>○</sup>田<sup>○</sup>万<sup>○</sup>里<sup>○</sup>有<sup>○</sup>石<sup>○</sup>楯<sup>○</sup>阪<sup>○</sup>阪<sup>○</sup>以<sup>○</sup>西<sup>○</sup>為<sup>○</sup>松<sup>○</sup>子<sup>○</sup>山<sup>○</sup>翠<sup>○</sup>色<sup>○</sup>如<sup>○</sup>拭<sup>○</sup>有<sup>○</sup>櫻<sup>○</sup>嶺<sup>○</sup>櫻<sup>○</sup>花<sup>○</sup>雜<sup>○</sup>於<sup>○</sup>松<sup>○</sup>際<sup>○</sup>皚<sup>○</sup>々<sup>○</sup>然<sup>○</sup>過<sup>○</sup>  
 謳<sup>○</sup>歌<sup>○</sup>溪<sup>○</sup>日<sup>○</sup>既<sup>○</sup>昏<sup>○</sup>黑<sup>○</sup>投<sup>○</sup>四<sup>○</sup>日<sup>○</sup>市<sup>○</sup>逆<sup>○</sup>旅<sup>○</sup>己<sup>○</sup>丑<sup>○</sup>三<sup>○</sup>日<sup>○</sup>辨<sup>○</sup>色<sup>○</sup>而<sup>○</sup>出<sup>○</sup>田<sup>○</sup>野<sup>○</sup>曠<sup>○</sup>溥<sup>○</sup>抵<sup>○</sup>飯<sup>○</sup>田<sup>○</sup>原<sup>○</sup>原<sup>○</sup>有<sup>○</sup>  
 陂<sup>○</sup>池<sup>○</sup>數<sup>○</sup>處<sup>○</sup>或<sup>○</sup>曰<sup>○</sup>古<sup>○</sup>歌<sup>○</sup>之<sup>○</sup>所<sup>○</sup>咏<sup>○</sup>新<sup>○</sup>田<sup>○</sup>池<sup>○</sup>者<sup>○</sup>是<sup>○</sup>也<sup>○</sup>蓋<sup>○</sup>國<sup>○</sup>音<sup>○</sup>相<sup>○</sup>近<sup>○</sup>故<sup>○</sup>誤<sup>○</sup>當<sup>○</sup>否<sup>○</sup>吾<sup>○</sup>未<sup>○</sup>之<sup>○</sup>知<sup>○</sup>也<sup>○</sup>行<sup>○</sup>  
 里<sup>○</sup>許<sup>○</sup>入<sup>○</sup>山<sup>○</sup>茂<sup>○</sup>松<sup>○</sup>細<sup>○</sup>泉<sup>○</sup>滿<sup>○</sup>目<sup>○</sup>不<sup>○</sup>凡<sup>○</sup>是<sup>○</sup>為<sup>○</sup>瀨<sup>○</sup>野<sup>○</sup>大<sup>○</sup>山<sup>○</sup>亦<sup>○</sup>見<sup>○</sup>于<sup>○</sup>萬<sup>○</sup>葉<sup>○</sup>集<sup>○</sup>家<sup>○</sup>君<sup>○</sup>曰<sup>○</sup>廿<sup>○</sup>餘<sup>○</sup>年<sup>○</sup>前<sup>○</sup>屢<sup>○</sup>  
 歷<sup>○</sup>此<sup>○</sup>山<sup>○</sup>今<sup>○</sup>也<sup>○</sup>髮<sup>○</sup>絲<sup>○</sup>全<sup>○</sup>白<sup>○</sup>我<sup>○</sup>為<sup>○</sup>山<sup>○</sup>色<sup>○</sup>不<sup>○</sup>能<sup>○</sup>無<sup>○</sup>感<sup>○</sup>停<sup>○</sup>輪<sup>○</sup>流<sup>○</sup>觀<sup>○</sup>久<sup>○</sup>之<sup>○</sup>下<sup>○</sup>飯<sup>○</sup>旗<sup>○</sup>亭<sup>○</sup>瀨<sup>○</sup>野<sup>○</sup>中<sup>○</sup>野<sup>○</sup>村<sup>○</sup>  
 并<sup>○</sup>相<sup>○</sup>接<sup>○</sup>抵<sup>○</sup>海<sup>○</sup>田<sup>○</sup>驛<sup>○</sup>地<sup>○</sup>皆<sup>○</sup>濱<sup>○</sup>海<sup>○</sup>民<sup>○</sup>寄<sup>○</sup>生<sup>○</sup>于<sup>○</sup>海<sup>○</sup>牡<sup>○</sup>蠣<sup>○</sup>乾<sup>○</sup>苔<sup>○</sup>最<sup>○</sup>名<sup>○</sup>度<sup>○</sup>舟<sup>○</sup>越<sup>○</sup>嶺<sup>○</sup>憩<sup>○</sup>巖<sup>○</sup>鼻<sup>○</sup>其<sup>○</sup>山<sup>○</sup>皮<sup>○</sup>  
 骨<sup>○</sup>皆<sup>○</sup>石<sup>○</sup>老<sup>○</sup>樹<sup>○</sup>不<sup>○</sup>土<sup>○</sup>而<sup>○</sup>植<sup>○</sup>巖<sup>○</sup>巖<sup>○</sup>怪<sup>○</sup>偉<sup>○</sup>家<sup>○</sup>兄<sup>○</sup>嘗<sup>○</sup>奇<sup>○</sup>之<sup>○</sup>引<sup>○</sup>翼<sup>○</sup>餘<sup>○</sup>編<sup>○</sup>津<sup>○</sup>々<sup>○</sup>稱<sup>○</sup>焉<sup>○</sup>晡<sup>○</sup>時<sup>○</sup>入<sup>○</sup>國<sup>○</sup>都<sup>○</sup>問<sup>○</sup>  
 林<sup>○</sup>伯<sup>○</sup>彊<sup>○</sup>伯<sup>○</sup>彊<sup>○</sup>歡<sup>○</sup>迎<sup>○</sup>慰<sup>○</sup>勞<sup>○</sup>備<sup>○</sup>至<sup>○</sup>剪<sup>○</sup>燭<sup>○</sup>而<sup>○</sup>話<sup>○</sup>到<sup>○</sup>三<sup>○</sup>更<sup>○</sup>庚<sup>○</sup>寅<sup>○</sup>四<sup>○</sup>日<sup>○</sup>辭<sup>○</sup>伯<sup>○</sup>彊<sup>○</sup>訪<sup>○</sup>風<sup>○</sup>律<sup>○</sup>老<sup>○</sup>人<sup>○</sup>多<sup>○</sup>  
 賀<sup>○</sup>亭<sup>○</sup>亭<sup>○</sup>在<sup>○</sup>府<sup>○</sup>之<sup>○</sup>西<sup>○</sup>郊<sup>○</sup>蓬<sup>○</sup>門<sup>○</sup>葦<sup>○</sup>簾<sup>○</sup>花<sup>○</sup>樹<sup>○</sup>菜<sup>○</sup>圃<sup>○</sup>風<sup>○</sup>致<sup>○</sup>極<sup>○</sup>高<sup>○</sup>老<sup>○</sup>人<sup>○</sup>八<sup>○</sup>秩<sup>○</sup>尙<sup>○</sup>壯<sup>○</sup>四<sup>○</sup>五<sup>○</sup>年<sup>○</sup>前<sup>○</sup>遊<sup>○</sup>石<sup>○</sup>  
 之<sup>○</sup>高<sup>○</sup>角<sup>○</sup>為<sup>○</sup>余<sup>○</sup>談<sup>○</sup>其<sup>○</sup>勝<sup>○</sup>槩<sup>○</sup>余<sup>○</sup>乃<sup>○</sup>出<sup>○</sup>家<sup>○</sup>兄<sup>○</sup>所<sup>○</sup>寫<sup>○</sup>地<sup>○</sup>圖<sup>○</sup>則<sup>○</sup>老<sup>○</sup>人<sup>○</sup>教<sup>○</sup>余<sup>○</sup>諄<sup>○</sup>々<sup>○</sup>且<sup>○</sup>曰<sup>○</sup>汝<sup>○</sup>慎<sup>○</sup>勉<sup>○</sup>旃<sup>○</sup>地

之僻道之險，殆不可名狀，勿以風雨而行，勿貪路程而兼行，遂謝出，去府三四里，循渚而行，村民燔蠶房，蛤殼成灰，積累如山者數處，屋蓋之，其灰稍散，糝糊於路，使人爲灑橋，驢背之懷，亦一奇，有鹽塢，極整，造廿日市，有津和野，濱田舟艦，各置監舍，嚴隄孔，邇山色秀麗，若宮殿樓榭者，幾可數，西指大殿，暈飛者，曰地御前，嚴隄神與徒御之地也，海山之望最佳，入宮內村，從是北折，就溪路，山稍峭，路漸險狹，行里餘，到明石村，土地寒蕪，人煙蒼涼，山道迂縈，如斷而續，仰則層嶂衝天，四面屹立，人馬逡巡，風律老人之教，是可徵也，登盡三之二，乃視山溜涓然而滴者，稱柳水，草乾且不竭，云甘冷止渴，絕頂曰潮見，峙村曰峙村，川稱峙川，水石怪異，日暮投友田里民舍，村女夜績，不輟歌笑，言談喧，可厭，與丁爲本邑之人，請余因省其母，辛卯<sub>○二十</sub>發友田村，山野之間，往々見花，春鳥綿蠻，蓋地之幽僻，春始爲十分，經津田，十王堂，內山諸邨，村民以造番爲業，佐伯山縣，地高氣寒，楮紙之精良者，多出于斯，石防之地亦爾，入一屋視之，老嫗當斗槽，斂楮水於槽，兩手持簾，入水蕩起，水淋下，而後覆簾，落帚於板上，食頃，疊積數百張，紙之厚薄精粗，皆由手法，云揭起焙乾未遑見之，嫗又說煮浸之法，家々剝取楮皮，搗爛之，其響相和，數里而未了，土人曰：佐伯郡強

半爲國老上田氏之采地，山重壤乏，故民多作炭，女則製番，番炭皆入民稅，路之所遇，負擔者，馱傳者，皆此二物已，往々有炭竈，以其在險處，未得往窺，竈內漸入，峽路上有二巨石，頽然相依，其一屹聳，高可三丈，一則欹以跋其上，使僕登之，且詳石狀，石而夷可坐，而毛骨寒慄，石下有亭，不憩而行，石徑數里，銳嶂環翊，水達於兩山，奔浪流石，度所川，川之左右，翠巖嶙峋而起，人抵高角者，便道取疾，則折而右，徑吉和鄉，橫過冠山之陰，然峽極峻，溢喬樹，翳天，蓋數里，少視日月，云到栗棲村，有津和野，俟之館，絕栗棲川，水駛甚，其淺可揭，聞之土人，雖川不廣，有雨輒必猛峻，奔急，人皆懼之，直就山道，石骨突出，有堂置觀音，老樹鬱密，是爲厭谷口，蓋取勸厭之義乎，或作惡谷，蓋險惡可憎之義乎，皆非美名也，層嶂壁立，所謂山從人而起者也，徑皆九折羊腸，時或下視，則聞水聲雷吼，目眩足酸，地若少夷，輒憩，向之所仰，其頂可摩，極峻俯瞰，群峯綿亘，不可一二數計，冠山大嶺，最爲詭特，循山西廻，有老栢樹，其實得三石，因稱三石栢，云其下絕壑萬仞，谿間未可測也，路傍之樹，皆橫出，蒙絡擁蔽，其下行人臨之，幸不得眩絕焉，直下松嶺，入小積溪，三田川當其間，下其地過僻，異草茲粵，山躑躅盛開，灼燦相射，其樹卑亦數尺，紫翠環之，春鳥嚶々如織，停橋數處，中

倉山出其左，溪窮到小勢原，山皆經野燒，彌望平遠，西望崇岡，怪石突兀，里稱狼藏，土人謂巖下有穴，猛獸居焉，北下抵中道村，地勢密狹，山民食匱，橫穿村落登山，其逕石泉數涉，上而復上，是爲奈間山，一曰板屋峠，山之脊屬周防，界有榜木，羅漢山連其左，孤圓貞秀，莫與爲擬，其頂有奇石，石各占佛像云，以無路可繇，故不得往視之，山跨藝防，以壓石見路，冬月雪埋洞壑，故石裂樹碎，蓋第一險處也，由栗棲村，以到此，山蹊數里，其路爲間，不用則不營茅塞之矣，殆崩絕，聞當津和野侯朝覲之日，每發村民以成路，汎掃備至，因以得乃爾云，憇奈間山頂俯瞰西而百里，爲防爲長，凡數十百峰，無不摩雲者而未見尺寸田野，下於陶谷，路峻與厭谷，伯仲，大原民居頗多，押切阪與星阪對，大語猶可相聞者，然登降里餘，宇佐川割其間，西馳六里，會岩國川，兩阪嶄然，河水激洶，日亦晦，數里之險，僕從甚痛，沾酒勞之，仰視星阪，暮雲空入，其路沙石捷峻，賈壯而上，爲石防之境，立木以標焉，又記行程，山上有盤舍，炳燭而行數里，右邊之山野燒甚熾，亦一奇，宿田原，壬辰，六日，二十樋口，有井，藏木諸村，地初曠豁，往々視棄而不耕者，蓋以其磽土也乎，水無川，細石平布，無一勺水，名亦稱之，到六日市驛，地稍殷實，行三四里，村落許多，鷄犬相聞，經廣石，踰小嶺，見淺

倉山，天川北馳，危崖噉浪，七日市之西，渡高尻川，飯田丸過，大野原木部谷，皆靠山與水迂廻，其水或峻或平，下流爲柿木川，諸水注之，水稍深碧，盤洞，民舟之以度，左取津和野道，蘆田，福川，地漸險阨，溪廻嶂聳，潏淖盤詰，翠樾蒙密，樹多柞樅，楮樟之屬皆良材，頂曰杉嶺，日暮無望，獨青野嶽峭拔，近爲吾杖頭之物，秀色寡仇，下笹山，旣夜，水注石崩，窮莫甚焉，覓松炬於民屋，照之而下，幸獲不到顛路也，下六地藏，最峻滑，束燎欲滅者數々，遠瞰燈火星列，是爲津和野城，乃作氣而降，都城堅麗，大第嚴整，有巨梁，梁北街市尤整，夜行失物，觀特爲恨，癸巳，二十大雨，命館主設酒肴，賞與丁，余欲問國老布施氏，館主疑余知國老，乃謀諸里正坊長，余爲諭之，以府士吉松潤甫遊于浪華，與家兄往來，以故亦知布施氏之由，而余與半敗，旣告之，布施氏，布施氏時病，使來謝，遺石蜜若干斤，言辭懇々，無所不至，余亦厚謝，終日雨甚，吉松父子則在浪華邸，故不得訪焉，旅館近而青野嶽，却失其頂，天神山以雨不登，甲午，二十猶雨，引滿而發，登降數回，爲樞實峠，商人村，志久谷，皆山，德城最高，雨歇霧消，宵指青野嶽，遠望益奇，宮之美山，皆其兒孫已，嶽舊稱妹山，見于萬葉集，遺青原，一市聚也，店多，河魚，舟楫漕賈之利生焉，古歌所謂石川也，凡謁高角者，買舟

于此爲便，是日以雨不得舟之，乃喚渡傳於東岸，行數里，絕橫田川，水由東北會石川，堤防甚美，梅月川，舟橋度之，蹠蹠登嶺，爲須古峠，風雨暴至，咫尺不辨，降出曠原，諸山垣陀，石川西廻，樹竹佳麗，東接益田，是爲石見野也，重亂石川，入高角，投湊氏，呼酒命，浴日未夕，乙未九日，蚤起，盥櫛盛服，使館主爲導，謁柿本祠，祠在高角山，山不甚高，石川匝之，松樹鬱葱，磴道甚整，樓觀殿閣，極其閎壯，巨麗，眞福寺副之，寺主引余父子拜神像，爽穆肅然，左右執筆，昏家君獻和歌數首，殿右有巨碑，僧顯常文，藩主之所樹，寺有筆梯者，枝葉扶疏，花蒂繁密，環之爲籬，寺主無盡善和歌，與家君同好，留談移時，且出所藏詔言御題和歌等，又贈筆梯子一顆，子藏而尖黑，甚可愛玩，午時辭赴戶田，路濱于海，松樹灌叢，晴沙淨潔，亦佳處也，沙途里餘，曰吹上濱，鄉導曰：往昔民庶三千戶，爲風濤湮沒焉，西望不別天地，海舶萍跼于空碧，鰭振大麻，諸峯聳於東北，高隴在于海上，長之河山接境，海上有怪巖，屹立數十丈，曰觀音巖，隱然爲佛面，肥州博多云：風沙之所簸揚，草樹皆縮，樹裂根露，且沙之沒田成，山者數處，皆風爲然，大人曰：吾昔遊羽越之地，始視之，吾裨海所無有者也，大人命余採石宜研山者，得一二奇石，高角有隱士出，取奇石綺貝，殆及數萬，時獻播紳家。

有賞賜和歌云：有藝人遊石得奇石於石川者，其石爲鰭振峯之狀，多賀翁得之，以藏其家，亦奇品也，離沙磧入農畝，有一小丘立石，石古蘇封，不見文字，筆梯生其傍，是接生也，今僅四五尺，柿樹嘗爲風雨所折，是柿本神降誕之處，旁有一農家，姓綠部氏，世稱葛但刺盼，有家譜，其先奉神於柿樹下，夫婦鞠育之，距今千有五十餘年，四十世相嗣，世々壽考，建小祠於丘，安置神影，左右有男女二像，是爲葛但刺盼之老也，葛但刺盼奉祠主事，余父子通刺見之，其人淳質可嘉，出古筆柿朽木一片，贈大人，且說其靈異，談其故事，皆可聽歸路，風浪卷沙，故取路于山，頗迂，登降數處，近瞰打歌山，昨爲雨潛形，大人憾焉，今而視之，且得青野嶽於天表，父子大喜，還高角客館，既夜無盡師贈和歌，亦惜別也，四月朔丙申，重詣祠，以家君意不可匆匆而去也，樓觀祠碑復皆編焉，告別無盡師，談話尙熟，午後初決，館主亦勸杯惜別，且送數里，余爲之謝，則謂請導之，又度石川，出石見野，抵松崎，往古柿本神之所居，高角山及鳴島，一旦海騰山崩，祠廟舉沒，神像幸得存，事詳高角碑，初建祠於松崎，後遷今之高角山，熊野松在野祠之旁，樹極老大，起伏如龍，一枝入地，又上，怪異不可狀，館主至此而別，近面鰭振峯，山色秀麗，入益田，一聚雄也，昔益田越中者所居，今屬濱

田其城墟爲寺稱正達亦爲佳境僧雪舟墓在境內大喜庵東陟度歌坂西顧望吹上濱海氣明朗昨之所徑瞭然可數過三百原飯津田沙磧彌望行里許右就阪路曰鎌手阪數折而到其頂四瞰所歷山椒川原皆在眉睫之間若高角石川之景勝特可惜別也如青野嶽逢迎數日亦不能無情大人曰往歲於羽望鳥海山亦猶今之青野回視停轎大麻山峭聳正北巔有寺閣巍然爲一名區大麻一曰高間土田植松皆山道臨海者數處故怒濤之響澎湃如雷在山間尙聞之高鷗去地三里周廻四里隔有民九戶若盈十戶則惡鼠嚙人曩濱田侯獵之事涉快異亦記土人之言也丁酉<sup>二</sup>發三角市經平原松坂亦嶺路也下瞰則海岸之石皆爲風浪激射虎負鰐龍飲水怒攫跳躍變態萬狀勢駭爲怪過大麻之足到周布地稍夷曠麥浪滿隴大人曰此間有和泉式部墓間之里人皆不識之惟謂有小橋稱亂橋是爲和泉氏之遺蹤未知何由有此稱也長濱市屋甚盛一島嶼爲前蔽曰伊勢小瀨與濱田笹鷗連接買舶湊焉又行踰嶺瞰之島嶼之外混漾無際濱田城隱見於子位漁棹萍散於其間觀望之美足慰疲憊矣內藤逸郎者吉松潤甫從弟也自作同行或先或後遂與通姓名相驚喜蓋以潤甫之故嘗識余名也且曰吾幼嗜馳馬雲州善

馬之所出今將適而買之臨岐而決蓋爲一奇遇又悔連日之行而相知之遲也入濱田城城市與津和野伯仲東過水繞城郭雉堞上峙茂樹鬱蔥水以東有牛市人馬絡繹喧甚憩店咨前路之險易轎夫皆曰路繇有福稍遠然其地有溫泉人不遠千里而行余謂詠歸之候得若溫泉路之迂也何妨大人亦與點也乃決議東過有野有嶺行數里繼晷以燭四野闕寂備鄉導右折入有福之境人煙填咽民戶編葦相連投泉傍客舍卸裝皆浴大紆終日之勞浴者滿室余扶家君浴別室是夜同宿數十人解衣閣物雜沓最甚戊戌<sup>三</sup>館主供饋盥皆取于溫泉爨飯烹茶一切得于泉云泉之爲地四圍皆山外密內陝泉出東溪之畔濤沸四五尺瓦屋蓋之施數筧引于浴室浴餘之所灌草樹漸包不亦奇乎客樓數十區皆臨溪上下相呼魚蔬甚饒蓋深山幽僻之境返爲繁華之地泉之賜其大矣哉與夫再三浴家君不欲屢浴故辭溪後有坂嶮巖不可言還路欲迷風雨急至又登岡嶺絕壑萬仞奔湍鳴咽眩視不自保有亭少憩雨歇雲晴峯巒盡改遙望日貫山其他大小諸山多可記者四望無人不得問識之爲憾出丸原路始平夷復雨經今市抵和田土人着短紙布袴轎夫馬隸亦爾蓋數十里往々見之厥土赤墳雨後難行故着此則衣不得撥而



移步便捷也。東陟赤谷，高類奈間山，里餘得頂，以雨無望，降則甚晦冥，數百步到溪底，有民兩三戶，其屋痺狹，四圍大山層聳，巖牆驟起，不可正視，急流激洶，其聲淅然，仰不視日月，顧非氣骨盛強者，不得久居也。飯坂極險峻，下路又有泥淖之窮，此間封疆交錯，由九原至飯坂，皆屬津和野，坂以東屬濱田，投一木，風雨尙暴，殊益旅館，己亥<sup>四</sup>發一木，登一峻坂，猶赤谷，頂夷曠，爲藝石之境，界石相望，數里下大塚村，土廣民衆，大朝新庄諸村，皆古戰場也。吉川氏城墟，今稱日野山，剝削凸凹，斧鑿之痕，猶似可見，不問而識其爲城趾也。與經墓在新庄東北某丘，又海應寺邨，相去二里，葬元春於此，岩國主時饗不廢云。歷中山，今田諸村，宿本地驛，庚子<sup>五</sup>踰可部坂，登降各數里，峻甚於諸坂，頂拗有一茶店，人馬馱傳者，視之皆鐵也。登降甚勞，遠之則銳嶂層巒，起伏萬狀，近之則懸水百道，其瀉下長者數仞，短者數尺，嗚咽以振動崖谷，其石突怒，偃蹇皆臨，湖水爭爲變態矣。地嶮景奇，若地嶮無景之奇者，其將如之何？造物者之福于人，豈可不思乎？數涉一水，以傳可部，右視福王寺，熊城山皆奇，可部買質甚盛，去國都五里，舟運甚便，鹽鐵之利聚此而散，凡藝石數十里，地多出鐵，往々觀冶鐵場，其山林幽谷，擇木炭之地置爐，故聚市者皆毛鐵也。鹽則海濱

皆<sup>出</sup>焉，是華貨鎗利者也。訪木原氏，家君之舊也，亦耽濟勝嗜歌咏者也。見余父子驚喜，慰勞留宿，解裝休偃，凡十數日，山野僻處，食不稱口，宿無浴具，得木原氏始得適意，主人出際近稿，辛丑<sup>六</sup>木原氏寵送，南過綠野美田，有橋，藍細石爲柱，河水瀾渺，是地多佳趣，經府川，荊賀有峻出，薄原過志和縣，橫出官道，是爲大山口，前日所經也。投西條驛，曾宿主迎，侯於馬首，取酒以賀，賦詩題壁，以家君未觀東子瀑，壬寅<sup>七</sup>往觀瀑，在曠野，巖數千尺，瀑水瀉下，仰則水從雲漢者，不啻使人吐舌，濺沫逗人，衣皆沾灑透濕，旁有古墳，里人說菖蒲姬故事，瀑以東荒野瀾蕩，篠蕩沒人，福成寺以將雨不登，過三永間，友人藤伯恭宅於路，其人能識伯恭，曰：伯恭今佗適路亦險，故不過，重經石楯數處，晡時歸家，夫家君好勝遊也，尙矣，以少壯乘家政，未得遂也。八年前有望嶽行，遂盡奧羽，木曾之諸勝，時年六十有三，家兄從焉，負劍之錄，記其遊也。去年伯兄歸，自浪華獻壽于家庭，且因某氏招請，遂至廣府，適問風律老人，老人嘗畫石之諸名勝，詳圖其道路險易，以啓後遊者，家兄臨寫而歸，以家君有遊高角之志也。家君恒謂石之高角，柿本神垂跡之地也。廟廓歸然，咏歌者流，無不崇敬焉，故其近境山水，皆入古人之歌咏，不爲少矣。冀得一遊焉，以其路難地

僻不果有年于此得圖甚悅時自卷舒預期程頓今茲暮春治裝而起往還旬五行歷三州程涉百里親與安穩僕從無恙於歲深山大澤崇岡絕巖豈謂非壯觀乎家君亦自祝曰吾齒踰七旬跋涉百里是高角之神其或祐之乎且曰柔爾紀之望嶽之行爾兄勤焉自有記此行豈可無記高角筆梯之惠爾其念焉遂爲之紀

安永六年丁酉夏四月望後

竹原万四郎賴惟柔書

發竹原

七十吾翁健欲爲千里行詠歸占時序濟勝預期程綠水流無盡青山到處迎陪遊意堪樂幽趣出家生

過廣陽城

侯國雄藩鬱海西層城煙樹翠高低農餘百里資鹽鐵庶富四封傳犬鷄廻郭長橋連驛路危樓甲第傍陂隄堪看恭儉揚前政都市風猷自整齊

投林伯強宅

綠水青山百里餘奚囊恰好侍親與高堂頰剪西窓燭一夜春星影不踈城頭斜日故人門逢別如何對綠樽與馬東來又西去明朝萬落又千村

途上雜詠

鷄犬遠離驛城西一水斜村篁行翠色野菜帶黃花童子催畊釣老媪進酒茶里程認丘樹處々駐柴車村原連數里煙景好行吟垂柳渡頭雨落花溪畔林牛眠知日午鳥語惜春深今夜投何處悠悠客裏心

阪路口號

峻阪俟曉踰舉首近天關俯瞻千仞壑銷我九折魂艱險一何甚劍閣蜀北門驅馬極其巔悠然望乾坤雲山四面起白日忽已昏如何今夜宿寂寞投溪村胡爲得鄉夢不寐聞哀猿夜半驚火至燒盡山下原

又

空山征路險層嶂日光微湖古魚龍匿村荒鳥雀稀泉聲逼匹馬嵐氣濕單衣薄暮愁溇淖孤雲拂面飛烟巒與風磴峽路幾躋舉亭午初看日黃昏未出山孤城青野外五嶺白雲間鹿群依阻溢無人屢往還

過津和野城

勿謂吾觀列國風，豪吾城上寓詩筒。水歸巨浸涉應利，嶽擁層樓鎮本雄。社稷平安大臣富，山谿險要五丁通。堪看德政足民用，庶績俟家釐百工。

謁高角山柿本神祠

空桑無父母，妙藻感天人。山野託遺老，朝廷拔俊民。扈遊到雷嶽，應制在禁宸。海霧扁舟曙，山花玉輦春。蒼生多歲養，白髮二朝臣。惜別石川水，振衣京洛塵。鳳城老卑位，鴨鴨弔隱淪。豈不稱歌聖，自言是道神。英靈尙若在，遺像恰維真。雙手楮毫古，千年銘誌新。邑人疾無染，社樹果尤珍。詞客招魂切，畫家入夢頻。死生同造化，進退極遊巡。故山月空在，長照北溟濱。

同代家君志喜

翰墨衣冠古，千年賽此神。白鬚與青眼，長照和歌人。

石北雜咏

阪路多緣海，登臨向北遙。怒濤連白日，灌木上青霄。山驛棧通馬，水村舟作橋。蕭條投逆旅，半夜起驚鷗。

地勢依山海，封疆西北分。舊都認墟落，古寺弔瑩墳。征路侵山嶺，遠天暗海氛。早朝馬行疾，猶見大麻雲。

浴有福溫泉

燂泉稱有福，靈液本無疆。嗽去齒牙潔，沐休毛髮涼。衣襟加潤色，肌骨認餘芳。抱疾來千里，寄生活一鄉。玄門秘纜漏，丹藥味兼嘗。此地山陰道，溫溪帶太陽。

晚下赤谷

古道溪廻暮欲迷，登山忽不辨東西。石泉雲木無人跡，唯有一鳩呼雨啼。

重宿西條驛

楊柳爲相識，西條曾宿居。魚蔬始鄉味，枕席若吾廬。行李人無恙，歸興喜有餘。莫言往還晚，薰風麥熟初。

矢野八幡宮告文

維天明六年丙午歲，公在于江都，遙命臣行充謁矢野八幡宮。越九月朔，齋精詣祠，昭告公意。夫糾游民，黜貪吏，勸農薄賦，則民食固弗匱矣。然旱澇諸災，不可不預備。

附

錄

矢野八幡宮告文

焉其披荒之政莫如社倉。是以往歲使行充薦見于神。伏祈社倉大行。既而未驗。數年諸邑咸置倉廩。儲蓄之基已丕建矣。且別創永利法。方諭人戶。若有社倉大發將罄。則欲以繼其儲。以爲邦家之永圖也。顧嘗支斗斛神穀始行。叢爾神鄉。經年不多。奄達四疆。何其速耶。雖有司之力。而神助亦已昭矣。不堪感戴。重發使修謁。年給正稅。永贊祀事。聊報大庇。冀神益祐予衷。令凡任此職者。益明條制。謹便收支。編排無漏。命合不私。富者莫妄抑勒。貧者盡許請貸。不幸罹災阨者。特施賑恤。無故致逋債者。嚴加督責。無張虛額。而實委見殺。至其計口優備。則常蠲息支貸。若夫臨事遇變。則考法慮宜。以利斯民。噫。予不能盡知其人。神則明靈。其誠心卹民。廉直勤職者。乃降之顯賞。若有懷姦欺枉。法則者。殛之勿宥。神既爲社倉鎮。則亦何辭其責耶。冒昧敢請。神其鑒之。堀勘解由菅原行充謹言。

祭福田元直墓文

維文政己丑<sup>○十年</sup>冬十一月丙寅。三次邑宰賴惟柔。謹以淨酌肴果之奠。昭告于故三次藩臣福田君之墓。曰。嗚乎。比熊之山。巖岼西蟠。萬松鬱葱。下臨寒溪。上置大墓。

先公風源。傍有荒墟。曰山茶原。爰建小碑。福田子墳。篠蕩沒石。苔鮮埋文。予守茲土。夙有所聞。子送公葬。不入吾門。遂廬原上。以終其身。嗚乎深矣。子之墓君死寄骸骨。猶守廟垣。生事盡忠。不待其言。嗚乎子義。可勵人臣。今之臣僚。豈皆迷昏。善非不知。知而不陳。邪非不察。而不論。務爲佞媚。利祿是奔。推究其心。視君路人。嗟福田子。君臣之魂。長住此庵。全義與恩。吾訪其塋。躋此山樊。除草剷苔。謹祭其壙。酒肴共薄。恐辱子神。尚饗。賴惟柔再拜。

重造嚴島神廟鳥居記

惟柔謹按。鳥居古之衡門也。後世祠廟必設立之。蓋存上古之樸。非有奧旨也。鳥居本作雞棲。今通作鳥居。義同。近世文人多呼爲華表。華表自爲別物。詞賦假稱。或將無害。記尙著實。故今用鳥居。

我安藝國嚴島神廟。有大鳥居者。蓋天下諸祠之所無也。或曰。推古天皇詔建廟宇。鳥居之造。蓋翔于是。平相國之崇仰也。必宏其制。然志乘殘缺。無得而徵矣。近古疊造。略載于本島大願寺記。曰。弘安九年丙戌十月立鳥居。正中二年乙丑。圮。北朝應

安四年辛亥四月立天文十六年丁未尊海大願寺住僧請大內義隆義隆令毛利隆元造永祿四年辛酉並月隆元又造弘安應安並不記其造人惟柔竊按弘安蓋北條貞時檄本州守護造應安則足利義滿造義滿來謁在康應元年其永祿所立屆享保元年七月二十日圯我侯家移封于此之五世體國公吉長在位之年也乃大求封內巨材營建復舊元文四年己未十一月也臣寺田革川作記爾後歷三十八年安永五年丙申七月七日燬于雷火我公重怒焉憂之欲亟興復國新有助作大費不可以遽起土木然公未嘗忘於懷命求材木數年蓋其正柱用樟木爲例而其能生于深地高且大者未有獲之杉則有焉公慮鳥居之廢旣非所以致恪而佗木之用亦幾乎褻越乃遣臣林敦恭奉幣卜籤於神前卜曰宜俟封內樟木至于適用於是營建之議姑緩旣而公復慮從卜則歲月遐遠不可期也久曠祠前無以妥神也曷克庇斯民哉須求樟于佗州又遣敦復往而卜籤果得吉乃命咨訪瀨海諸州紀伊牟婁郡鳥勝浦有巨樟三章當爲一柱二章當合爲一柱乃以一千五百金購而斧之船運抵鳥寬政十一年己未二月也其餘皆用杉取之於本州其四副柱一自佐伯郡惠下山一自山縣郡津浪村一自佐伯郡上伏谷村一自豐田郡中

河內村其棟梁諸材皆出于佐伯山縣及本島彌山大聖院前亦魂產也蓋其土神呵闔以需此用者然皆必致禮卜吉而後伐之諸柱之昌及諸小材皆用樟安藝郡宇品島豐田郡吉名村賀茂郡廣村出之凡其伐之也萬工舉斧千夫引之兒郎偉不斷以至於海濱泛而達島沿海之民皆出小舸挽之是秋公告老公齊嗣公齊封克繼厥志克舉厥事十二年庚申五月衆材旣庀大鳩工匠祠之左右海濱結樁桓爲木場設三大廠爲劉削之所遣臣山本豐昌告經始於神擇日肇事專任長官分委末職殫心綜理戒遠污穢匠石丁夫優給糧錢不唯無擾靈之害貧民亦自蒙恩惠故訴然趨事借手競作先是新造役具皆極精壯一無有弗備乃求舊址正殿前廊嘴凡七十八步步用六尺六寸即潮汐之地也八月廿一日祀官祭地番樹甫起伐松園二三尺長八九尺者數千而築埋之均平其頭以爲柱礎至于十月始豎正柱次及副柱潮去則作來則輟工師盡伎倆而獲豎焉時冬深風勁役夫難用因停待春辛酉享保元年二月三日乃復發工三月廿七日行上梁儀遣臣松村甚趣澁而監焉黎老黃孺提携來觀歡聲鏘洋共樂其盛內外揭榜作事全竣越四月廿五日總司臣關忠貫以下庶預事者咸至落而告成正柱高各四丈四尺三寸副柱高各二

丈八尺，棟長六丈四尺四寸，梁長五丈九尺六寸，榜後奈良天皇御書，蓋義隆所奏請也。永祿舊榜，半屬剝蝕，藏在神庫，元文影而用之。今復如之，刻填鍍金，一隻楷書，一隻草書，裝以金碧銅漆之飾，彫以雲龍珠葵之文，大抵皆遵照舊制，更加詳慎，用工凡一萬八千二百，丁二萬三千三百五十，衆材伐運之費，不與焉云。惟柔承乏，職在秉簡，謹奉公命，恭爲之記。因往而觀之，亭々翼々，挺立于海沙上，初望之如太高，然就而視之，如太壯，然少焉風潮來撼，鳥居恬然，締構適宜，於是乎知，不如此則不能以立于茲也。扁榜御書，穆々有威，金碧爛燦，霞映浪耀，不唯裨神靈之威，山海之望，亦待之益勝。惟柔私竊有思，猗戲爲神修宮殿，造鳥居者，自古幾何人也。弘安以上始置之，北條氏既顛，而足利氏亦曠，大內氏既萎，而毛利氏亦有榮煒，顧此數氏，豈不願欲其家門之隆而祈之神助乎，而其如是則何也。蓋得道者，天地神明祐之，失道者，天地神明殛之，是故知道之君，必能敬鬼神，而不詔鬼神，不求福祥，而自致福祥。昔我清光公<sup>○淺野長</sup>封于紀伊也，修其和歌浦管神聘，時聘惺窩藤先生，大講孔孟程朱之道，因使先生作修廟記，記曰：公懼彝倫攸斁，因人信奉此神，而作振以擴充德性也。體國公<sup>○淺野吉長</sup>亦崇正學，愛黎庶，其事蘊藉之爲，蓋以爲神者我藩之

大鎮，而土地人民之所庇也，故不顧宏費，以復舊圖，今我二公之有是舉也，亦仰神靈軫國民，紹祖猷而爲此，豈世之庸君劣主，諂神佞佛，私事禳禱之比哉。然自今以降，百葉相繼，依此真範，以奉祠事，則神之祐我侯家，固無窮已，而我土地人民，亦永艾安也。然則二公之舉，于神靈則敬，于祖宗則孝，于子孫則慈，于國民則仁，何可不宣揚而稱述之耶。惟柔雖無惺窩之識，田草之文，而不敢退避，而敬記顛委，庶可以附于前典，而貽來禩。享和二年歲次壬戌，春二月辛亥，本藩儒學師員，賴惟柔拜撰。

福島社記

白杏公子<sup>○淺野長</sup>平日讀經史，翫風雅，其出獵郡邑，亦博搜古跡，所考不眇。文化丙子<sup>○十年</sup>春，遊佐伯郡平良村，村有古祠，在野川東畔，老松環立，四面皆田，荒涼亦甚。土人傳稱福島明神，而不知何神也。公子以爲此祭國史所載節婦，福佐賣者，續日本紀曰：貞觀十四年十二月廿六日壬戌，節婦安藝國佐伯郡人，榎本連福佐賣，叙位二階，免戶田租，表於門閭。福佐賣，福島國音相近，蓋後人訛佐賣爲志摩，語音轉訛，往々而然。祠傍川，呼曰河合，又曰榎川，川畔之地，總稱榎本，以故福島一稱

榎本明神、榎與可愛爲同訓、可愛轉作河合、其本爲榎可知矣、蓋節婦之宅在此、其姓稱榎本、亦不容疑焉、祠後有一古墓、蓋節婦之兆、土人建祠兆前、以祭之、理或然、春秋兩祭、以三月九月七日、而秋爲重、蓋節婦忌日、又有一池、生龜、人以爲神龜、相戒無捕、蓋亦以節婦所居、愛及於物也、彼此相照、福島之爲福佐賣、蓋爲有據、公子於是復喜得一古跡、因求民間傳記、欲以爲交證、昔有守祠人在祠傍近、距今廿年、罹災、祠與傳記共亡、今祠災後所立、本有左右兩宇、左爲稻荷、右爲惠美須、今合祭同殿、云祠爲嚴島神人佐伯氏所管、其家亦供記錄、是以雖知祠之爲節婦、而其所由來、不可得而詳焉、是可憾已、然賴公子好古之力、而祠得顯于世、則亦幸之甚、嗟乎僻土叢爾荒祠、無一字之所記、非公子之知之、而其誰知之、其誰知之、文化丁丑四〇十年春日、

長井浦記

三原城東有絲崎、一名長井浦、山水明秀、世不多有、衆所詭稱、然至其爲古名區、則鮮有知者矣、余聞此、即萬葉集所稱備後國水調郡長井浦是也、相傳神功皇后之

征韓時、嘗泊御船焉、有木梨真人、取水于井、以貢供御、本郡名義實由此出、而其井遠引山泉、濫以爲井、故稱長井、蓋逢坂走井之類耳、今崎上神祠有古井、爲真人所汲、而其後山有白絲瀑、乃井之舊源、後改水路、今不注井、土人所傳如此、而史乘無所見焉、然日本紀載淳田門浮魚之事、則御船之經過本浦可知、而萬葉集御調作水調、則貢水之事、蓋實有之、夫木集有歌曰、知斗世布留、左奴支曾奈不流、和我支美乃、奈我韋能美都乃、斗志倍奴留加那、此亦咏長井貢水之事也、歌枕名會、以此歌係備中、備中亦御船所經、然萬葉集有明文、則夫木所咏、蓋非備中也、又浦西有稱觸井者、亦給軍用云、當時王師軍艦擁海而下、其所用之水、固非一井所辨、則觸井之事、亦似可取焉、然則播於歌咏、存於口碑、史雖不載、決非虛傳、夫以二千年來之名區勝地、而淪沒不著於世、雖非邦家得失所係、而亦有此地者之當慨嘆者也、此地屬三原城、爲淺野大夫○初名忠順、後改修、初稱遠江後甲斐、重辰四子采地、大夫方富、春秋好古嗜文、勤政之餘、搜索古跡、惜浦之無聞也、使余作之記、余時編藩志、書其所考、以塞責焉、至其海山之美、觀眺之饒、則衆之所觀、今不必言也、文政壬午年○五夏五月、

洗心堂記

心之爲物也，照々焉，靈々焉，以其衆理而應萬事，不待洗之而明且潔者也。然大易有言曰：洗心退藏於密，其不待洗之而白，洗之者何也？蓋天賦性於下民，其初未嘗有穢惡而民之所以稟氣於天者，有昏明澄濁之不同，除至聖之人，其餘皆不能無垢污也。則本分之明，亦有障礙，而觸於庶物，不能無差繆。此洗滌之功，所以不可不施也。其能洗之而退藏者，寂然不動，感而遂通天下之故，其不能洗之者，夜氣不存，且晝所爲，距禽獸幾希，是故能洗者貴，不能洗者賤。貴之制賤，賤之受制於貴，理勢固然，宜矣。君子洗之爲貴焉，久留米大夫，有馬息焉。君別設一館，以爲同族學習之所。扁曰：洗心，旨哉！命名也。子不可不以孝父也，而心垢則不孝，臣不可不以忠君也，而心垢則不忠。夫婦長幼朋友之相與，亦莫往而不然也。至其垢之深者，則父子不相保，君臣不相合，夫婦長幼朋友亦皆反目，矜臂相爲仇讐者，亦或有之。心之垢，其可不洗哉！其洗之之術如何，亦不過曰：學而已矣。所謂學也者，亦非記誦文辭之謂也，格致以祛其蒙蔽，誠正以刮其穢惡，如執熱遊濯，自勉不已，日新又日新，無所不用其極，澡而雪之，積力有年，然後反其本分之明潔，無復一渣滓之存，則所觸洞然，處

事悉當，如鑑斯照，妍媸無逃，苟能如此，凡天下之事，莫足爲者。洗心之功，其不大乎？旨哉！其命名也。顧大夫之族，已多俊哲，加之洗心之功，邦家光輝，其盛大可期也。大夫屬余以堂記，於是謹考名之所由，以應其請，不知大夫之意，果然否也。文政己丑<sub>〇</sub>十月，東飽，賴惟柔撰。

甲斐庵記

三巴邑三面皆水，其東川之東，有一莊，邑人積山氏所有也。莊在山足稍高處，數百步，呼曰甲斐庵。蓋以其在峽也。戊子夏，予爲邑宰，初遊此，衡門柴扉，入則開庭數畝，花木列植，屋後則靠山受谷，松楓交茂，幽邃可愛。升堂則遠近山環，兩市挾水，寺觀橋約，一臨可盡矣。聞此庵，昔邑士德永氏所置，而赤穗義士菅谷半丞嘗寓居焉。蓋德永氏有舊也，跋蹙不能遠行，日持竹竿釣魚前溪，出入有時，所往亦有方，不問其得魚與不得，邦家滅亡，亦似毫無憂色。如是者，蓋有年矣。一日脫然失其所在，人皆謂德永氏食客出亡，此自除累也。但跋人遠逃，是可怪已。既而世盛傳義士警報之事，檢其姓名，半丞與焉。於是人皆驚歎曰：彼魯鈍勃率，皆佯而非真，深自韜晦，以示



其無其所爲也。士人傳其事，至今尊此庵，莫不知義士之所寓者也。予既撫景勝，復感節義，低徊久之，乃作歌曰：跋能復兮，行以義死，魂乎安歸，青山白水。文政庚寅<sup>○天保元年</sup>暮春，付積山正繁，杏坪賴惟柔撰書。

原古編序

世有自稱古學者，斥程朱以爲非古，動輒引古註疏以自證，而其說鹵莽滅裂，不足以欺明者，然被其虛喝者，以爲信然，不可不辨也。夫程朱非鑿空杜撰，自我作古者，無論本於六經，徵於諸子，至漢唐諸儒傳義，皆擇而取之，集而大成之，彼云々者，坐不善讀焉爾。程朱之於漢唐諸儒，猶孔子之於夷惠，若以其生之先後，斷道之新舊，則當舍孔子而取夷惠也，而不然者，以天下有定論也。及論之未定也，以孔子之聖，或與墨翟並稱，老聃同視，聖人尙且如此，程朱議於後儒，弗足異焉。今論已定矣，似宜無疑，然猶有依違不信者，曰：古學可信，新註不可取，嗚呼！程朱之學，真古學也，如彼所謂古學者，以吾觀之，新之又新者，不唯背戾六經，而于漢唐註疏，亦皆失其肯綮，則彼不獨六經之罪人，謂之註疏家之罪人，又可也。然習蔽之久，明者或惑焉，况

於庸人乎，余以爲此節不開，則正路不可求也，於是不自揣，博求古言，可以證左程朱者，以意按先後之類，輯成編，分爲六卷，務正性命仁義之本，以及修己治人之方，欲使學者知程朱之學，上合經傳之旨，下包註疏之要，其生雖晚，而其道理則古之正道，其詞雖近，而其意則古之精義，舍此無復古學也。此余之志，而是編之作，所以不得已也。或者謂余曰：異學諸家，淺陋誕妄，固弗足以爲吾道之障也，今子勉與之辨，無乃太勞乎？且觀其所爭，亦皆非難知者，詎足以筆之於書也。余曰：雖然，此方學者少善讀書者，是以卑近之說易售，而其害反不尠矣。夫謂微生高直者，蓋鄉黨凡人耳，而聖人必辨其不直者，以凡人之惑不可不解也。故舉乞醢之事，斷之，欲其易開悟也。余之於是編，有類此者，彼假古學之名，以悅學者，其曲意掠美，亦猶微生之醢也乎？或者哂而退焉，并錄是言，以爲之序。寬政庚戌<sup>○二年</sup>三月朔旦，賴惟柔序。

春水遺稿附言

家伯春水遺稿將上梓，任襄校訂既畢，猶咨謀及余，余謂：凡校書鏤板，不可不精覈

也。余衰憊日甚，職事未解，雖欲加之磨礪而不可得也。然於他人著述，猶且思其無疎漏，況於至親之業遺，諸後者敢不勉。雖然，余有所見，嘗試言之。我伯子資性聰敏，毫無滯滯，故其作文字亦未嘗苦思，壯歲在津，入混沌社，社主片北海以下一時名流，賦詩屬文，皆勉爲腹稿，展紙秉筆數十百言，不復多加改竄。伯子已爲性之所近而習之熟矣。見彼宴集之際，著稿縱橫塗抹者，輒斬晒焉。是以每花晨月夕，携子弟爲宴集，微醺善睡，及其覺也，瞑目而坐，一吟成章，呼筆即書，當其燕居無事，從容屬辭，亦復不必著稿。蓋詩叙所思也，文亦然也。伯子之於詩文，其思君思國，思父母，思朋友子弟，思山水風月花木蟲魚，其所思滿於胸臆，觸物而發，遺事而索，故語之重複，事之陳熟，皆不遑顧避也。視諸余輩，千辛萬苦，鍛成篇什者，其高卑利鈍之不同，奚啻霄壤。然不知者或曰：苦思之餘，僅得此等耳。嘗禮卿嘗曰：千秋之作，詩不思而得者也。余謂不思而叙其所思，不屑修飾，是則伯子所以爲伯子。故今不敢加細議，粗就原稿，載錄之而已。世知伯子如禮卿者鮮矣。故附此言，將以告不知者也。壬午○文政五年季冬，弟惟柔敬識。

藝藩通志序

恭惟凡有國土者，不可無志也。是故曩昔皇朝之盛，各國有風土記，山川邑里祠廟方物載焉，皆其國郡司領等之所纂修以進也。中古以降，喪亂胥繼，載籍散軼，存一於千百，又斷爛不全，不勝惜哉。元和維新，百度復興，水戶義公首修常陸志，我玄德公○淺野尋有藝備志之舉，其在寬文初，爾後撰五畿志，其佗諸國頗有編修以徵文獻，而二公實其嚆矢也。抑我國志當時猶尙簡質，宏綱雖張，衆目未舉，且書成之後，郡名復古之令出，安藝國沼田高宮二郡，舊號復見，安北佐東二郡，新名並廢，安南爲安藝，佐西爲佐伯，土地已經釐革，則志亦在所當改也。然歷世數公，各綜時務，最急民事，暨恭照公○重興學校，錄孝義，猶未及改志之事。我今公○齊之襲封也，丕受先緒，振起庶績，文化甲子○元命臣惟柔改修國志，初承簡書，職在近侍，每年從行江都，未遑編修，辛未○八轉職，與聞民政，尋支配四郡，因甚獲便宜，迺移檄通藩郡邑，各錄其地方大小物事來上，且選各郡老成人，專掌其事，故其所述雖有精麤，而事實皆可采取。於是文政戊寅○元秋，始開局就役，更命臣加藤景續以下數名，同任纂校，咸欣躍赴事，恪勤匪懈，劑量古今，考稽遠近，先視舊志之所錄，又錄

臣等所見聞合而參訂之且作各地圖置每郡右歷年七八易稿再三今茲乙酉八年始獲告成較諸舊志卷帙浩繁不啻十倍展而觀之山川之形勢城邑之建置田畝稅糧之額戶口牛馬之數井々然一目可領其佗至風俗土宜人物孝義之類皆足以觀其地民風之醇醜生理之厚薄大抵東南海濱之郡家殷民稠其土愈拓西北山陬之鄉戶耗人稀其田或荒然沿海亦有旱澇之患依山或有黍麥之豐要因其人畜之增損而密察之則其邑貧富之實有不可掩焉者其有不可掩焉者而我憂恤之方可據而施爲民父母不可不察此志之所以不可無而臣等之盡心致思者也至如古蹟形勝淪沒不聞者搜攬表出極其力雖非甚關係亦不可闕者蓋綱目畢備博要靡遺可謂一藩矩典矣此非衰老惟柔所能寔此二三子黽勉從事之力也耳因思舊志爲黑川道祐作其序文言陪侍東邸不日而成討論潤色有待在京間暇之日則今所傳爲其稿本體裁粗備刪補未施其有滲漏升差固其所也且祐京人時爲賓師既非土人不涉吏籍特以當時屬文乏其人故受纂修之命自非其博且敏烏能迅速草創如此今惟柔等皆生本土固暗地方蒐校既獲其人歲月亦屢展期宜其全備而無遺憾也而猶恐事有齒莽或貽後人之譏蓋採摭之未博搜

羅之未遍編摩校讐未精此雖一局同修所共惶悚惟柔職在總閱罪莫所追也然郡邑廣大百事紛隴固不可縷舉觀述但其在所當錄者而莫敢或遺庶幾我公高座廟堂之上而周知邦內之要領發令出治之際既非無裨益及其郡邑諸司日披是編視其民物加損以審土地豐歉有租稅不均則均之賦役不一則一之其苟如此我邦之民愈永艾安是書之成或可以少副公之嘉命矣若其不然徒視以爲文具玩物乎則不唯非我公之本旨而抑亦臣等之所耻也舊志名曰藝備國郡志備後非全國今改曰藝藩通志凡與是役者姓名備書以附于左錄其功勞云文政八年歲次乙酉秋八月同巡郡使奴可三上三次惠蘇等郡支配臣賴惟柔謹序

纂修校錄姓名加藤景續賴舜壽黑川方楸津村尙誼山田吉甫正岡元翼圖書姓名河原實秀藤井其原小泉一善高橋義喬

題雲窓遺稿首

由也善事兄原是雙生健宛然兩顆珠兄弟誰能辨共承父祖業不敢割舊產同居

且同爨，五十猶縉纒，不唯守弓裘，風流各有善，兄書則弟題，筆力無長短，寧近聲與色，吟哦樂間散，對床半夜雨，共被三春暖，心志已相同，命數亦無升，兄弟相尋沒，棊藝俱摧翦，其間才十句，二墳成雙卵，聞者無不惜，交友淚皆潛，裡有一知音，遺詩集成卷，就余乞是正，言辭致悃款，余也今老耄，焉能當論選，勉一披閱，雅澹淨昏眼，且見匪佗情，藹然溢紙簡，上梓謀傳世，友誼洵不淺，是舉豈止詩，旌善代懿典，昔文政戊子<sup>○十年</sup>首夏，杏坪賴惟柔，書于三次麻舍運甃居，贈宮羽卿。

題耶馬溪圖卷後

奉命曾適馬關西，公程不枉耶馬溪，徒望彥嶽之嵒嶇，惟收流漂歸故棲，小玩縱遊得耶馬，自道奇峭冠天下，絕壁之下有孤店，煮豬飲酒手圖寫，癡叔解官身已衰，西望撫卷慰老懷。

庚寅<sup>○天保元年</sup>陽月，杏疇題。

藩民漂流到呂宋國，吳船載送予適長崎交領，各使還其鄉，故有起首，疇又書。

題嚴島扁額縮本

市杵之神瀛海社，遠近瞻謁人傾瀉，爭獻扁額，禱賽者，書畫爛燦照廊庑，裏有名筆，世所寡，筆力入神極，雋雅，非唯夜聞蹄齧馬，鏡士鬪擊鳴刀把，曰非馬也，其人也，只恐神物佚去我，又惜風雨所擄擻，丹青剝落僅殘地，何人妙手巧模寫，額上三毛非苟且，此本到處誰肯捨，一覽宛如入神廈，休問大小與真假，貌取尤物傳天下，天保改元明年春二月，杏坪賴柔，書于三休亭。

書類然無思圖卷後

癸未<sup>○文政六年</sup>九月之望，余在尾路，賞月于海龍精舍，從余來會者，皆斟酒哦詩，酣暢殊甚，邑令春山翁亦臨焉，余與翁年老嗜飲，酩酊下山，僮僕扶持，僅免顛倒，翌朝橋本元吉齋此圖來，請題言，展而觀之，殆是前夜醉歸之狀，余亦作圖裏之一人，一笑還之。

跋谷文晁山水卷後

余編藩志歷檢封內地理今秋經蒲刈御鹽遂投尾路畧其間山水之美蓋海內無比畧有橋本元吉氏持此圖來需一題乃展觀之昨所經海灣諸勝宛然在目心深悅之因思假名工如此之手以寫我邦山水無窮之真永收圖志而傳之四方然世乏其人噫癸未<sup>○文政六年</sup>九月賴惟柔題

加藤十千行狀

先生諱友德初稱好謙後改孫三十千豈苟皆其別號安藝國海田市人系出藤原國兼公先祖數世或爲京官或爲外任其裔遂爲我故國府松崎八幡宮奉祠也高祖諱兼明稱三郎左衛門後稱休心其父始移海田休心因家焉業農及船運福島氏時掌衙薪炭事剛正仁恕睦族愛衆子孫蕃衍鄉黨罕比吾先公之自紀移封也首聞休心懿行且多福召見之又謁世子岩松君命撰其幼字休心謂堅固壽考莫如岩松也不必別撰乃書岩松二字上之賜物歸里每歲有賚晚賜宅地給口糧曾祖諱休元兼明第三子也祖諱友勝考諱友益皆爲里正友益娶黑川氏生一男是爲先生友益晚號岳樂就本藩博士植田良背翁受神儒之教所著有社倉推演等

書臨終題所受庭松作詩付先生以示勉學之意也先生以元祿己卯<sup>○十六年</sup>六月八日生於海田其爲兒時出戲街頭知榜文有誤寫歸告岳樂君君異之使受業於良背翁自歲十一至十六隔日往來行程七十町鷄鳴出家黃昏而歸祁寒暑雨無有休息出入時刻亦不差失其或有事後期則終日不食至死復蘇歲十七則寓師家學習益勉其勤苦勇猛人所不耐事聞藩朝賜黃金若干嘉獎之享保丁<sup>○二年</sup>從翁適京師謁正親町藤公受神道大事後數年學術大進翁乃舉其家所藏傳記秘訣悉付先生翁及其子成之皆亡先生受託授翁孫成已及徒弟元文<sup>○戊午</sup><sup>○三年</sup>體國公<sup>○淺野吉長</sup>以翁嘗薦舉給五口俸爲儒員同諸儒師輪直進講寬延庚午<sup>○三年</sup>倍俸鶴泉公<sup>○宗恒</sup>時又增五口居江都青山邸舍先生不携家累獨與子兼次往居三年命爲世子伴讀改賜祿三十石四閏年而從世子歸藩及世子代侯屢從東行明和丙戌<sup>○三年</sup>賜居第於鐵砲街丁亥加祿十石己丑<sup>○六年</sup>明和<sup>○七年</sup>踰七旬乞老不允賜兼次祿十五石同爲侍讀代先生從行安永癸巳<sup>○二年</sup>再乞不允丁酉<sup>○六年</sup>以左手麻痺行步難盡力乞致仕賚白銀若干退老於家其明年秋閏七月六日考終享年八十其屬壙前四日賦詩一章蓋言自信弗疑履道坦々之意也娶高橋氏生二子長友敬稱金藏

資稟穎悟，歲十六天，先生深惜之，次兼次稱甲次郎，嗣襲其祿，爲人仁孝方正，家人未嘗見忿怒之色，而凡置一物，不正則不安，先生二月病歿，娶高橋氏，生三男三女，男萬彌，亦敏警，十三天，二男亦皆不育，以清水包元第六子爲義子，名友諒，友諒奉先生柩葬海田馬背山先塋次，嗚乎悲哉！先生之勉學也，自昏亂時，飢體勞心，蓋大人所不能，而先生爲之，蓋聰明夙成，進修之功，自有不能已者也，及其衰老，手不釋卷，殊刻意洪範，著範卜疏解一卷，其他所述，有貫二記，攘蝗祭儀等書，其尊師也，一言隻語，必劄記之，其口義講章，珍藏之，重於爵祿，其義或未安者，亦不輕改易，謂與其信師說也，寧同受其罪，其誘後進，一遵師法，學徒向背，則弗恤也，良背翁嘗病左眼，百方無驗，先生時未弱冠，深以爲憂，夜人定後，謁尾長菅神廟禱之，時屬隆冬，雨雪寒劇，徹曉念修，如此者七夜，晚年言及師恩，輒號哭而流涕也，其事親也，在樂君嘗病，先生看視周詳，夜不交睫，殆一百日，焦思苦心，舌本盡乾，其服喪也，哀毀踰禮，人或稱之，則曰吾無兄弟，故不能，不然也，其講短卷之章，蓼莪之編，未嘗不歎息歔歔也，聽者掩淚而去，其養幼也，慈愛甚深，而苟有與人爭，及貪物縱欲，則必痛詞禁之，殆至楚撻也，其事君也，將順匡救之道，不忘於心，其進說之際，懇々切々，必曉

君意然後已，世子之幼也，當其聽講，或目屬他物，先生輒輟講，待其意定然後講，其老不能從行也，每迎侯歸，踊躍歡欣，如至親之久睽而相合也，或有羣嚴島神祠以爲侯燕饗之具者，先生入見曰：嚴島者，本藩第一鎮祠也，豈可以褻汚乎？畏縮而退，凡有事不可者，莫知而不言也，侯亦敬愛之，先生無他嗜好，獨玩研山，侯之如江都也，獲奇石於鞠兒川，賜之，又命之名，親記其所以名之意，副焉，其愛民也，歲豐歉，憂喜見面，雖然無其位，無以施其事也，嘗取朱子社倉法，教之上下，一里正行以恤其鄉閭，官民皆便之，侯聞嘉之，遂命行其法於閩國，儲蓄漸廣，貧民是賴，蓋亦先生之力也，其接人也，溫和謙遜，煦々如春，而有分別，苟有非理，雖權相豪吏，而正色規諫，不敢迴避也，凡此數者，非學問之精，存養之密，而忠信立於中者，則弗能爲焉，如先生可謂成德之君子也哉，遺教雖存，哲人其萎，嗚乎悲哉！先生之門，有金子樂山翁，實受其統者，嘗輯先生履歷行實，未脫稿而翁亦沒焉，惟柔無似，幸辱姻婭之末，得結親于德門，然世之相後，不得一見儀刑而蒙教誨，間嘗與先生義孫友諒相議，原其稿本，更接所得，增損取舍，定作此狀，唯恐余之不文，反爲盛德之累，文化二年二月日，孫女婿，本藩儒員，賴惟柔謹狀。

賴春風行狀

先生姓賴氏，名惟彊，字叔義，一字千齡，以千齡爲通稱。世竹原人，考惟清，亨翁有五子，第二第五共天，先生爲第三子，故幼字松三郎，妣道工氏，先生年甫十四，從伯兄惟完，千秋于浪華，以翁命兼學醫術，浪華有古林氏，自祖見宜，世以醫著，當時見宜年猶淺，門老藤岡道筑輔，其家業亦大行焉，先生師事之，以受古林氏醫流，時尾藤二洲亦在浪華，道筑延請教其塾生，先生亦爲助業，是以先生之於古林氏，亦頗異。自餘醫生，先生與二洲親昵，道學講習，因得精熟，居數年，享翁君老且病，先生歸鄉侍養，不復游學，醫亦行于鄉里，舊廬隘陋，不堪永住，享翁君久欲改造，先生爲卜地新營，以贊成其志，又數年，家口頗殖，更造一宅，奉翁出居，謂之春風館，學者號曰春風先生，千秋猶授徒浪華，亦翁志也，雖屢歸覲，而定省多曠，然以先生侍養之厚，使無西顧之憂，遂成其業，擢爲本藩學校教授，翁亦及見而喜之，父兄成志，蓋先生孝弟之所致也，千秋已仕，惟柔亦出爲藩儒員，先生獨不出，終始侍養不懈，藥餌躬調，愛敬並盡，非唯使翁優游安樂，以延天年，家有叔父，先生忠養，竭力亦以壽終，又有

從弟妹再從兄弟數人，亦皆恩愛賑恤，使不失其所，母舅道工某君患癱，先生自迎于家，醫養懇至，後其長子亦病沒于先生之家，道工氏殆絕，有次子某，先生取以育之，分資興家，以續道工氏，外親血食，亦先生之力也，內外二家墳墓，在邑兩寺，先生展掃修整，常謹守之，田廬屢係災澇，亦必營復，文化十三年丙子，千秋病沒，以嫡孫元協爲嗣，元協年十六，藩命先生輔成宗家儒業，因賜廩糧，比藩醫員，是以往來于府，居惟柔所構對床廬，督責其業，既而元協長進，先生亦年踰七旬，不得屢往來，文政八年乙酉九月十一日病沒于家，年七十三，葬于邑照蓮寺內，先塋已無餘地，先生別開一區，即葬其地也，娶田中氏，二男二女，長子天，次子元鼎，出爲千秋嗣，爲府學句讀師，先沒，養花山氏子爲嗣，以長女妻之，名元幹，以受其業，次女適田坂氏，先生爲人溫柔孝弟，未嘗有疾言遽色，加以學修闡鄉愛重之，遠近來學者亦弗少，邑曾有志帥翁者，就其舊居，置竹原書院，請先生爲講師，有災後廢，先生老營靈白堂于宅後，時迎千秋，二叟相語，又造留春居于鹽田側，來往吟哦，以樂餘年，有遺草若干卷，藏于家，惟柔自少被先生友愛慈誨，因得以成人，恩義至重，以其在官異土，而不得且暮參問，審其飢飽燠寒，今奄然即世，不復奉德容，深以爲恨，嗚呼哀哉，聊伸

其所知以埃誌銘于作者劣弟惟柔謹狀

帝釋廟碑

備後州奴可郡南接神石郡山石瑰奇皆神工鬼斧而帝釋最顯焉帝釋之山頂踵皆石屹立數百丈而宮棲其半腹石色純白而不甚堅牢雨露所濡其面稍黯凡物觸剝者瑩然如玉碎之鬆鬆如雪石罅生草木春花秋葉絢爛奪目巖下有石穴深不可測山溜自內出而外合溪水高則入與內水合蓋此穴內外二水錯鑿成之也石乳累累凝成數千顆其淋漓方滴者可仰而吸焉真靈區也文化丙子<sup>三</sup>年春惟柔宰本郡巡所部來訪此廟守僧家有古記嘗試觀之帝釋降伏衆鬼其說布演滿紙而竟曰所祭正體爲杵築明神惟柔謹按杵築明神爲大己貴命命剗除惡神以治皇國是以上古郡邑多廟祀之今也是宮雖廟貌名號一切易置乎其爲大己貴不容疑焉因爲立石使人知其真銘曰曉巖其石齟々其白淙潺其水蒼蒼其碧側有窟穴常吐靈液偉哉大汝丕征衆惡天授英武殿茲四國維此邑土神之所歷山水之美神爰垂跡嵌崟爲宇石乳爲食載驅旱魃載除蠹賊吁吾之民永念威德

岡田治部右衛門遺烈碑文

君幼字小源太後改治部右衛門池田加右衛門二子本藩士岡田宇右衛門信成養爲子父子並仕自得公<sup>長</sup>之自紀伊移安藝也舍船上岸將入城時已暮比至南郭門有賊數十人要路君時侍與連叱之賊以醜言答君怒返擊斬其一人餘賊拔刀環君君單身奮鬪傷賊甚多賊遂遁走蓋福島氏遣臣也君亦被數創即夜死之實元和五年己未八月八日也葬于本府南湘禪院法名月秀宗圓君九世孫彥之進寧規請余書之石蓋士之衛君固其當也而非其與與之誠有養乎平日何能應變如此其速且力哉人孰無死寧死公事乎後之衛君者有自此碑其亦思之哉文化丙寅<sup>年</sup>三正月藝藩侍問儒員賴惟柔撰

奧榎明碑文

君姓奧氏諱猛雅稱彌兵衛吾藝藩士也考諱伊證家世業火技最善鳥銃君幼習其事抵老不息手製火藥不願勞費其屬續前一日猶呼銃手托其自勉如此則其



精可知也。弟子日進，巧技者亦不眇。君自訂正家學書傳，以立定家法，且謂：烏銃東來未久，其用未盡也。是以苦思疑慮，令一卒能匠者，制銃架數樣，水陸自由，其用無窮。皆破敵摧陣之利器也。公嘉之，乃賜名其器，旋風臺、奔雷車等是也。既而大賞，卒則不與焉。君公言曰：此同戰場奪其擊之功也。義不獨賞，於是卒亦被褒。君年十六，爲騎銃，二十襲父職，爲銃師，加秩者二。累進爲徒士隊長，蓋特例也。享和二年壬戌七月二日，病終于家。享年七十一。葬於城北心行寺內。娶山岡氏，生六男四女。長滿雅，次隆實，出胃林氏。次盛昌，胃石寺氏。次宣秀，胃飯田氏。三女皆適藩士。其餘天君爲人，精悍剛直，壯年頭髮盡白，目光熒然，善指揮人衆，有將帥之度。好讀史乘，善論古今得失，勝敗利鈍，崇仁義，重忠孝，常謂弟子曰：技藝之精，雖如本間、稻富輩，不知義莫以爲用矣。家素貧，而多購武器，未嘗儉嗇。有一奴，野朴壯勇，君厚遇之，謂不如此，則不足以共赴難也。暇則作和歌，設茶事，親造瓷器，以贈同好。手移樹石，園庭儼爲山谷之趣。自號雪中菴梅明老人。其有風韻亦如此。蓋一時武林之傑也。滿雅、嗣爲銃師，亦有父之風。云：其門人相謀立石，請銘於余。乃銘曰：生平建臺之世，奮士氣之衰廢，斯人死而不死，千古雪白梅鶴，藝藩待問儒員，賴惟柔撰。

金子樂山墓誌

翁諱忠福，其稱源內考仕大夫，在方伎隊，奮然舍奮，儒學磨礪，昔垂加子，傳教良背，良背傳藤，此其正派，藤門得翁，寔爲高弟，遂薦公朝，矜式自代，增秩再三，屢加賞賚，維勤與儉，至老不替，今茲文化，乙丑<sup>年</sup>〇二之歲，五月九日，奄然爰逝，年八十七，子孫菱藪，令嗣忠周，其業不廢，禮葬等覺，先塋是配，鐫文貞珉，永耀後裔，作銘者誰，翁之儕輩，藝國教官，惟柔姓賴。

廣瀨臺山墓誌

翁姓源，諱清風，字穆甫，臺山其號，俗稱廣瀨雲太夫，津山藩士也。考義平，諱宅路，妣隅田氏，翁幼事父孝謹，餘力讀書，弗輟，及壯爲京邸監，廣取師友，道藝並進，召爲近習，拉家徙江都，以其多能，日被親近，而將順匡救，亦有力焉。加秩五十石，爲邸留守，又遷自代，無幾稱病致仕，卜居于麻布長坂，獨與妻柘植氏居，氏亦幽貞高雅，不厭寒素，夫妻鼓琴唱和相樂，平素嗜飲，然微醺而止，如撫勝景，或數月不歸，居則畫山

水畫法一遵乎古，下筆不苟，而新秀可掬，人以爲奇玩。又喜吟善書，書淨腴有韻，詩亦峭麗可愛，蓋其爲人溫厚高潔，有自然之致，故其發於藝事，皆有類乎此也。歟！余遊江都，多見風流之士，如翁罕匹，其所著雅俗涇渭辨行于世，王侯貴人聞名召見，不屑往也。文化辛未年<sup>○</sup>八歸津山，結廬于城外新田村，亦猶其在麻布也。癸酉年<sup>○</sup>十月十三日以病卒，戚友胥議葬于小田中村之邱，享年六十三，無子，有二女，皆癯。養他姓子爲嗣者，再皆先歿，終以三宅侯臣應見定允子謙滿爲後，任上原葬，作狀徵銘于余。迺銘曰：在職其力，非貪祿也；退而其樂，非肆欲也；深衣幅巾，溫而其潔，潔則可愧，彼之乾沒，溫則可沮，彼之猖獗，嗟乎是翁，世不徒出，茲石之文，永照鬼屈。

中村太室墓誌

君諱維洪，字大遠，號太室，姓中村，本佐々木氏，世藝州之人，其先爲士，後降就農畝，居高宮郡中筋村第十七世祖宗碩君諱直方，始業醫，爲名古屋立醫弟子，自中筋村徙廣島府，考諱成章，亦以宗碩爲通稱，妣宇佐川氏，君以寬延二年己巳正月九日生，年甫十九，遊京師，學醫於菅隆白，旁就齋靜齋授儒書，旣而歸國，寬政乙卯七月

年六月，以術精始賜上衞進見，享和癸亥年<sup>○</sup>三六月，賜俸比醫師員，文化甲子年<sup>○</sup>元

二月，同醫師員加俸，十二月，比近侍醫員，常進藥劑，丁丑年<sup>○</sup>十四年四月十七日，病終于家，年六十九，葬于圓龍寺先塋次，配原田氏先亡，再娶堀田氏，皆無男，有四女，養賀茂郡內海村原氏子爲嗣，名惟裕，字子綽，以長女配，次三女皆出嫁，君性廉潔峻整，不好榮達，不屈權豪，骨貌涼曬，身若不勝衣，而風標凜然，有不可犯者，兄春水嘗視其衆醫間，竊謂人曰：此雞群之鶴也。初讀陶靖節傳，慕其爲人，自稱元亮，後有論，襲父祖稱，以宗碩行，其接人極爲和洽，名其居曰暢窩，蓋亦寓警也。晚暮藏六齋，優柔自適，以終身焉。友人胥議，諡曰廉和，將以括其德，子綽來請表其墓，因舉余所知以鐫石面，文化十四年丁丑季夏，本藩賴惟柔撰。

令淑婦人加藤君墓誌

君性加藤氏，諱玲瓏，本藩儒師十千先生之孫，而甲二郎兼次<sup>○</sup>靜古<sup>○</sup>第二女也，先兄春水命惟柔娶君，時年十有四，家無舅姑，事春水夫妻如事舅姑，兄嫂亦慈愛之恩，義甚厚，居數歲，生子舜叢，惟柔賜宅異居，當時俸薄家貧，衣服難給，君拮据執事，周

悉不遺，宗家時祭之外，有八忌祭，無論其同居時，分炊以後，猶能慎於助奠，時祭宿詣宗氏，忌祭味爽赴之，無少怠慢，其教舜熹，愛而有方，作紙字牌，貼諸屏障，常授點示之，曰：其字音某，某字義某，如易卦、手畫、山澤、火雷之象，以使知某卦爲某下某上，少暇躬讀，朱子小學，書以自警，家事艱險之際，其勤如之，庶幾不愧於爲十千先生之孫乎？年未三十，不幸罹心疾，蓋以廩薄志銳，勞苦過甚也，以病不省事，十有九年而終，享年四十六，實文政元年戊寅七月四日也，葬于府城東南安養院宗家墓側，君少執婦道，如此，其若而長，遇病患，不詳兒孫生長之樂，且也，惟柔連蒙恩，擢增祿秩，皆係君得病以後，此君之所助而不能享其榮，深可以悲矣，是以惟柔非但不改娶，敬君年久，未嘗一日廢夫婦之禮，及沒命，舜熹納主祠堂，使永配享焉，又爲銘其墓，乃作銘曰：君之未病，婦道是備，病而廢事，於君何累，嗟予子孫，視茲銘記，寡夫賴惟柔撰。

惠美大咲碑文

文政庚辰<sup>○三</sup>年六月八日，大笑惠美先生以病終於江戶霞關邸舍，年七十有六，葬

于赤阪威德寺，門人等收其遺髮落齒衣物，歸瘞于我府城南專勝寺，谷嗣貞秀建碑，請銘於余，余與先生同僚，相知年久，有不可辭者，按狀，先生周防小松人，本姓長尾氏，諱貞璋，字君達，通稱三白，大笑其號，考諱秀詮，妣藤井氏，弱冠來學醫於惠美，寧固翁，翁長子正因死，季子養健尙幼，因以先生爲嗣，以及養健，翁沒，藩待先生猶翁，襲其通稱三白，賜日俸二十口，進比側醫，世子有疾，進藥奏功，賜白銀若干，遂從行江戶，及世子襲封，爲側醫，歲俸一百五十石，已而公有疾，頗深，進藥乃治，又受賞賜，爾後每歲東行必從，以年老辭，從行不許，進比徒士隊將，終比弓炮將，領前後增俸三百石，以醫陸，此特例也，先生既養養健，爲嗣，稱三圭，即貞秀也，女婿三折，孫三迪，並列醫員，雖各以其伎，而爲先生庇蔭，先生娶三上氏，生三男四女，第三子太中出嗣西道朔家，長女配三折，餘皆夭，先生資性簡重寡默，一言不苟，寧固翁識其卓異，有爲，以託家業，翁之於醫，自作一家，世稱神妙，詳於赤松滄洲所撰之墓銘，先生親炙，更加精研，躬自澹泊，以誘人攝養，其療人也，懇到切實，故其託治者，信而不疑焉，一生無他嗜好，唯醫事是勤，弟子涉五十七州，至六百有餘人，世醫莫之與京者，亡論平日病客滿門，其往江戶，往還沿途與疾請診者，每填逆旅，其在都下，公侯士

大夫厚禮延請，一橋公不豫，召陳醫案，賜食及金堀田侯患脚氣，更數醫無效，先生進藥始安，乃賜藥籠及神農畫像，藥籠使林祭酒爲作銘，神農本曾我蛇足畫，豐太閣賜今大路氏者，其家珍藏，侯使狩野伊川模寫之，人以爲榮，銘曰：嗟寧固翁，復出衆醫，卓然一家，續之其誰，翁之所揀，君洵其人，君之於翁，恩父義師，遂不其緒，倍之菴之，回生肉骨，疇及其能，撫孤育孫，各循告規，妙技萃門，罕有所比，嗟此孫子，如君所爲，世世其業，庶其不衰，本藩賴惟柔撰。

木村尚誼墓誌銘

君諱尚誼，字子方，源姓，木村氏，通稱齋，其先歷世仕足利織田豐臣家，九世祖重正君，天正年間，始係本藩之仕籍，從朝鮮役有功，考半藏諱尚良，娶林氏生君，君爲人敏達有文賦詩善書，居官精勤，庇益不尠，歷遷諸官，陞用人職，頻增秩祿，食邑入四百餘石，大阪江戶，以事往者，前後凡二十次，以病辭職，文政六年癸未十月六日終于家，享年五十六，履歷具在，家乘，葬于城南妙慶院內，配戶田氏先沒，生一男二女，其一適藩士吉田忠充，餘皆夭，繼配關氏，生四男四女，嗣子尚正，頗有父風，屬銘于

余，余與君善，義不可辭，銘曰：嗟邦之秀，天奪其人，我悲作銘，永安爾神。

菅茶山墓誌

先生姓菅，名普帥，字禮卿，通稱太中，備後神邊人，父稱樽平，諱扶好，母佐藤氏，生三男三女，先生其長也，樽平翁頗涉書傳，佐藤氏亦喜誦國史，能訓其子，先生年未弱冠，遊京師，師那波魯堂，受洛圖之學，與佐良齋中山子幹等交遊，既歸教鄉里，後就其家東北築一塾，對黃葉山，因曰黃葉夕陽村舍，又近茶臼山，故號茶山，備中西山拙齋以同門故，往來最密，拙齋既亡，傍近諸州欲誨子弟者，皆使就學焉，先生素嗜詩，名尤高，福山侯初不聞其名，後聞大驚，命吏廉問，乃得學行兼茂狀，始賜俸祿，又命準儒師員，文化甲子○元年之春，召之東邸，扈駕歸國，尋命編福山志，及修烈祖廟，與督役之，甲戌○十年又召赴東邸，丁丑年七十，賜金爲壽，前後加俸三次，至文政癸未○六年進秩比大目附，丁亥○十年八十，賜章服及魚壽之，是歲病，喞噎終不起，實八月十三日也，門人胥議葬于邑網付谷，葬儀率循古禮，私諡曰文恭，配內海氏早亡，次配門田氏，先一年沒，皆無子，二弟汝榎，晉葆，晉葆才敏善詩，入京授徒，早

沒無後，汝梗亦早亡，有子稱長作，亦沒，其子惟繩，於先生爲姪孫，因以嗣。管氏先是養妻姪門田惟鄰，冒管氏，後復其姓，又延志摩人北條讓爲塾，都講藩召爲文學，亦先沒，養河村氏子退嗣之，初藩數將舉用先生，輒以病辭，藩亦不敢強，特進祿爵以優之，晚年生徒益進，塾不能容，乃請藩登爲鄉校名廉塾，藩歲給金焉，先生既有俸祿，而其自奉極儉，以故家道頗裕，乃盡以買田納之於藩，蓋謀校業弗墜也，先生爲人偉軀幹，方面高額，及老朱顏白髮，望之有威，而接物謙和，恂恂如田舍翁，善談諒，不欲以名高自尊大，無貴賤雅俗，皆不失其歡心，然曉通人情世故，暗辨淑慝，截然不可欺也，天明飢荒，先生出私蓄，率先里豪賑救者，再，邑有遇糶者，窮民將毀其家，先生察其機，喻父老以使無事，又有出死囚免逮獄，招捕亡各得其分，其說經一循傳註，不敢立異教，生徒有常課，不必督促，其著作期於適用，詩尤其所長，務叙實際，而不苟作，鍛煉極至，淡雋穩秀，不見艱苦態，近世詩體一變，然論其洪纖兼舉，風格高逸者，識者獨推先生云，以其溢餘時爲國雅，亦超人意表，平素無佻嗜，好種花竹，置什器，苟有乃止，喜酒不多飲，喫飯亦極少，多病而終得壽者，以此，先生雖在鄙僻，名重一時，清末侯過訪其村居，其東遊也，公侯爭欲識其面，桑名老侯眷遇尤隆，嘗

折梅花副以國雅賜焉，及病，囑遙寄秘藥，昌平三博士以下，諸藩儒雅無不結交，所著有黃葉夕陽村舍詩三編，凡廿三卷，文稿四卷，遊藝日記，室町志四卷，國字成冊者，福山志料三十五卷，冬日影二卷，答問福山風俗五卷，和歌集若干卷，惟柔兄弟夙辱親交，及其疾病，寄遺物於柔，副以片楮，自記其二三行事，人所不及知者，其意似欲托誌銘也，柔受之惻然，亡幾而訃至，嗣子門人等果奉狀來乞銘，誼不可辭，乃銘曰：知止能靜，不貴奚憂，仁義食功，受祿何尤，學開白鹿，齒跨青牛，千首之詩，輕萬戶侯，是其緒餘，道照千秋，安藝賴惟柔撰。

小寺檜園碑文

先生姓源氏，小寺諱清先，通稱常陸介，檜園其號，備中笠岡人，家世奉其邑稻荷祠，考諱清續，稱豐前守，本磯田氏，來嗣小寺氏，故妣小寺氏，先生生而穎悟，八歲能作大字，年未弱冠，往京受業於卜部氏，主親試生徒業，其式頗嚴，諸生踧踖，先生義辨精明，一座肅聽，安永中，卜部氏有疑獄，召先生決之，時年廿六，松岡仲良者爲卜部氏賓師，欲舉先生自代焉，以親老固辭而歸，先生事父，色養致誠，及其歿，居喪過禮，

寬政己未<sup>○</sup>十<sup>○</sup>年以病傳祠職於長子結廬山下自稱檜里適縣令早川君來與鄰校名敬業館請先生爲師講書遣勉應請專講四子六經令君遂請移住館內固辭不得命乃移居館門側仍榜以檜園初邑人專業商販於是漸多向學者令屢代皆敬執弟子禮乃妣小寺氏沒先生亦耆艾其居喪猶如喪考云文政十年丁亥夏患渴閏六月廿六日端座而逝年八十葬于館後山下遺命薄葬遵本邦古禮不用浮屠初娶西山氏生長子清之後配平井氏生顯之廉之定徵顯之定徵先歿清之廉之並有善繼父有女各適人先生自幼慨然謂本邦神聖之教陵遲不振欲以身任之國史註疏莫不講究以爲諸家得失相半山崎氏折衷諸說所發揮不尠得谷川氏日本紀通證其學大備然有未盡其蘊者因著本教闡幽其佗多所述作如三器說國號論謙讓不肯梓行皆藏于家先生爲人明亮卓偉而平坦溫雅不爲奇僻之行燕居獨處無有陪容接其子弟和而不狎事或不如意不敢以怒氣加人諸生或有聞其名而未識面者偶相逢見其卑遜簡點以爲尋常庸人既而知其爲先生瞿然驚謝市井無賴之徒見先生輒畏避之無佗嗜好惟好國雅初學於僧澄月澄月以爲歌道有所掩也詠積至數千首曰檜園集行于世其子弟以狀來乞銘於惟柔先

生所交名士不鮮而西山拙齋菅茶山尤親今皆亡惟柔亦辱知者獨瓦全義不可辭乃作之銘曰日之出沒不貳道原惟正惟大可以範民是我非彼誰執謬論展矣斯人醇乎其醇兼學不誇以修其身其道誰何維人之倫五十而暮舜何人也鄉邑蒙化薄夫亦敦東飽賴惟柔季立甫撰

龜山紀卿碑文

君諱士綱字紀卿俗稱本助其先出備中龜山城主行綱君七歲喪父諱尙事爲嫡母伊藤氏所養事之如真生母後居喪哀戚切至自幼好讀書初學島居實齋菅茶山後師若槻幾齋其爲學以得要爲主奉身儉素處事明斷家產益富年三十二爲戶長兼由義書院事獻金若干賞賜日俸十五口再獻加賜九口俸又獻家藏古金銀於是比廣府大戶長見許通署姓氏爲牙舖主管善通貨財上下以爲便君性恬裕慈恤揚善匿惡音問不怠屢捐資賑窮邑乏水爲穿井獲泉人呼曰萬年井又課廢井者二是以闔鄉歸心常喜文雅之士相延留歡動浹旬嘗學天文曆數又好種藝優游自娛文政丁亥<sup>○</sup>十<sup>○</sup>年七月二十七日病沒年五十八以遺命葬于信行寺後

園元配鳥居氏生二男四女長子長綱襲職養安原氏子道遙爲子以長女妻之季女適福山津川良謙繼室眞鍋氏所生存二女餘皆夭予編藩志屬君以尾道志故相知久矣長綱具狀乞文義不可辭乃按狀題其碑面如此東飽賴惟柔千祺甫撰書并篆額

甲辰紀行

旅ころもはるけくきたるあつまちの

かすみかせきをいつかたつらむ

といひしはきのふけふのとなんおもふへかめるにはや一とせの秋めぐりきぬかの露が關といふはむかしのあとなりとぞたしかなるとはあがかうがへにおよはず南は黒田○福岡侯きたはあが國君重辰の御たちにてぞありぬこぞの秋より家兄○春が世子○淺野齊賢の伴讀をつとめられしかばしたがひてこの邸舎のうちにあるとしよしありてふるさとへ歸るとして旅ころもまた立かへるは天明よつのとし葉月みそかなり

はるやなをあきもさなから立かねて

霞かせきのなこりをそおもふ

一とせをへたてゝこゝにとゝまれは

かすみか關のいとゝたちうき

伊豫の國うどに宮原敬直○號となのるものありむさし野のすえとをくわ

け行んと、服部翁栗<sup>〇號</sup>のもとに來りて、ものまなびてありけるが、ひさしく親見ざるよし聞へ侍りて、うちつれかへるべしと、かねて約しおきぬ、予もまたしばく翁のおしへをうけし事なれば、けふは翁にいとまこひし、敬直と、もにうちつれ立んと行けるが、翁はさけさかな出させて、けふは名残を惜しむ也、朔日なればあす立るべしとありて、予がきのふまで講せし大極圖説の、卒節おだやかならざる所など猶論んじ盡されぬ、土佐の國の箕浦先生立<sup>〇號</sup>はじめ諸藩の人々も、こぞよりなれむつびし事なれば、別をおしむとてみなこゝに來れり、家兄もこゝまで送りまいられしが、三尺をつゝしびてながらはならざりし、翁は夜ふくるまで酒くみ詩もあまたいできぬ、諸子の贈言もあなれどみなこゝにもらしぬ、九月一日、あさとく立出る、翁夫婦はよひよりねもやらず調度にこゝろつけれたり、品川わたりにて送りこし人々を謝して歸しぬ、森信順、池田義方ふたりはさめず<sup>〇駿洲品川町</sup>といへる所にて酒などたうべ、つゝるに馬乳川をもうちわたり、萬年屋と聞へたる茶店にて別る、

さとの名のさめすもあらはくむ酒に

けふのなこりやしはしわすれん

こよひは十塚<sup>塚</sup>戸にとまる、去年下りしは、はらからうちつるゝといひ、供する人もおほかめれば、いかめしくおもほへしに、けふたつ旅ころも、いとことさびしくはあなれど、敬直はまめやかなるおのこなれば、なにかにつけてたのもしく覺へ侍る、二日、江の島を見めぐる、松おい岩そびえ、幽洞怪洞みな世のほかのものに覺ゆ、詩もて見るところを記しぬ、ながければこゝにのせず、島の神辨財天と聞へければ、

このしまにあれます神やしらへけん

おともたへなるいその松かせ

かへるさ遠く見やりて

暮かゝるなみちをとく見かへれば

いろいろすゝみのゑのしまの松

藤澤のひがしより江の島にいたりて、同じ驛の西に出ぬる、日くれ大磯にや



どる、夜ふけ風はげしく吹ぬ、

風ある、おほいそなみのおとたて、

いと、旅寝の夢もむすはし

三日、けふは箱根山こすへしと、夜ふかく立出ぬ、土人の鳴たつ澤とよび來りしあたりはまだいと暗し、松陰のいほりにともし火の影見へ、かねうちたたき、ねぶつの聲きこふも、なにかはしらすあはれに覺ゆ、

秋きりのしきたつ澤のあかつきに

いまもあはれをおもひこそしれ

小田原をとをる比、雨ふり出て、山道になる程、雨もしきり也、余は籃輿にのりたれど、坂けはしくて、あふむけばいたくもぬれ侍りぬ、人馬の上りなやめるを見て、

さかみちのつゝらをりなる箱根山

おもきをおへる馬そあなゆむ

玉くしけ箱ねの山のけはしきを

けふふる雨にいかてこしなん

御關をばさるの時ばかりにこしぬ、三島へとこゝろさしたれど、猶雨もやまず、路けはしくすべりぬれば、夜にかゝりくだらんもさる事ならずと、やどのおうなの呼ばるゝにまかせぬ、此家のあるじ愛相よく、いとねもごろにあつかひ聞へ侍る、柴をりくゆらせたるも、ぬれたる装ひかはかせたるにてぞありける、

はこねやませきをこえし旅人を

なとかとゝめてあめのふるらむ

夜ふくる頃、しかの音あはれにちかく聞ゆ、

あけぬれは猶したふらし箱根やま

夜はのあらしのさそふ鹿のね

四日、夜あけがた立出る、おもひのほかによく晴わたりて、湖水のすみてたゝへたるに、ふじの雪高くそひえたるさまいはん詞もなく、きのふのうさもわすれ侍りぬ、峯を下るに、また鹿の音聞えければ、

はこねやまあくる峯路をこしゆけは

ふたゝびきこふ小男鹿の聲

三島沼津をすぎ、原驛にもなれば、富嶽いよ／＼ちかく見ゆる、むかし〇明和六年

先考〇享のあづまに下り給しを、此ほどすぐるところ／＼おもひ出奉れど、

わきてこのふじのねは、よろこび給し御かほばせをいま見奉るやうに覺へ

侍て、感懐にたへず、すそろにたもとをそぼちぬ、

見し人はきえてはかなき世にもにす

やまはむかしの雪のふしの根

芳原に枕をとる、五日、ふじおろしいときむけれど、曙のけしきまたたぐひな

く覺ゆ、たび／＼笠をさへて、

横雲をたもとになしてふしのねの

ゆきよりしらむあけほのゝそら

やま／＼はまた夜をこめし霧のうへに

まつあらはれて見ゆるふしのね

うちむかふ富士の山まゆいくたひか

人のこゝろをそらになすらん

由井、蒲原など過て、田子のうらをうち見てとほるに、あけはまといふものあり、

たこのうらやあまのおと女子うちつれて

しほくむわさのひまなくそ見ゆ

清見か關も此邊ならんと覺えて、海上の望甚好し、一村しげりてさし出たる

を、三保の松原なりと、こしかくものゝいへりし、おりしも風吹なみたちぬれ

ば、船かりてわたらんも、こゝろもとなくてやみぬ、

あなち吹するかのうみの沖津なみ

うちやよせぬとみほのまつはら

駿府にてよしなほ〇歌がしるべ大森某のもとを尋ね侍れど、他適のよし聞

えて逢はず、夜に入り、安部川をわたりにて、丸子といふ驛にやどる、六日、宇津の

山をこゆる、

宇津の山とくこえ行はあさ露の

をかへのさともちかくなりぬる

大も時雨のあとそしるく見ゆ

つたいろつける宇都のやまこえ

ふじ枝島田にやすらひ大の川をわたる

大井川やすくそわたる此ころの

こゝろにかゝる波さへもなく

菊川ときけば俊基の卿○日野俊基、後醍醐帝謀臣、三年六月二日被斬ころされ給ひしむかしを

思ひ出る詩はあれどうたなしこの日雨ふりぬればみちもはかゆかずさよ

の中山をとをれば日暮になりぬ

秋の旅こゝろいそきてこゆれとも

さよの中山なかは暮けり

げにこの山はいのちなりけりといひけんさにこそありけめ先考のふたゝ  
びこえ給ざりし事をおもひ出奉ればさらぬだにけはしき山道を雨のふる  
夕べいとこえかねて

むかししたふなみたそへつゝふる雨に

こゆるもわひしさよのなかやま

日坂にやどりをとる此みかばかりまへより上州前橋の人に、おくれさきだ  
ちて行たりしが、こよひはひとつやどりにとまりて、いとにぎしく、旅の  
うさを慰めたり、さすがにあづまゑびすなれば、言語もむくつけく、またきゝ  
わけがたけれど、此ほどみちくものかふを見るに、すこしのひがくしげ  
なる事なく、こゝろざしいといさぎよく見ゆれば、西土の人のすがたには似  
ず、こゝろやぶさかなるとは、霄壤不啻と、敬直とさゝやきあひぬ、こよひはな  
にくれとうちものがたらふに、去年淺間山○天明三年七月八日噴火、被害方四十里、死者二萬人の變を  
たゞけば、をのく見たり聞たりし事どもかたれり、前橋の領分も十萬石ほ  
ど納まらざりしとぞ、流民の事もその始末を聞けり、高山彦九郎○名を知り  
たりやとへば、おほくしらす、一人しりたるやうなれどつまびらかならず、  
七日、かけ川の西にいたれば、大なるかね鳥居あり、これ秋葉山にまうでるみ  
ちなり、こゝにて上州の人々にわかる、袋井より見附にいたる、

一むらの松のしけみにたつけふり

みつけのさとをめにかけて行

濱松の驛にいたれば、御大名のとまりなりとていとにぎはし、見ればむらさきに四目結の紋のまくうたせられたり、津和野侯○龜井にやとおもふには、たしてかたはらなるやどに七曜の紋の幕ひきたり、これは布施氏○津和野なり、されば吉松脩も御ともにて下りたらんもやとこゝろづきて、ある侍にとひたれば、これも御ともにさぶらふよしいふ、敬直も都にてしたしくありしとてよろこびあひぬ、いそぎやどかりて、脩の旅宿をとふ、やがてたづねあたりて、かくとあないしたり、ければ、おもひがけぬ事なれば、おどろきよろこびて出で迎ひぬ、こゝは同宿も多ければとて、予がかりをきしやどにうちつれかへりて物語するに、まづ關東の學はいかんといふに、やむを得ず、邪正の論になりて、たがひに輿馬の憊勞もいはず、夜ふけてわかぬ、八日、夜をこめて立たれども、舞坂にいたれば、はやいち番ぶねは出たりと聞へて、しばし茶店に憩ひ、己の時ばかりに船にのれば、風あり、

浪あらしあらゐにいまそふねいたす

これもあよふきわたしなりけり

荒井のせきをわたり、濱名の橋は名のみきゝわたりて、白須賀の驛をすぐるに、しら須賀はしらすけの訛なり、

やとからはねかたかるへし露けさに

夢ともいはねしらすけのさと

九日、御油よりふじ川、岡崎をすぎて、八橋のあとはいづくにやと興卒にとひたれば、こゝより北にあたりてとをからぬよしとふ、こゝも先考の立より給ひし所なれば、

たえたるをおやもみかはのやつはしと

おもへはいとゝあとそこひしき

けには重陽なれとて、池鯉鮒の旗亭にたちよりて、さけなどとのへ、敬直と共に佳節を祝しぬ、

ふるさとを思ふはおなしこゝろにて